

出版する事あるべし(下巻は引續き發行す)

一卷首に全國鐵道略圖を添付する筈にて既に其の製圖をも終りたれども本書を二巻に分ちたる爲め下巻のみを購ふ人は其圖を見るときを得ざるの不便あるを以て更に之を綴込むとを見合せ他日一枚摺に印刷し上巻下巻一時に購求する看客に限りて之を發賣する事とせり

一本書載する所の横川輕井澤間碓氷鐵道は此書の稿を終るまでには未だ開通に至らざれども其の工事の落成は將に近きに在らんとするが故に姑く運輸開通せしものと見做して掲載せり讀者請ふ諒せよ

一本書記する所の里程中鐵道線路は英里を用ひ街道は邦里を用ひたり故に邦里を英里に換算せんとするには〇・四〇九七七九二を乗じ英里を邦里に換算せんとするには二・四四〇三三八二を乗すべし

一各所への里程は皆な停車場を以て起點とせり例へば横濱より金澤まで何里とあるは横濱市中若くは縣廳前よりの里程に非ずして横濱停車場

よりの距離を示したるものなり又其の左右と稱するは東京より西に向つて右又は左を云ふなり

一名所舊跡は近傍停車場の内距離最も近くして且東京よりの順路に當れる部に掲ぐ例へば大阪地方より富士山に登るには鈴川にて下車するが順序なれども此書には東京よりの順路に據りて猶ほ之を御殿場停車場の部に掲ぐるが如し(有名の地に限り特に東西の兩道を掲ぐ)

一書中載する所の人力車、駕籠賃等は概ね停車場内組合に於ける晴天の定價に據れるものなり故に風雨若くは深夜等は凡そ一割より三割までの増錢を拂ふものと知るべし

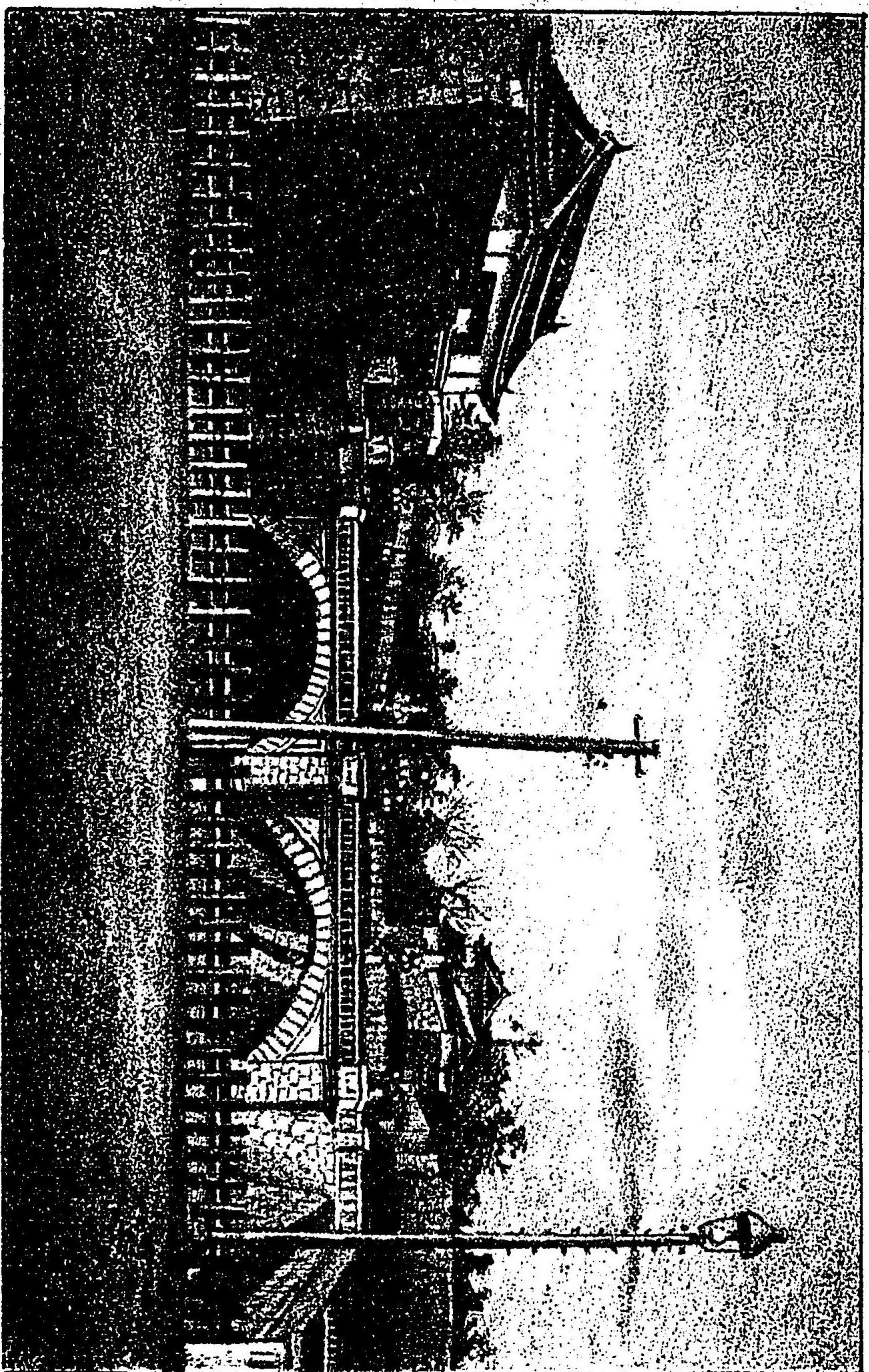
一戸數、物産、山嶽の高度、河流の延長等は概ね沿道各府縣の地誌、一覽表及び日本地誌提要等に據れり而して其の人口のみは明治廿五年内務省第二十九號全國市町村人口告示に基きしものなり

一此書は毎年若くは隔年に漸次遺漏を補ひ終に完全なる Railway Guide

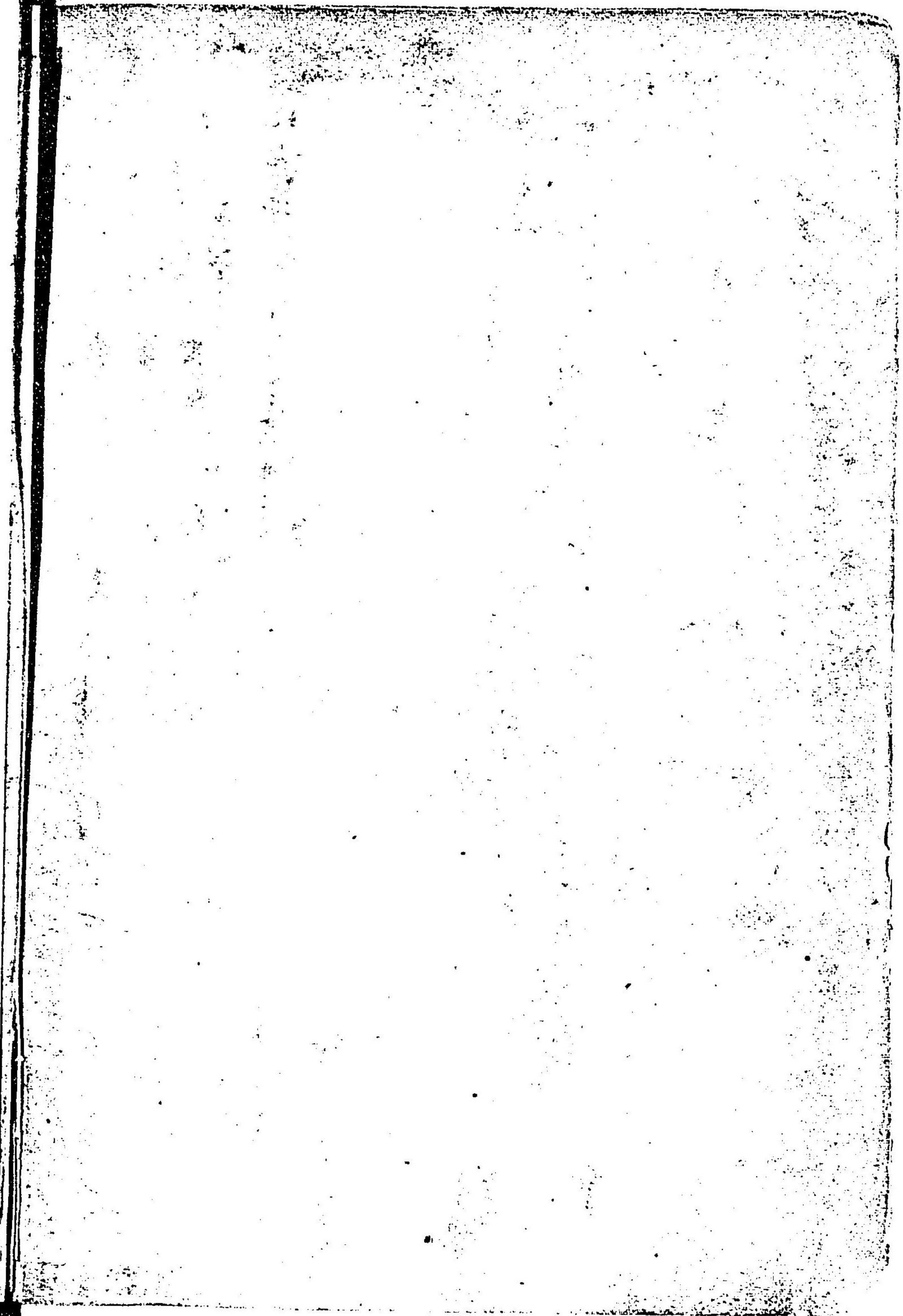
Book たらんとを期するものなり故に讀者にして遺漏誤謬あることを發
見せば幸ひに教示する所あり

明治廿五年十二月

編者謹識



皇立第一高等學校



新橋橫濱間 新橋橫濱須賀國津間

Table of train schedules for the New Bridge to Yokohama and New Bridge to Yokohama via Sagami and Kinki lines. Columns include station names, train types, and departure/arrival times.

新橋橫濱間 新橋橫濱須賀國津間

Main table of train schedules for the New Bridge to Yokohama and New Bridge to Yokohama via Sagami and Kinki lines. Columns include station names, train types, and departure/arrival times.

大府武庫間

Table of train schedules for the Daifu and Bunko lines, including station names and train times.

新 神 戸 間 津 府

Main data table with multiple columns containing names, numbers, and other identifiers. The table is organized into several vertical sections, likely representing different administrative divisions or categories.

Summary table on the right side of the page, containing aggregated data and totals for various categories.

野上 青森 間 大宮 小間 山前 橋 小間 水山 戸 間 宇都宮 日光

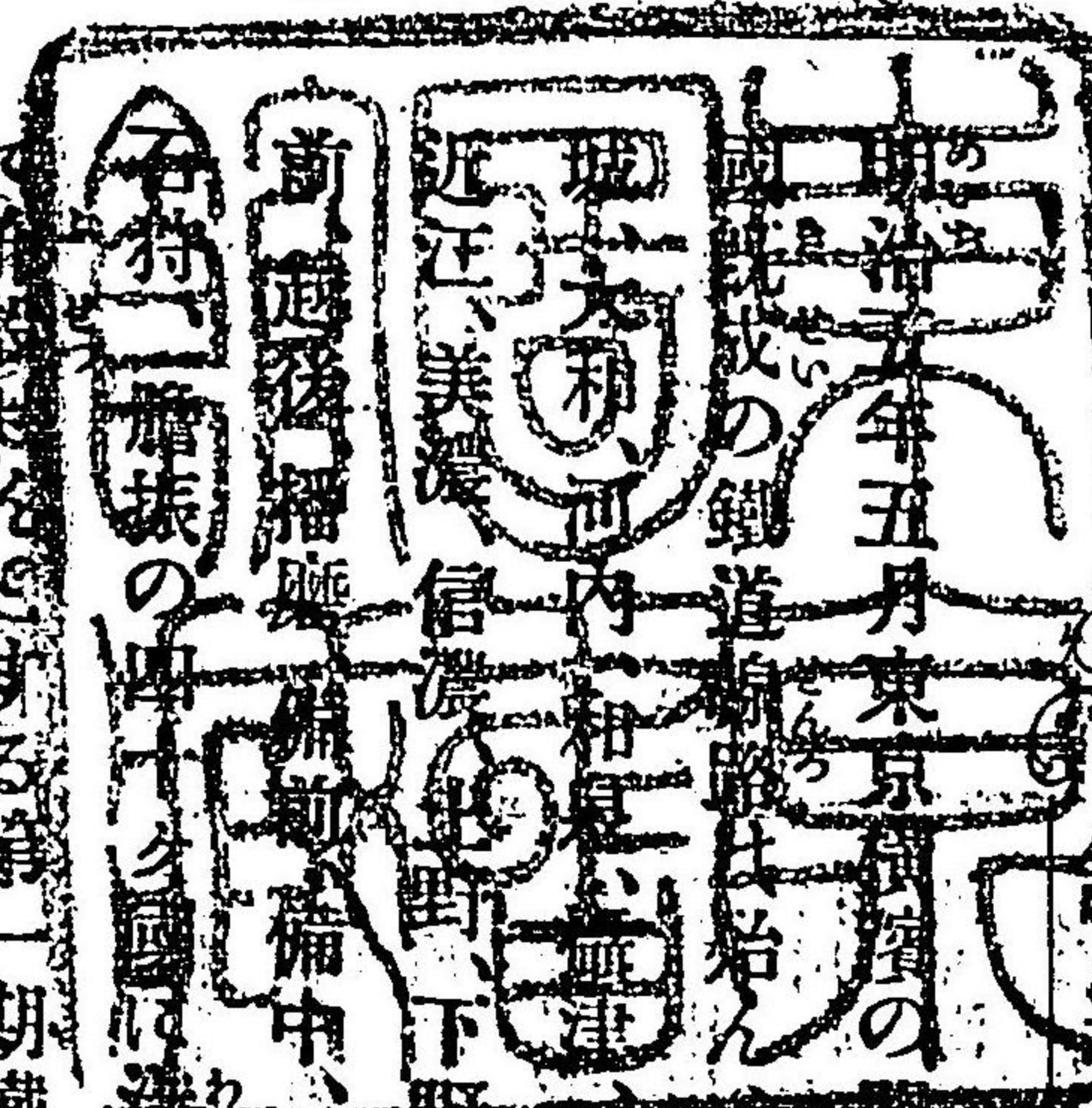
Main table containing train schedules with columns for station names (e.g., 大宮, 小間, 山前, 橋, 小間, 水山, 戸, 間, 宇都宮, 日光) and rows for various train lines and directions. The table is highly detailed with time and frequency information.

東京日本橋区... 印刷

全國鐵道名所案内

東京野崎左文著

鐵道の位置



明治五年五月東京高橋の間に始めて汽車運輸の道を開きしより以來目下全
 國既成の鐵道線路は約二千哩の長さに達し軌道の通過する所實に山
 城、大和、河内、相模、武蔵、伊賀、伊勢、尾張、三河、遠江、駿河、相模、武蔵、
 近江、美濃、信濃、出羽、下野、下總、常陸、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、越
 前、越後、播磨、備前、備中、備後、伊豫、讃岐、筑前、筑後、肥前、肥後、後志、
 石狩、樺太の四十餘國に及び猶ほ本年帝國議會の協賛を經、鐵道廳に於
 て不詳なる第一期鐵道線、并に各私立鐵道會社に於て既に假免狀
 を下付せられ測量若くは工事中的ものを合算すれば其の延長殆んど四五千

哩に及ばんとす亦熾なりと謂ふべし今や全國各既成鐵道の延長を擧ぐれば凡そ左の如し

官設鐵道

新橋(東京)神戶間	哩 三七六、三一
大船橋須賀間	一〇、〇〇
大府武豐間	一一、五四
米原敦賀間	三二、〇一
高崎橫川間	一八、〇〇
橫川輕井澤間	六、七七
輕井澤奥江津間	九二、一〇
馬場大津間(貨物線)	一、二三
長浪深谷間(同上)	九、六五
品川赤羽間	一二、七六
大宮前橋間	五二、三六
上野(東京)青森間	四五四、六六
通計	哩 五五八、二四

日本鐵道會社

岩手鐵道間	哩 四、三三
小山水戸間	四一、四五
宇都宮日光間	二五、〇〇
上野秋葉原間(貨物線)	一一、〇〇
小山前橋間	五二、一七
新宿八王子間	二二、七七
草津四日市間	四九、二五
總山津間	九、六〇
澁川高田間	二二、二一
王寺奈良間	九、四四
難波堺間(狹軌道)	六、一三
神戸三原間	一四三、二四
兵庫和田岬間(貨物線)	一一、六三
通計	哩 一四五、〇六

兩毛鐵道會社

甲武鐵道會社

關西鐵道會社

大阪鐵道會社

阪堺鐵道會社

山陽鐵道會社

九州鐵道會社

門司熊本間 一一二、三一
 鳥栖佐賀間 一五、三〇
 若松直方間 一五、四四
 讚岐鐵道會社 丸龜琴平間(狹軌道) 一〇、一五
 伊豫鐵道會社 外側三津濱間(同上) 四、一八
 手宮峴内間 五六、五二
 峴内太饒春別間 四、三九
 岩見澤空知太間 二四、七五
 砂川吹白内間 八、六四
 室蘭岩見澤間 八三、四八
 哩數合計 千八百十三哩七十九鎖

通計 一三六、六一

炭鐵鐵道會社

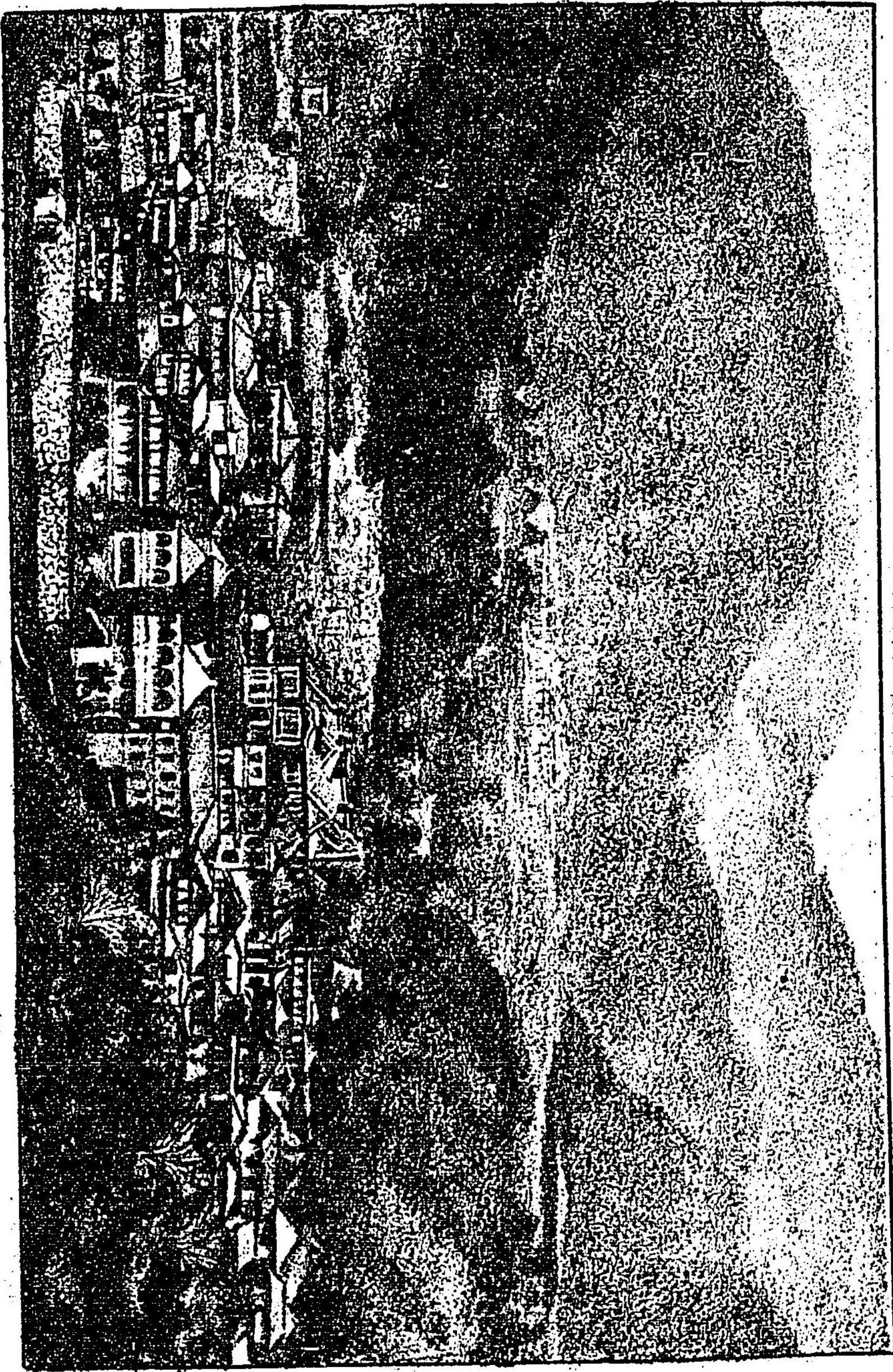
前記各鐵道線路の位置等を知らんと欲する人々は卷首に掲げたる鐵道略圖を見れば一目瞭然たるべしと雖も茲には其の二三幹線に就て聊か説明を

通計 一七八、三八

爲すとあるべし先づ

●東●海●鐵●道● は新橋より概ね國道に沿ひて神奈川驛に至り同所より海岸の舊埋立地なる高島町を経て横濱市に達し同停車場より半哩許りの手前より更に西して程ヶ谷驛に至り行くど半哩餘にして武相國界の小山脈に隧道を穿ち戸塚、大船(大船より横須賀に達する支線あり)藤澤、平塚、大磯等の諸驛を経、西して國府津に達し右折して松田、山北に通じ山北停車場より酒匂川の上流に沿ひ谷賀、竹ノ下の諸村を過ぎ本線路の最も高處なる御殿場に出づ(海面より高さ二千四百九十八尺)此處は懸崖急流大牙相錯はり地形頗る險し故に山を鑿り谷を填め屢々橋梁を架し多く隧道を設く御殿場より南下して神山、佐野の諸村を横斷し沼津驛より復び國道に近き原、鈴川を過ぎ吉原驛の南を経て富士川に達す、富士川は水流の速力一秒時間二十七尺の急流にして架橋の工事頗る困難なりしと云ふ、富士川の西岸より岩淵、中ノ郷等を経て蒲原に出で由比、倉澤、興津、

江尻等を過ぎて静岡に達し國道の南に於て安倍川を渡り九子新田、青木の諸村を経て石部の海岸に出づ石部海岸より線路は絶壁の下を繞り宇都谷の山脈に隧道を穿ち小濱村を過ぎて瀬戸川を渡り藤枝の西、青島村に至りて復た國道に接近し島田驛を経て大井川を渡り金谷驛の南を繞りて牧ノ原の山腹に倚り竟に此山脈を貫きて神谷城村に通ず此間の地形石部以南は斷崖絶壁直ちに海岸に接し所謂大崩の名稱ある所にして暴風の折は激浪岸を打ち動すれば人行を絶つ同村より菊川の溪流に沿ひて掛川に出で西して袋井に近づき高尾村及び中泉驛を経て森村に達し國道の南半哩餘の處に於て有名なる天龍川(橋梁の長さ六百六十間餘)を渡り更に西して濱松驛を過ぎ舞阪に出づ、舞阪新井間は所謂濱名湖の今切にして南は渺々たる太平洋に面し北には湖水を隔たて、遠く峯巒の雲と聯なるを望み風色最も愛すべし、線路は新井の北より右折して中ノ郷、鷺津、新所、岡崎等を経て三川驛に近接し國道を横ざりて豊橋の南に出で夫より



箱根下ノ宮

西向して御油驛の南二哩許りの處を通過し赤羽、大塚の二村を過ぎ星越
 山を貫き復た海岸に近づき更に山麓を迂回して海岸を離れ深溝村を過
 ぎて矢矧川を渡り新堀村を経て刈谷の北に出で境川を渡り右轉して大府
 驛（大府驛より岐れて武豊港に至る支線あり）に達し大高、熱田を経て名
 古屋の笹島に至り清洲、一ノ宮を過ぎ木曾川の南加納町に達し更に西し
 て長良川を渡り大垣に達す大垣の西垂井驛よりは線路の傾斜稍や峻しく
 右曲左折して關ヶ原驛に達し降りて長岡を過ぎ米原に至りて琵琶湖岸に
 出づ（米原より敦賀に至る支線あり）同所より線路は概ね琵琶湖の南岸に
 沿ひ彦根、能登川、八幡、野洲、草津の諸驛を経過し瀬田川を渡り右折して
 馬場驛（大津）に達し逢阪山に隧道を穿ち大谷、山科、稻荷を過ぎて京都の
 七條に達し更に西して桂川を渡り向日町、茨木、吹田の諸村を過ぎ十三、
 神崎の二川を横きりて大阪の梅田に達し又西に迂回し十三、神崎の下
 流を渡り中國街道の北に沿ひて神崎、西ノ宮、住吉の諸村を過ぎて神戸市

鐵道の位置

三ノ宮に至り更に市中を横きりて東川崎町の神戸停車場に達す今東海鐵道全線路中重立たる鐵橋并に隧道等を掲ぐれば左の如し

東海鐵道鐵橋一覽表 長五百呎以上のもの

名稱	位置	總延長	名稱	位置	總延長
六郷川	大森川崎間	一、六五〇	長良川	岐阜大垣間	一、四九〇
馬入川	藤澤平塚間	一、三六八	揖斐川	同上	一、〇五五
富士川	鈴川岩淵間	一、八七四	高宮川	彦根能登川間	八〇四
興津川	蒲原興津間	六四五	愛知川	同上	一、三〇五
安倍川	靜岡焼津間	一、八三〇	仁保川	八幡野洲間	七八一
大井川	島田金谷間	三、三三九	野洲川	野洲草津間	一、七六九
天龍川	中泉濱松間	三、九六七	瀨田川	草津馬場間	一、四五〇
深名湖(第一)	舞阪霧津間	五二六	桂川	京都向日町間	一、一九七
同(第二)	同上	五九二	上神崎川	吹田大阪間	一、三九七
同(第三)	同上	一、五七八	下十三川	同	五〇〇
豐川	豐橋御油間	八一九	下神崎川	大阪神崎間	六二七
矢矧川	岡崎刈谷間	一、一三九	武庫川	神崎四ノ宮間	八三七
枇杷島川	名古屋清洲間	六七〇			
木曾川	本州草津間	一、八七四			

鐵道の位置

東海鐵道隧道一覽表

名稱	位置	延長	名稱	位置	延長
清水戸谷	程ヶ谷戸塚間	六九三	牧之原	金谷堀ノ内間	三、二七三
梅林	國府津松田間	五〇	滿水	堀ノ内掛川間	四二一
箱根(第一)	山北小山間	九三四	高御所	掛川袋井間	二二〇
同(第二)	同上	一、八九二	星越	御油蒲郡	九九〇
同(第三)	同上	一、〇二四	佛生山	米原彦根間	一〇〇
同(第四)	同上	八八六	腰越	能登川八幡間	四六八
同(第五)	同上	九〇五	屋之棟(河底)	八幡野洲間	一七〇
同(第六)	同上	二八五	草津川(同上)	草津馬場間	二二四
同(第七)	同上	七六六	狼川(同上)	同上	二二四
洞(第一)	蒲原興津間	三二七	逢阪山	馬場大谷間	二、一八一
同(第二)	同上	二五〇	芦屋川(河底)	西ノ宮住吉間	三六五
石部	靜岡焼津間	二、八六五	住吉川(同上)	同上	一六五
磯濱	同上	三、一六七	石屋川(同上)	住吉三ノ宮間	二〇〇

東北鐵道 〇は日本鐵道會社の東京上野より陸奥青森に至る延長四百五十四哩六十六鎖の幹線を指すものにして其の線路は途中浦和、宇都宮、

福島、仙臺、盛岡等の市街(縣廳所在地)を通過し青森よりは海上凡そ二十七里にして直ちに北海道函館に渡るの便あり、線路は上野停車場を起點とし上野公園の背後を繞りて北行し王子村を経て岩淵の西、赤羽にて品川よりの支線と合し直ちに荒川の下流を渡りて川口村の西を過ぎ蕨驛の東凡そ半哩の處より稍や中山道の國道に近づき浦和、大宮を経て高鼻村より更に中山道より隔離し右折して蓮田、久喜、栗橋の諸驛を過ぎ栗橋の北に於て利根川の川幅最も濶き處を横ぎり茲より以北は概ね奥州街道に近接し古河、野木、間々田、小山(小山より水戸行并に前橋行の線路あり)羽川、石橋、雀宮各驛の近傍を経て宇都宮町に達す(宇都宮より日光行の支線あり)同所より猶ほ國道の左に沿ひ矢板を過ぎて針生山に小隧道を穿ち古所謂那須野の廣原を北行し上黒川の東半哩許りの處に於て下野磐城の國境を越え東して白河町に達し矢吹、須賀川を過ぎて阿武隈川の西岸に接し郡山、本宮、二本松、松川の諸驛を經過して福島町に着し猶ほ

國道の左に沿ひて北行し瀬上、桑折、藤田、越河、齊川等の西を過ぎて白石町の東端に達し更に白石川の西岸に沿ひて進行し船岡の北一哩許りの處に於て竟に白石川を渡り槻ノ木、岩村、増田等を経て仙臺市に達す同市より線路は急に右折して一大弓形を作し遠く國道の東を迂回して品井沼、蕪栗沼、長沼等の近傍を過ぎ北方、石越、老松、花泉等の小村落を經、一ノ關に至りて復た陸羽街道に接し且概ね街道と北上川上流との中間を經過し前澤、水澤、黒澤尻、花巻、郡山の諸驛を過ぎて盛岡市の西邊に達す盛岡よりは猶ほ街道の西に沿ひて進行し好摩、澁民、沼宮内各村を経て大塚谷に出で山を穿ちて中山に至り中山より猶ほ北行すると一哩餘にして中山峠の隧道あり此の隧道近傍の線路は四十分一の傾斜を以て昇降し隧道中の軌道面は海面を抽くと千四百八十九呎餘實に日本鐵道會社全線路中の最高處とす夫より瀧澤隧道を潜りて小繫に出で又小鳥谷に到る、同所より行くと數哩にして線路は始めて馬淵川を横ぎり茲より尻内に至る間此

の馬淵川を渡ると都て十二回、川は岸高く河底深くして水流殊に急なるが爲に架するに丈高き鐵橋を以てし其橋坑には往々長さ六十尺のものあり故に第六馬淵川鐵橋の如きは車窓より瞰下すれば斷崖絶壁のあはひ石に激し岸を噛むの急流は殆んど橋下四五丈の下にありて身は唯空中を翔けるかと怪しまる線路は猶ほ街道に近接して北行し石切處を経て大向に至るの間四ヶ所の隧道あり大向より北凡そ一哩にして最後に馬淵の本流を渡り急に右折して遙かに國道と隔たり馬淵川の北岸に沿ひて東し其の支流を横ぎりて尻内に達す、尻内は八ノ戸町の爲めに設けたる停車場にして其の距離一里強、茲より稍や海岸に近づき百石、沼崎を経て野邊地に出づ、沼崎の東に小河原沼あり車窓より望めば一湖水の如し又野邊地に至りて始めて海を見るを得べし野邊地よりは再び街道に接し沼館にて國道を横ぎり小湊を経て淺虫に達す茲より線路は近く青森灣の海濱に沿ひ西して青森町に着す、右の内沼宮内以北福岡に至るの間は山高、谷深

くして最も峻嶮を極め工事頗る困難なりしと云ふ而して其の鐵橋及び隧道は左の如し

東北鐵道鐵橋一覽表 延長五百呎以上のもの

名稱	位置	總延長	名稱	位置	總延長
戸田川	赤羽浦和間	三、〇三二	鳴瀬川	鹿島壘小牛田間	五七九
利根川	栗橋古河間	一、五二七	迫川	瀨峯石越間	五七一
西鬼怒川	宇都宮長窪間	八三五	膽澤川	前澤水澤間	六五一
東鬼怒川	同上	一、四三五	和賀川	水澤黒澤尻間	一、二八〇
帯川	矢板西那須野間	九七〇	豊澤川	黒澤尻花巻間	五八五
須川	松川福島間	六八一	栗石川	日詰盛岡間	七八六
名取川	増田仙臺間	六九六	鬼怒川(水戸線)	結城川島間	六九四

東北鐵道隧道一覽表

名稱	位置	延長	名稱	位置	延長
針生	矢板西那須野間	四六二	根廻	松島小牛田間	五四八
平石	松川福島間	七九二	有壁	花泉一ノ關間	八八六
城山	白石大河原間	一、二二二	大塚谷	沼宮内中山間	七六二

中山峠	中山小島谷間	五二八	一日市	三ノ戸尻内間	五七四
瀧澤	同	三三〇	滝	尻内下田間	五四九
小瀧	同	五四三	姉沼	下田沼崎間	四六一
野見	同	二九三	二ツ森	沼崎野邊地間	三九三
鳥越	小島谷福間間	二、一五二	土屋	小湊淺虫間	一、〇五四
目時	同	三、四九八	善知鳥	淺虫青森間	二七八
小中島	福間三ノ戸間	一、四五〇	久栗坂(第一)	同	三六三
	同上	六二〇	同(第二)	同上	七二四

北越鐵道 茲に北越鐵道の名を負はしたるは日本鐵道會社の大宮高崎間と官設鐵道の高崎直江津間を併稱する爲めに設けたる假名にして線路は大宮驛より東北鐵道の幹線と岐れて北行し始終中山道の國道に沿ひて西北の方に向ひ上尾、桶川、鴻ノ巣、吹上、熊谷、深谷、本庄、新町、倉賀野諸驛の近傍を経て高崎に至り更に西して板鼻、磯部、松井田の諸驛村を過ぎ横川より凡一哩半にして碓氷峠の峻嶺に達す、横川輕井澤間六哩七十七鎖の内五哩間餘の處は日本既成鐵道中第一の難處にして其傾斜十五分

一の割合を以て上下し且峠を穿つに二十六ヶ所の隧道を以てす而して此の五哩間の鐵道は獨逸の「アプトシステム」に據りしものなれば軌道の中央には其形ち鋸を逆さにせしが如き三條の「ラック」なるものを設け機關車にも亦齒車を備へ其の齒車は「ラック」の齒を咬へつゝ昇降するの仕掛にして我邦にて「アプトシステム」を採用せしは實に碓氷峠を以て嚆矢とす其の奇觀想ふべきなり又前記廿六隧道の延長を合算すれば其長さ一萬四千六百呎餘即ち二哩四十鎖餘となるを以て横川輕井澤間三分ノ一は隧道を以て埋められたるの割合にして兩停車場間片道の汽車運轉時間を一時三十分間(徐行)とすれば其内三十分の間旅客は暗黒世界を旅行するの思ひを爲し一隧道を過ぐれば又一隧道を迎ふる等其の奇云ふべからず既にして輕井澤に達すれば線路は再び水平に復し小諸驛よりは北國街道と千曲川との中間に並行して上田坂城等を過ぎ屋代鹽崎の間に於て竟に千曲川を横斷し長野町を経て猶ほ北行し牟禮柏原の間に於て二ヶ所の隧

道を穿ち信越國境を経て關川に出で國道と關川の上流に沿ひて東北の方に向ひ關山新井二驛を経て高田町に達し猶は進んで直江津に至りて止む、横濱より品川、赤羽を経て大宮に達し而して此の北越線路に據れば日本本島の幅最も廣き所に於て之を南北に横ざり得るものにして南海北海交通の上に取りては至便の線路と云ふべし、例に依り其の鐵橋、隧道表を掲ぐれば左の如し

北越(假名)鐵道鐵橋表 延長五百呎以上のもの

名稱	位置	延長	名稱	位置	延長
神流川	本庄新町間	一、〇二六呎	千曲川	尾代篠井間	六九四呎
烏川	新町高崎間	四九七	犀川	篠井長野間	八六二
碓氷峠(第一)	横川輕井澤間	六〇〇呎	碓氷峠(第十六)	横川輕井澤間	八六四呎
同(第二)	同	三一六	同(第十七)	同	五四七
同(第三)	同	二三七	同(第十八)	同	二二一

北越(假名)鐵道隧道表

同(第四)	同	上	三一〇	同(第十九)	同	上	八一八
同(第五)	同	上	七八五	同(第二十)	同	上	五八八
同(第六)	同	上	一、七七二	同(第二十一)	同	上	九三〇
同(第七)	同	上	二四七	同(第二十二)	同	上	一七八
同(第八)	同	上	三〇〇	同(第二十三)	同	上	五八九
同(第九)	同	上	三八九	同(第二十四)	同	上	三二九
同(第十)	同	上	三二六	同(第二十五)	同	上	九九
同(第十一)	同	上	三五三	同(第二十六)	同	上	一、三八六
同(第十二)	同	上	三六三	大廻	牟禮柏原間	上	三九六
同(第十三)	同	上	七四九	戸車	同	上	四七七
同(第十四)	同	上	七八五	阪口	田口關山間	上	二二一
同(第十五)	同	上	五六一				

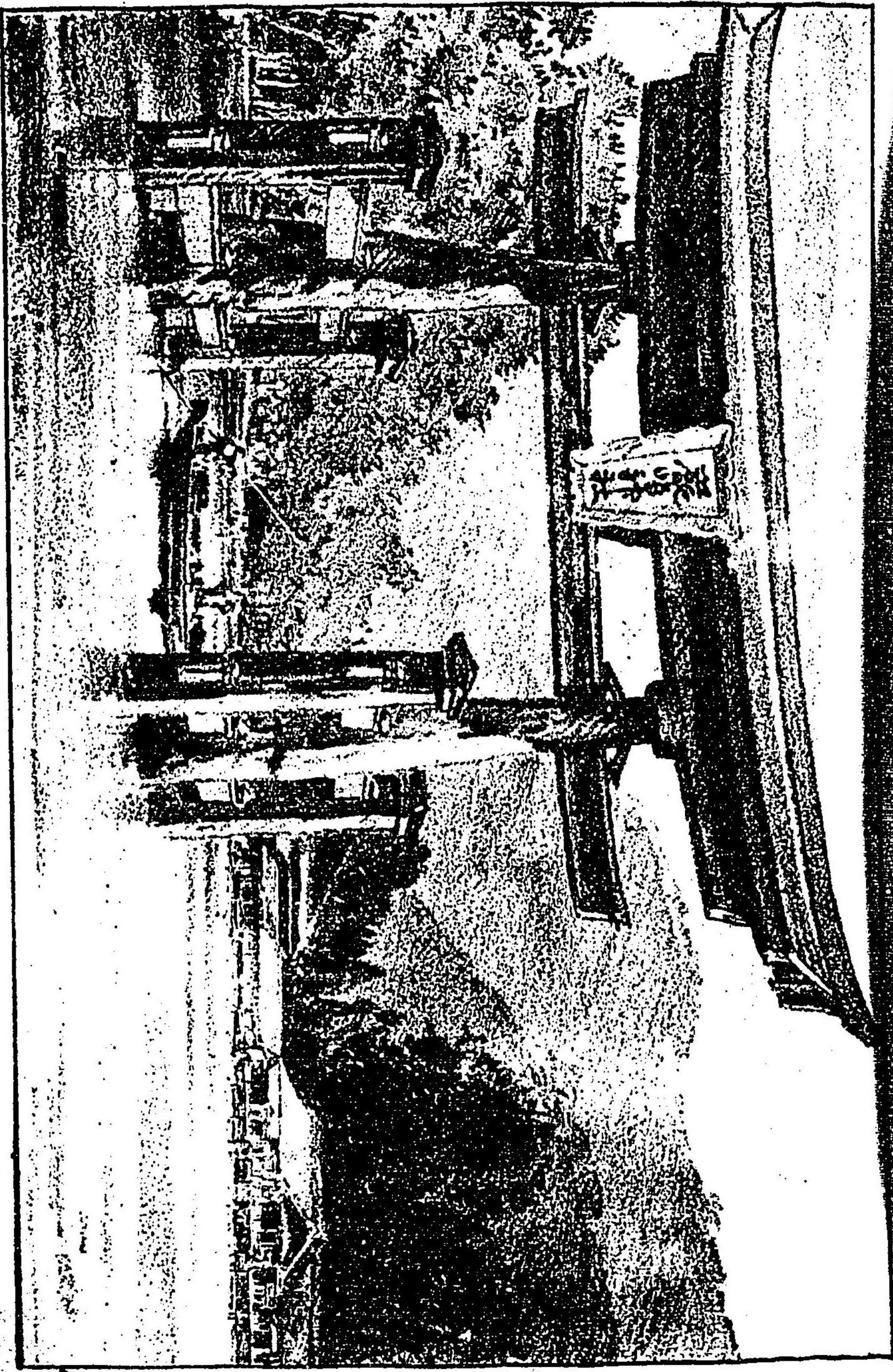
關西鐵道 一は伊勢の津市より發して北行し一は四日市町より發して

西南に向ひ東海道の龜山驛に於て兩線相合し西して關驛を過ぎ鈴鹿山脈の南大岡寺峠を経て伊賀の上柘植村に出で右曲して伊賀越の西を通過し横田川の上流なる溪川に沿ひて瀧、池田、深川等の小村落を過ぎ三雲に至

りて復た東海道の國道に接し石部驛を経て草津に達し茲にて東海鐵道の官線と連絡するものは是を關西鐵道と爲す其の全線路中には著大の橋梁なきも二三隊道を擧ぐれば即ち左の如し

關西鐵道隧道表

名稱	位置	延長	名稱	位置	延長
大砂川(河底)	石部三雲間	四四呎	加太	上植柘關間	三、〇四八
由良谷川(同上)	同 上	四〇	坊谷	同 上	五二六
屋棟川(同上)	同 上	八六	金場	同 上	七〇八
山陽鐵道	は官設東海鐵道の最終停車場なる神戸を以て起點とし湊川の河底を貫通して兵庫に至り播州街道に沿ひて須磨、垂水、明石、大久保等の諸驛を過ぎ加古川の下流を渡り北行して姫路市に達し猶ほ國道に沿ひて網干、正條に達す(正條にある停車場を龍野と稱すれども停車場より龍野町までは猶ほ五十餘町の距離あり)茲より線路は那波、有年を経て一		大屈曲を爲し播磨、備前の國界船阪峠を貫きて三石に出で國道の北半哩		



景遠社神島巖

許りの處を並行し長岡に至りて再び國道と合し西して岡山市に達す同所よりは稍や三備の海岸に近づき倉敷、庭瀬、玉島、笠岡、福山、松永等の諸驛を経て尾ノ道に至る、尾ノ道以西三原より廣島までの間は一時鐵道敷設の工事を中止せしも山陽鐵道會社にては其の利益なるを感じ曩に株主總會を開きて廣島市まで線路延長の件を議決したれば不日竣工の上は旅客に一層の便利を與ふるなるべし、同線路中の著大なる橋梁并に隧道を擧ぐれば左の如し

山陽鐵道橋梁表

延長五百呎以上のもの

名稱	位置	總延長	名稱	位置	總延長
加古川	加古川阿彌陀間	一、三三五	金剛川	吉永和氣間	五九九
市川	阿彌陀姫路間	一、八二一	吉井川	和氣瀬戸間	一、五〇四
夢前川	姫路網干間	八四〇	百間川	長岡岡山間	八四一
林田川	網干龍野間	五三七	旭川	同上	九〇一
揖保川	同上	一、〇一六	芦田川	福山松永間	七二〇
千種川	有年三石間	一、三二一			

山陽鐵道隧道表

名稱	位置	延長	名稱	位置	延長
湊川(河底)	神戸兵庫間	一八〇	金	峰	一、六四三
船阪峠	有年三石間	三、七三三	笠岡福山間		

兩毛鐵道 は日本鐵道會社東北線の小山驛より起り西北に向ひて朽木町に達し左折して岩舟、佐野、足利、小俣の五驛を過ぎ上野下野の國境を経て渡良瀬川の右岸に近づき終に桐生の西に於て渡良瀬川を渡り大間々より屈曲して稍や南に向ひ國定を経て西し伊勢崎を過ぎて前橋町に達す其の延長五十二哩餘、高崎よりは直ちに直江津行の線路と連絡するの便利あるを以て東國より信越地方に赴かんとする旅客は此の鐵道に據るを常とす、全線路中隧道なく橋梁は渡良瀬川、思川等を以て最とす

水戸鐵道 は日本鐵道會社に屬し前記の小山驛より兩毛線路と反對の方向に向ひ結城町を経て鬼怒川の本流を渡り岩瀬驛に近く頃南に筑波、加波の二山を望み笠間、宍戸、内原を経て水戸市の南、仙波湖の北に達し

荷物線は猶ほ進んで那賀川の物揚場に至る其の延長四十二哩、途中著大の橋梁は唯だ鬼怒川鐵橋のみにして其長さは六百九十四呎なり

甲武鐵道 は東京新宿より中野村に至り茲より一直線を作して荻窪、境、國分寺、立川諸村を過ぎ立川より左曲して多摩川を横ぎり日野驛を経て八王子町に達する延長僅かに二十二哩餘の短線路なり

大阪鐵道 は大阪湊町より起り今宮の南に於て阪堺鐵道の上を横ぎり東して天王寺村に至り更に南行して平野、八尾、柏原の三驛を過ぎ大和川のの上流に沿って信貴山の南を迂回し河内、大和の國境を過ぎ竟に大和川を渡り王寺村に至り茲より一線は右折し下田を経て高田に達し他の一線は左折して再び大和川の上流を渡り法隆寺、郡山を過ぎ東して奈良に達す其の延長は二線を合して三十二哩五十五鎖なり

此他九州には九州鐵道、筑豊炭鐵道あり四國には讚岐鐵道、伊豫鐵道あり北海道には北海道炭鐵道あれども其の位置等は略圖に譲りて茲に詳

記せず讀者請ふ諒せよ

東海鐵道

茲に東海鐵道と名くるものは東京新橋より神戸に至る幹線と大船より横須賀に至る支線、大府より武豊に至る支線とを併稱するものにして全線路中停車場の數八十三ヶ所、右幹線の内通し切符を以て旅客の隨意に下車し得べき停車場は品川、横濱、大船、國府津、御殿場、沼津、静岡、濱松、豊橋、大府、名古屋、岐阜、大垣、米原、彦根、草津、馬場(大津)、京都、大阪の十九ヶ所とす(通し切符とは五十哩以上の乗車券を云ふ、此切符を所持する旅客は其途中前記の各停車場にて下車し再び乗繼ぐとを得るものにして其の切符は旅行哩數の長さに隨ひ通用期限にも亦差異

あり委くは瀛車時間表備考の部を覽るべし)今旅客は東京を發して西行するものとし其の遠近の順序に依り各停車場より到るべき名所舊跡等の案内を爲す左の如し

●新橋停車場 (東京芝區芝口に在り)

西は神戸を経て備後の三原に至り西北は米原より岐れて越前の敦賀に至り東北は品川赤羽を経て陸奥の青森に至り北は碓氷峠を経て越後の直江津に至る等現今既成鐵道(九州、四國、北海道を除く)一千三百四十餘哩の起點とも謂ふべき重要停車場にして其の位置は東京市の南、新橋汐止橋との間芝口一丁目の東に在り、此地より神戸に至る通し列車は一日三回、其他大垣に至るもの濱松に至るもの静岡に至るもの各々一回つゝの發車あり又國府津、横濱并に赤羽に至るの列車は猶ほ一日數回新橋を發し旅客の上下、荷物の運送等頗る繁忙を極む、東京市内の記は別に「東京獨案内」等の書數種あるを以て茲に縷記するを要せずと雖も唯だ鐵道旅客の

便利ともなるべき事柄を擇びて左に略述せん

○東京市 は輦下の地、方四里人口百十三萬餘の大都會にして中央集權の世我が全國の政治、文學、法律、經濟、農商工の智識は一たび此地に集まりて復た各地方に分散すると宛も一の腦髓が全身を支配し血液を四支五体に循環せしむると相似たり宮城新築成りて隣鳴き鳳謠ひ百官公務忙はしくして國豊かに民潤へり所謂市内と稱する區劃は麴町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤阪、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、淺草、本所、深川の十五區より成り人家稠密車馬輻輳其の繁華の狀は拙筆の盡し得べき所にあらず、鐵路は四通八達其の市府に接近せる停車場を新橋、上野、秋葉原(荷物)品川、目黒、澁谷、新宿、目白、板橋、王子の十ヶ所とし新橋よりは淺草上野に至る鐵道馬車あり、新橋品川間、新宿萬世橋間其他新橋より兩國、淺草に至る乗合馬車もあり又兩國よりは下總通ひの馬車日々數回往復し越前堀よりは上總の木更津、北條及び浦賀を経て伊豆の下田港へ航

行する小蒸氣船あり、新橋停車場近傍には鐵道荷物回送問屋、旅店等軒を並べ場内には人力車組合なるものありて帳場より定價の切符を出し其の切符を以て組合人力車へ隨意に乘車せしむ此組合人力車に乗れば途中車夫の爲めに増賃を請求せられ又は酒手をねだらるゝ等の憂なきを以て始めて東京に遊べる旅客に取りては至極便利ならん今新橋より市内重立たる各地への距離并に人力車賃を擧ぐれば凡そ左の如くなるべし

◎新橋より各所への距離并に人力車賃

	距離	人力車賃		距離	人力車賃
宮城二重橋	二十町	五錢	向島枕橋	一里二十八町	十八錢
赤阪離宮	三十二町	八錢	木母寺梅若塚	二里二十四町	三十錢
日本橋	二十町	五錢	深川公園	一里十二町	十二錢
兩國橋	一里〇五町	十錢	芝公園	十五町	四錢
上野公園	一里十八町	十四錢	芝太神宮	十三町	四錢
淺草橋	一里〇四町	十錢	愛宕山	十六町	四錢
淺草公園	一里二十四町	十五錢	日枝神社	二十町	六錢

龜戸神社	一里三十二町	二十錢	蠅壳町水天宮	三十町	七錢
神田神社	一里十町	十二錢	永代橋	三十二町	八錢
湯島神社	一里十二町	十二錢	傳通院	一里二十町	十七錢
西本願寺	十四町	四錢	根津神社	一里三十二町	二十錢
東本願寺	一里二十二町	十五錢	平河天神社	一里	十錢
萬世橋	一里〇四町	十錢	氷川神社	二十五町	七錢
九段阪下	一里〇四町	十錢	千住大橋	二里二十五町	三十錢
琴比羅神社	十四町	四錢	豐島岡公園	二里十町	二十六錢

〔備考〕右の内人力車賃は一人乗にて晴天白晝の賃錢を掲げたるものなれば雨天夜間又は二人乗等は多少の割増あるものと知るべし、以下記載の人力車賃皆之に倣ふ〇新橋より鐵道馬車に乗れば日本橋まで二錢、淺草橋まで四錢、萬代橋まで四錢、上野黒門前まで六錢、淺草雷門まで六錢なり

又市中重立たる遊覽地を擧ぐれば

宮城二重橋 宮城は麴町區内に在りて周圍二十町十五間餘、人皇百三代後花園帝の御宇鎌倉管領上杉憲忠の臣太田道灌の築く所にして長祿元年其工を竣へて道灌茲に移住す文明十八年道灌薨せられし後は上杉定

政の所有となれり大永四年北條氏綱攻て之を拔き氏綱の臣富永遠山兩氏をして之を守らしむ其後氏康、氏政、氏直に至るまで都て四代の間北條家に屬し天正十八年の秋北條家豊臣秀吉の爲めに没落し爾來永く徳川氏の居城と爲る當時は毎歲八月一日を八朔と稱して祝賀せり是れ徳川氏入城の紀念日なりしが以なり、慶應三年徳川慶喜公政柄を奉還して退城し明治元年鳳翥東行同城を以て皇居と定めらる、明治六年五月皇居炎上峻殿傑閣一時に灰燼に化せしを以て同八年御造營經始の御布達あり同十二年全く新築の工を竣へ同年一月十一日御移轉あらせられ乃ち宮城と稱せらる、宮城内の御摸様は吾々下民の窺ひ知る所にあらず只だ二重橋より遙かに宮闕を拜して萬歳を祝し得るのみ、二重橋とは宮城の正門舊西九大手門の橋と書院門の橋とを併稱するものにして一は石橋、一は鐵橋之を東より望めば二橋相重なりて見ゆるが故に斯くは名けたりと云ん、濠の石垣を隔て、正殿、溜りの間、豐明殿等の棟を望み書院門の西に方り

て舊書院櫓の聳ゆるを見る

赤阪離宮　は喰違門外赤阪區元赤阪町に在り此地は元和歌山藩の邸第にして堀端に猶ほ紀伊國阪の名を存す皇城災上の後ち一時假皇居と定められ内閣及び宮内省等をも構内に移されしが宮城新築成りて御移轉あらせられてより皇太子殿下の御所となれり、離宮の南隣に青山御所あり是れ皇太后宮の御所にして其の御苑は離宮と相接するを以て御庭續きに往來するを得るよしに承はる

上野公園　は上野三橋の北、不忍池の東にある丘岡にして古忍ヶ岡の名あり徳川家康公入國の頃藤堂和泉守此地に邸第を起し其の地形の伊賀上野に相似たるを以て更めて上野と稱す寛永初年徳川氏藤堂をして邸を染井に移さしめ其跡に東叡山寛永寺を草創して徳川氏代々の香華院となす舊時は金殿玉樓頗る壯麗を極めたりしも惜いかな明治戊辰の兵燹に罹り堂宇概ね烏有に歸せり、明治六年此地を公園と定め爾來諸人をして

隨意に園内を遊覽せしめ且内國勸業博覽會、繪畫共進會等を此地に開けり、園の西北に東照宮あり寛永三年の創建にして徳川家康の靈を祭る其他清水觀音堂、大佛、五代將軍靈廟、彰義隊の墓碑、博物館、美術學校、動物園、圖書館等は皆園内にあり春時櫻花の爛熳たる頃は遊人西より東より蟻集し平日と雖も遊歩を此園に試むる者頗る多く實に淺草公園と相並びて東京屈指の遊園地たり

不忍池　は東叡山(上野公園)の西麓に在り廣さ十町許り池中蓮多く毎歲七八月の頃露を帶る紅白の花は艶を競ひて芬芳人の袂を襲ふ、中島に辨才天の社あり一條の寢路之に通じ池畔には酒樓茶店軒を並ぶ近ごろ其同競馬會社なるもの池の周圍に圓馬場の埒を設け大に一体の風致を損せり辨才天靈あらば終に天然の美形を俗了せられしを憤はるなるべし

淺草公園　は金龍山淺草寺境内より其西數百萬坪の區域を有し第五區第六區には凌雲閣、花屋敷、パノラマを始めとして數軒の觀物小屋ありて

四時遊人群集し最も繁華を極むるの地なり、淺草寺は天台宗にして本尊の觀世音菩薩は世に其丈一寸八分と言傳ふれども往古より秘佛として輒く人に見せざれば其虚實を知るに由なし今の本堂は寛永十九年回祿の後ち慶安三年徳川氏の建立に係り爾後絶えず幕府に於て修繕を加へ來りしものにして堂の廣さ十八間四面、草創の時より算へ來れば實に一千二百有餘年の古刹たり、山門は樓上に文珠菩薩の像を安し樓下の左右には金剛力士の像を安す故に仁王門と呼べり又五重の塔は山門を入りたる右の方にありて堂中に五智如來を安置すと云ふ其他淺草神社、念佛堂、護國殿、閻魔堂、錢瓶辨財天の祠等は皆園内にあり

芝公園 是新橋停車場より西南に當れる三縁山増上寺の境内にして園内に増上寺、東照宮、辨天の祠、徳川氏靈廟等あり園の南隅圓山に登れば品川灣を隔て、房總の峯巒を遠望し頗る風色に富めり、三縁山増上寺は廣度院と號し關東淨土宗の總本山十八檀林の冠首にして古は盛大なる

巨刹なりしも維新以後漸く衰微し明治六年兇徒の爲めに本堂を焼亡されし後は寺内愈々寂寥を極めたりしが此頃本堂の再建成り稍や舊觀に復するを得たり、東照宮は本堂の南に在りて元と安國殿と號す社殿の壯觀なるは上野東照宮と匹敵し金色燦爛人の眼を射る又本堂の背後字紅葉山に紅葉館なる公會場ありて料理屋を兼業とし其傍らに能樂堂あり皇太后陛下屢々此處に行啓せしよし能樂を御覽せらる

日枝神社 は麴町區永田町二丁目にあり府社にして俗に日吉山王と稱す、本社は淳和天皇の御宇天長七年慈覺大師勅に依りて武藏國入間郡に勸請せしを文明年間太田道灌此の三所の神を星野山より江城梅林阪の邊に遷す其後徳川氏入城の後ち三たび遷坐し承應三年終に今の地に社を造營せり當時は徳川氏の産神として崇めしかば詣人殊に夥多しく隔年六月十五日には大祭を行ひ山車練物等を出すなど市中の賑ひ譬ふるに物なく京都の祇園會と並び稱せられしが維新以來其の祭事も大に衰へたるが

如し、今は境内を公園地と爲して星ヶ岡公園と稱す
 富ヶ岡神社 深川永代橋の東富ヶ岡門前町に在り本社の祭神は應神
 天皇にして足利氏累世之を崇信し次で太田道灌も亦深く信仰せり、社は
 元砂村の海濱に在りしを寛文四年今の地に遷して新たに社殿を造營せし
 と云ふ境内に末社多く又掛茶屋割烹店等檐を並ぶ、祭禮は隔年八月十五
 日を以て行ひ神輿は永代橋に渡御して即日歸社するを例とし是日は山開
 きと稱へ別當大榮山永代寺に於て庭園を開きて衆人の縦覽に供へしが今
 は大方廢れたり、明治六年境内を公園地と定めて深川公園と名け上野、淺
 草、芝、星ヶ岡、深川を以て東京市内の五公園とす
 日本橋 是東京市の中央日本橋區の通一丁目と室町一丁目との間に架
 渡したる長さ二十八間の木橋にして車馬絡繹人行織るが如く實に東京第
 一の熱鬧地なり此橋は日本八十餘州の里程を計る起點元標にして其名普
 く都鄙遠近に聞えたるれども橋の構造は壯麗堅牢ならず却て之に隣れる江

戸橋、西河岸橋等に劣る所あるが故に初遊の田舎人等は此橋を覽て往々
 失望する事ありとなん、然もあるべし

兩國橋 是隅田川の下流兩國吉川町と本所元町との間に架せる長さ九
 十六間の木橋(鐵柱)にして明治八年新たに架換へたるものなり舊橋は萬
 治六年始めて之を架し當時は大橋と呼び又武藏下總の堺にあるを以て兩
 國橋の名あり中古利根川を以て兩國の境となせしより本所の地も武藏國
 に屬せしと雖も橋名は猶舊きに從へり、此地は古來繁華を以て稱せら
 れ晝夜行人の絶え間なきが中にも毎歲七月中旬川開きと名けて煙火の戲
 を催す時は兩岸の酒樓茶店は云ふまでも橋上岸頭には數萬の觀者雜沓し
 水上には千百の遊舟舳艫相脚み其の壯觀言ふべからず又橋の西を廣小路
 と云ひ其北を柳橋と稱し東京有名なる狹斜の地とす

淺草橋 是兩國の西二三町神田川の下流に架せるものにして昔は此
 處に見附ありしを明治七年見附の石を毀ちて橋材となし以て此の石を遣

る橋上平坦にして能く車馬を通じ橋下は半圓形を爲して一柱を用ひず、地淺草の通路に方るが故に行人常に夥し

萬世橋 は須田町より下谷への通路にして元の筋違橋と昌平橋とを廢して其間に架す長さ十六間幅六間皆石を以て疊み橋下に雙眼を開きて舟の來往に便す側面より望めば眼鏡の下半を覆ひたるが如く見ゆるを以て俗にめがね橋の名あり、橋の南にある高丘を駿河臺と云ふ此處より富嶽を望むに猶ほ掌上を視るがごとし故に此名あり又對岸にあるを元の聖堂とし今は文部省の管轄となれり

九段阪靖國神社 九段阪は宮城の北方、飯田町より番町に上る峻阪の名にして阪上に石燈籠あり、阪の上數町の庭園を圍み梅櫻の梢を凌ぎ巍然として巨棟の聳ゆるものを靖國神社とす、社は明治二年の創建にして國事の爲めに死せし者の靈を合祀し社前に唐銅製の一大華表あり毎歲七月四日より三日間本社に於て大祭を執行し競馬、角力等の催しもありて

觀者非常に雜沓す、大華表の右にある巨大の西洋館を遊就館と云ひ館内に古今の兵器一切を陳列し大祭日、日曜日限りて衆庶の參觀を許す

神田神社 は萬世橋の西北神田宮本町に在り社傳に曰ふ本社は天平二年の鎮座にして遊行上人第二世眞教坊東國遊化の御柴崎村より此地に遷し將門の靈を合せて二座とし社の傍に一字の草庵を結び之れを芝崎同場と號すと其後慶長八年本社を駿河臺に遷し元和二年復今の地に遷して神田明神と稱せり、明治七年祠典を正し大貴已尊を以て本社祭神とし將門は反逆の臣なるが故に斥けて攝社に置く、祭祀は隔年九月十五日に行ひ山車練物を出す等其の賑ひをさく山王祭に譲らず所謂神田祭是れなり又境内に到れば東京市東南の方を一望し其の光景上野愛宕に次ぎ境内茶店揚弓店等多し

湯島神社 は神田明神の北湯島天神町に在り太田道灌江戸の靜勝軒にありし時夢中感ずる所ありて西京北野なる菅神の社に摸して茲に創設す

と云ふ境内は高丘に在るを以て眺望快潤社前に數株の梅櫻を栽る且近頃境内の人家を取拂ひて遊園地と爲したれば大に舊觀を改め四時とも騒客の清遊に適する所とはなりぬ

愛宕神社

は芝愛宕町の高丘にありて俗に之を愛宕山と呼ぶ、昔は行基大師の作地藏尊を祭れる佛寺なりしが維新の際神佛混淆の名分を正して之を愛宕神社と唱へ村社に定めらる當山は懸崖壁立し正面に二條の石階ありて峻しきを男阪と云ひ緩なるを女阪と云ふ境内には愛宕館なる五層樓其他二三の茶亭ありて眺望絶佳の地なり

琴比羅神社

は虎ノ門外琴平町舊京極の邸内にあり祭神は讚岐の象頭山より勸請せしものにして大物主の神并に崇徳天皇とす毎月十日祭祀を行ひ是日參詣する者頗る多く縁日商人の露店、植木屋、觀物小屋等は數町の長さに渉り其の繁榮は蠣殻町の水天宮と頤頤せり

水天宮

は蠣殻町三丁目有馬氏の邸内にありて安徳天皇、建禮門院、二

位平の時子等を祭る本社は筑後久留米にあり古より靈驗著るしとて參詣する者陸續絶えざるが中にも毎月五日は社務所より神符を出すを以て詣人殊に多く社前には露店連なり繁昌云ふばかり無し

護國寺

は音羽町の北に在り神齡山と號し眞言宗にして和州長谷小池坊に屬す往時は寺領千二百石を附せられ頗る盛大の佛刹なり又本尊如意林觀音は瑪瑙石の天然物なりと言傳ふ、護國寺の後山舊稱權現山を以て宮内省御用地と爲し豊島ヶ岡公園と稱せられ且皇子皇族の御墓所と定めらる、護持院は元神田一ツ橋外にありしを中古此地に遷せし巨刹にして今猶は寺號を存す

龜戸神社

は本所區の東隅龜戸町にありて本社には菅公を祭り相殿には天穗日命、土師宿禰を合祀す社傳に曰く開祖信林始め太宰府に在りし頃正保二年靈夢に感じ飛梅を以て新たに神像を造り是を護持して江戸に下り天満宮を此處に勸請す云々社内梅樹多く且池に臨んで藤棚あり又

社前に反橋あり其形半圓形を爲すを以て俗に太鼓橋と云ふ、社の東二町にして梅林清香庵に到る園内臥龍梅と唱ふる古梅樹あり花候に至れば清香馥郁として騷人雅客の爲めに愛せらる

向島隅田川 隅田川は古へより有名なる勝區にして水源は遠く信州、甲州、上州より發し武州秩父郡の溪流を合して中津川と云ひ同く大里郡に至りて荒川と稱し終に豊島葛飾兩郡の境を流れ千住を経て品川灣に注ぐ其東岸吾妻橋以北凡そ二里の長堤を向島と稱へ古來櫻花を以て其名最も高し、堤の東に三圍神社、牛島神社、長命寺、秋葉神社、白髭神社等あり又近傍は五百崎、待乳山など云へる處あり是は萬葉集に「まつち山夕こほもきていは崎のすみだ川原に獨かも寐ん」とある歌に據りて後人の漫りに負はしたる名なれど萬葉集の歌は紀伊國の角田川を詠しものなれば古より斯る名のあるべき筈なし又業平朝臣がいざ言問はんと詠みし處は今の流れにはあらず委しくは東北鐵道大宮の部「隅田川古渡」の件を覽

るべし(編者曰く東京名所は猶は數十ヶ所の多きありて斯る小冊子には書盡すべくもあらねば他は悉く省略せり東京見物の人々は一部の東京名所圖繪を購ふか又は案内者を雇ひて實地を搜るの業と爲し給へ) 旅人宿 東京市内の旅人宿は其數幾千百なるを知らず今其の種類を云へば純然たる外國ホテルの体裁に倣へるもの、傍ら割烹店を兼るもの、回漕問屋を兼るもの、下宿屋を兼るもの等ありて紳士の宿泊に適する家あり商人の逗留に適する家あり其の宿料の如きも一日四五圓より二三十錢までの差あるべし茲には白崎五郎七氏の著はせる日本全國商工人名錄に據りて府下重立たる旅人宿を擧ぐる左の如し

東京市内旅人宿一覽

- | | | | |
|--------------|-----------|-----------|----------|
| 帝國ホテル(……………) | 麹町區山下町二丁目 | 桃李館(津田まさ) | 京橋區加賀町 |
| 東京ホテル(……………) | 同 有樂町三丁目 | 水明館(港伊兵衛) | 同 木挽町二丁目 |
| 精養軒(……………) | 同 京橋區采女町 | 萬屋(杉浦ささ) | 同 木挽町三丁目 |
| 山城軒(奥田もさ) | 同 山城町 | 加賀屋(江間靜) | 同 築地一丁目 |

對山館(島田 かつ) 同 京橋區山下町
 對德館(龜岡 かう) 同 元數寄屋町二丁目
 成勢館(島田 みき) 同 數寄屋町三丁目
 茂林館(林 文右衛門) 同 南鍛冶町
 常盛館(武本 甚太郎) 同 卅間堀三丁目
 總房館(吉岡 久治郎) 同 尾張町二丁目
 山下館(前澤 ふく) 同 山城町
 佐々部ひで 同 丸屋町
 伊東屋(市川 善兵衛) 同 南傳馬町一丁目
 明ぼの(峯浦 喜三郎) 同 五郎兵衛町
 西本 信長 同 銀座一丁目
 西澤 半助 同 南金六町
 双樹軒(林 左治衛) 同 尾張町一丁目
 萬年屋(青木 久七) 同 西紺屋町
 眞鶴館(江尻 はん) 同 富嶋町
 島屋(平野 平七) 同 日本橋區西河岸町
 島屋(平野 てつ) 同 數寄屋町
 山本屋(水谷市郎右衛門) 同 上

蓬萊屋(中田 つる) 同 日本橋區通二丁目
 梅鶯軒(松浦 宏) 同 濱町三丁目
 信夫亭(川口 留吉) 同 吳服町
 魚十(小林 やそ) 同 蠟燭町一丁目
 陸前屋(八木 精一) 同 久松町
 伊勢屋(山口松之助) 同 高砂町
 刈豆屋(堀内茂右衛門) 同 馬喰町一丁目
 大松屋(妙見 佐兵衛) 同 上
 伏見屋(石村庄右衛門) 同 上
 鍵屋(飯島四郎兵衛) 同 二丁目
 山城屋(遠藤 彌市) 同 上
 羽前屋(富永 半兵衛) 同 上
 樹屋(齋藤 十兵衛) 同 上
 相撲屋(島瀬 喜兵衛) 同 上
 梅喜(梅澤喜右衛門) 同 上
 梅治(中村治兵衛) 同 三丁目
 會津屋(黒部 利兵衛) 同 上
 朝萬(新井 宗次郎) 同 上

大阪屋(津田 嘉助) 同 日本橋區馬喰町三丁目
 島屋(大友 甚藏) 同 本石町四丁目
 越後屋(野澤十右衛門) 同 上
 久保田屋(久保田源四郎) 同 上
 茗荷屋(安川 ふぢ) 同 三丁目
 伏見屋(大内 重兵衛) 同 二丁目
 山田屋(南 又兵衛) 同 小傳馬町二丁目
 森谷(森谷 彦兵衛) 同 三丁目
 小松屋(小松 甚八) 同 上
 近江屋(村岸 源三郎) 同 大傳馬町二丁目
 上州屋(森泉 平助) 同 大傳馬町
 木屋(西尾 喜能) 同 田所町
 玉久(櫻井 久五郎) 同 富澤町
 大丸屋(竹田 慎平) 同 新和泉町
 眞鍋 錄藏 同 上
 樋口屋(原田 金藏) 同 本銀町
 名倉屋(榎田 平兵衛) 同 室町三丁目

相摸屋(淺井 卯兵衛) 同 小網町三丁目
 長島屋(稻垣 善兵衛) 同 三丁目
 入中(角田 鐵二) 同 上
 伊勢安(吉田 ちか) 同 檜物町
 三河屋(石井與右衛門) 同 神田區小柳町
 伊勢屋(望月 傳治郎) 同 上
 小崎(小崎 福吉) 同 佐久間町二丁目
 越前屋(森田 巳之助) 同 三崎町一丁目
 栗原(栗原 波五郎) 同 連雀町
 大塚屋(大塚 陽) 同 上
 矢澤屋(矢澤 さい) 同 上
 萬代屋(古田 甚内) 同 上
 關根屋(田桑 った) 同 淡路町二丁目
 萬屋(加藤 佐兵衛) 同 山本町
 山下館(青木 金七) 同 下谷區御徒土町三丁目
 名倉屋(濱田 たつ) 同 車阪町
 群玉舎(吉岡 清) 同 上
 埼玉屋(横倉 島之助) 同 三橋町

山崎屋(富原平太郎)下谷區下谷町
 丁子屋(鈴木よし)淺草區茅町一丁目
 松阪屋(寺岡松太郎)同 材木町
 藤井樓(平井乙女)同 新平右衛門町
 相摸屋(柳川平助)麹町區麹町五丁目
 丸三(三橋常吉)同 平河町四丁目
 神泉亭(宮田みち)本郷區根津須賀町
 吾妻屋(松田ふで)芝區烏森町

筑波館(高谷磯次)芝區烏森町
 聚星館(金子爲七)同 芝口一丁目
 蓬萊屋(中田與一)同 上
 川崎屋(大木長次郎)同 上
 相摸屋(織茂利兵衛)同 櫻田本郷町
 信濃屋(柳原新助)同 南佐久間町二丁目
 植木屋(土屋政吉)同 柴井町
 芝浦海水浴(鐘江りき)同 新濱町

〔名物〕 旅客が東京土産として購ひ歸るべきものを擧ぐれば吳服太物類、足袋、手拭、籠甲細工、櫛簪其他小間物類、煙草入其他袋物類、煙管、帽子其他流行唐物類、傘、駒下駄、流行小説本、東錦繪、團扇、品川海苔、佃煮、和洋菓子、江戸川紙、巻紙狀袋類等なるべし

●品川停車場 (東京芝區高輪南町字谷山下に在り)

東海鐵道第二の停車場にして支線は此驛より岐れ東京市の西北を迂回し赤羽にて東北鐵道に聯絡す、停車場を出で、南行する數十歩鐵道線路の

止に架したる陸橋を渡れば直ちに品川町に達す

○品川町 は東京府下荏原郡に屬し北品川宿、品川步行新宿、南品川宿、獵師町、利田新地、一日五日市村等の小名ありて戸數三千五百餘戸、人口一萬七千五百餘人、地は東海鐵道の咽喉に位し後に御殿山の丘陵を負ひ前に品川の灣港を擁し其區域は南北に長く東西に狭く人家櫛比常に殷賑を極む、町内荏原郡役所、硝子製造所等ありて南北二宿ともに妓樓多し、近傍の勝區を擧ぐれば

泉岳寺 は品川停車場より北凡そ五町高輪北町に在り曹洞宗にして萬松山と號す當寺は淺野家累代の香華院にして地内に淺野内匠頭長矩の墓あり遺臣大石良雄等四十七士主君の讎を報じて切腹に處せらるゝや義士の屍を長矩の墓地に葬り今猶は其形ちの一樣なる墳墓四十七基ありて常に參詣人絶ゆることなし又寺内別に義士堂ありて四十七士の木像并に其の遺物を藏し僅かの布施料を取りて之を縦覽せしむ明治元年車駕東行の

折良雄等四十七人へ勅使をして金幣を賜はり且其の忠魂を慰せらる、停車場より泉岳寺までの人力車賃は凡そ三四錢なるべし

御殿山 は停車場の南、鐵道線路の西に連なれる丘山の名にして古へ櫻の名所なりしも品川砲臺築造の頃此山の土を取りて臺場を築立て且其の櫻樹をも伐採し其後鐵道工事に着手するや復た此山を切取りて線路を敷設せしを以て太く舊形を改めたれども近頃に至り再び若木の櫻を植付けたれば花時には士女群集して稍や雑沓を極む、此山には慶長元和年間省耕の御殿ありし故に御殿山の名あり又土人傳へて此地を太田道真居住の地なりとも云へど未だ詳ならず

東海寺 は西京大徳寺派の禪寺にして萬松山と號し停車場より南へ十町ばかり北品川宿字北番場にあり、寺域廣潤、堂宇壯嚴古へは名ある巨刹なりしが維新後火災に罹りて金殿悉く焼失し今は僅かに二三の塔中と庭園の舊趾とを存するのみ本寺は寛永十五年將軍の命に依りて澤庵和尚

の草創せしものにして今猶は鐵道線路を渡りたる硝子製造所裏手の山に澤庵の墓あり開山和尚の遺志に依りて石塔を建てず唯だ自然の巨石を置きて標となせり故に一見澤庵漬の壓石の如し、寺内また加茂縣居、服部南郭の墓あり

海晏寺 は南品川宿にあり北條時頼の開基にして開山を大覺禪師とす縁起に曰ふ後深草帝の御宇建長三年此地の海中より一頭の鮫を獲しに其腹より正觀音の像出でたり故に鮫頭觀世音と名けて本尊とす云々恐らくは附會の説なるべし寺中に北條時頼、二階堂出羽守、梶原景時等の石塔あり又昔しは楓樹多くして都下第一の名勝と稱せられ晩秋紅葉の頃は滿庭錦繡を晒すが如く頗る奇觀なりしも其後楓を伐りて今は僅かに數株を殘すのみ、寺中また贈太政大臣岩倉具視公の墓あり

●大森停車場 (東京府下武蔵國荏原郡入新井村に在り)

○大森村 は大森停車場を距る六町許り戸數一千九百二十戸、人口一

萬百餘の宿驛にして東海の國道に當れり小田原北條家の所領役帳に澁谷又三郎及び六郷殿所領中六郷の内大森とあるは則ち此地の事なり又古此處に森林ありしと見えて太田持資の平安紀行に大森といふ森の蔭にやすらひてと前書して「大森の木の下蔭の涼しさに知るも知らぬも立どまりけり」猶ほと云ふ歌を載せたり今宿の傍に木蔭繁りたる處あるは此森のなごりにや考ふべし、此村及び品川等に於て盛んに海苔を産す所謂淺草海苔是なり昔は淺草にて之を製せし故に今も其名を襲へり

八景園 は大森停車場の西隣にある小丘の名なり古此邊に八景阪ありし故に此名を負はしたるもの乎、後丘に登れば東に東京灣を隔て、上總の翠巒と相對し風景頗る佳なり又園中梅樹、櫻樹多くして春時開花の頃は節を此園に曳く者多し

本門寺 は山號を長榮山と號し停車場の西南凡そ二十五町（人力車賃八錢）池上村に在り日蓮上人終焉の地にして弘安年間の草創に係る先づ

總門を入りて石階を登れば二王門あり其の正面に祖師堂釋迦堂ありて右に五重ノ塔屹然として森林の梢を凌ぐあり又本堂の西大坊に日蓮上人終焉の舊跡あり、祖師堂に安置する日蓮大士の木像は弘安五年大士化寂の後ら其徒日法の彫刻せしものなりと云ひ又釋迦堂に藏むる所の本尊釋迦如來及び四菩薩の像は共に運慶の作なりと云傳ふ、寺域廣潤にして古へ三十六坊を有し甲州身延山、總州正中山及び此の長榮山を以て日蓮宗の三頭と稱せられ諸人常に絶えざるが中に毎歲十月の會式には世俗お籠りと稱し東京横濱其他十里二十里の在郷より參詣の男女一夜を本堂に明すを例とし露店あり觀物ありて終夜雜沓を極むと云ふ

池上温泉 是長榮山の地内に在りて光明館と云ふ、崖を開きて數棟の客室を建築し母屋より廊下を設けて一呼相往來す樓に登れば鬱たる樹梢を掠めて遙かに森川の海濱を望み風色稍や快潤、鑛泉は冷泉にして多量の鹽分少量の硫氣を含み晝夜之を沸して浴を取らしむ浴槽の模様家屋の

建築等は箱根熱海の温泉場に及ばざると違しと雖も地東京に近くして往復便利なるが爲めに夏日は殊に繁昌せり

原村梅林 は池上本門寺の南凡そ十町矢口村の内字原村に在り園を立春梅園と云ひ元は農家の梅畠なりしを明治十一二年の頃拓きて遊園と爲せり門を入りたる處に一株の古梅樹あり其他は孰れも若木にして枝振の面白きもの無しと雖も春時花の盛りなる頃は香馥郁として東風に薫ず亦一顧の價あり、大森停車場よりの人力車賃は十二錢内外なるべし

新田神社 は矢口村立春梅園を距る三四町の處に在り、府社にして新田左兵衛佐義興朝臣を祭る本社は古廟にして周圍に瑞籬を廻らす近頃社殿の太く廢頽せしを惜み村民中某々の有志者社殿新築の企てありと云ふ社の南字鵜ノ木村に光明寺あり古關東有名の大伽藍にして吾嬭の高野山と稱せられしも今は大に衰頽して詣人の數を減せり寺の南に光明寺池あり古へは矢口の川筋に當りしが後年水流變りて南の方を流るゝ其大さ

東西二百間餘南北五十間の大池なりしも今は水涸れて昔しの面影をも存せず蒼田碧海の變遷は雷に光明寺池のみにはあらず

蒲田梅林 は大森の南凡そ二十町蒲田村東海國道の右傍に在り（人力車賃六錢）前庭後園ともに悉く梅を栽ゑ花候に至れば横斜枝を交へ紅白色を銜ひ人をして其香に酔はしむるの思あり園内 天皇陛下の曾て御休憩わらせられたる御小休所の跡あり又梅漬梅びしほの類を鬻ぎて客の土産に供す、園の南に行方彈正が花園の舊地ありと云ふ

●川崎停車場（神奈川県武藏國橋本郡川崎町字堀の内）

○川崎町 は同停車場の東に在り戸數七百五十戸、人口四千八百餘人、東海道第二次の宿驛にして驛中の小名を新宿、砂子、小土呂、久根崎、堀ノ内と云ふ往時は旅店商家軒を並べ頗る殷賑を極めしも今は大に衰微の有様を呈せり古へ河崎庄司高重なるもの此地に住ひ今の堀ノ内即ち停車場近傍に其宅地の跡ありと言傳ふれども詳かならず

平間寺 スライモン は川崎停車場より東へ二十町（人力車賃六錢）大師河原村に在り平間寺といふよりは俗に川崎大師と呼べる方名高し本堂祭る所の弘法大師の木像は此地の海中より出顯せしものなれば佛體には悉く貝殻附着せりとぞ寺門の前には茶店數軒相並び門を入りて本堂の左の方に六字名號の碑石あり堂は凡そ八間四面にして宏壯、其金剛山の三字の額は石川頼直の筆する所なりと云ふ毎月廿一日を以て縁日とし是日遠近より參詣する老若男女は其數幾百千人なるを知らず鐵道應は爲めに臨時瀛車を發するを例とす、寺内別に小梅園あり春時客群集す

洲河原桃林 川崎渡船場より六郷川の下流大師河原までの間に在りて田園悉く桃樹を栽ふ毎歲三四月の交に至れば香雲十里四顧盡く花ならざるは莫し末廣鐵腸居士曾て此地に遊び宛も武陵の仙洞に向ふが如しと爲し文を作りて朝野新聞の雜錄欄内に掲げし事あり所謂小桃源ノ記是なり去れど其名は小向梅林は悉に顯はれず都人士にして猶ほ洲河原の名をさ

へ知らざる者多きは鐵腸居士の筆柳北仙史に及ばざるが故か抑々亦桃花の梅花に劣る所あるが故か編者は竊に洲河原の爲めに惜む

小向梅林 は川崎の西北凡そ廿五町小向村に在り（停車場よりの人力車賃八錢）先づ停車場を出で、左折し鐵道線路を西に渡り六郷川の堤に沿ひて直行すれば自づと小向村に達するを得、村内梅樹多く初春の候に至れば各々園を開きて客を呼び園内小料理屋あり鮮屋あり酒屋あり菓子屋ありて飲食に便す元來此梅林は農家の畠にして昔は一顧の客さへ無かりしを故成島柳北翁自ら之を發見し詩に賦し文に作りて世間に吹聴せしより小向の名俄かに顯はれ今は蒲田と其肩を並ぶるの香世界とはなれり、園中今柳北翁の碑あり又此地より北に向ひ矢口ノ渡を渡り新田神社の前を過ぎて蒲田に出るの道あり故に探梅の爲め東京より赴く人は歸路を蒲田の方に取り大森より瀛車に乗るを便利とす

多摩川 六の玉川の内手作の玉川と稱せられ昔より和歌に詠じて持て

唯さるゝは即ち六郷川上流の名なり、多摩川は水源を甲斐信濃に發し東京市の西を迂回して東京府神奈川縣の管轄界を爲し川崎町の北を過ぎて海に入る委しくは甲武鐵道の部に記載すべし

●鶴見停車場 (神奈川縣武藏國橋本郡生見尾村字鶴見に在り)

○鶴見 は東海道の一小村落にして鶴見川の南に在り今は生麥、鶴見、東寺尾の三村を合して生見尾村と云ふ戸數八百餘戸人口四千四百人、生麥は鶴見の南凡そ二十町の街道に在り安政年間薩藩の士英國人が藩主の行列を横ぎりしを憤ほり終に英人を斬り爲めに日英兩國交渉の一問題を惹起せしは實に此地より始まれり今は其地に一碑を存す

●神奈川停車場 (神奈川縣橫濱市宇高島町に在り)

○神奈川町 は東海道の第三次の驛市にして戸數二千六百餘戸、人口一萬六千三百餘人市街は長く、字形を作し其北を本宿、中央を青木町、鐵道線路以西を神奈川臺と稱す、橫濱市と相距ると僅に一里東は東京灣の海

濱に接して東南本牧の岬を望み國道は右折して所謂神奈川臺の峻阪を登り西南十里十町にして程々谷に達す、驛内本覺寺、飯綱權現、満願寺等あり又南半里芝生村に淺間神社あり山腹に窟あり里俗之を富士の人穴と云ふ、驛内名ある旅店を擧ぐれば左の如し

- 奈古家 (澤 みつ) 字久保町 田中屋 (田中彌兵衛) 字臺町
- 新羽屋 (中村源兵衛) 字西ノ町 外村屋 (富永てる) 字宮ノ町
- 大米屋 (森 佐七) 同上

奈古家は元と妓樓なりしが今は其の賤業を廢して旅店を營み傍ら料理屋を兼業せり又驛の東に妓樓多く就中神風樓を最とす

●橫濱停車場 (神奈川縣橫濱市櫻木町地先理立地に在り)

○橫濱市 は日本五港の内第一の繁昌市にして市坊二百三十餘、戸數二萬七千八百餘戸、人口十三萬二千餘人、東北に橫濱港灣を擁し西に野毛、戸部の丘陵を繞らし南を本牧本郷と云ひ長岡海岸に沿ひて根岸村に連なり北は舊理立地(高島町)を隔て、神奈川町に接し其の區域は東西凡

北一里五十五町、南北凡そ一里十町、外國人居留地は市の南方に在り市街井然として備はり石屋瓦樓觀るべきもの多く其の北は即ち市の中心にして商家櫛比し就中本町、辨天通、南北仲通、太田町、境町の如きは最も繁昌の地なり、神奈川縣廳は本町に在り其他濱横市役所、地方裁判所、郵便電信局、燈臺局、税關等市内各所に散在し各國領事館も亦悉く居留地内に在り、停車場の西に伊勢山公園あり園内太神宮を祭り此處に登臨すれば濱全市は雙眸に集まり來り殊に園内櫻樹、楓樹多きを以て春秋二季は最も遊歩逍遙に適するの地なり、太田には温泉あり又本牧には天神の祠ありて俗に十二天宮と云ふ此處も亦絶景の地にして海に臨んで海水浴場の設けあり又停車場より南一里餘根岸村には共同競馬場ありて春秋二季競馬を催し内外紳士の來觀する者年々多きを加ふと云ふ、濱横は東洋の「リパプール」とも稱すべき商戰場なるを以て港には巨舶大船の出入繁く橋常に林立して晝は帆影雲と聯なり夜は燈光波に映じ一見して其の繁盛

を知るに足るべく又外國各港に航する船舶は主に該港より出帆し郵船會社の内國定期航海船も亦此地より解纜するを以て市中回漕問屋を業とする者多く其の商人宿と稱するものは過半汽船宿を兼業せり例に依り市内名ある旅店を擧ぐれば左の如し

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 高野屋 (高野傳次郎) 本町四丁目 | 和田屋 (岩佐彦太郎) 辨天通六丁目 |
| 上州屋 (君塚七郎平) 本町六丁目 | 松本屋 (直江忠助) 本町四丁目 |
| 福井屋 (福井忠兵衛) 辨天通五丁目 | 萬屋 (森治兵衛) 北仲通四丁目 |
| 蓬萊屋 (中田與三兵衛) 海岸通五丁目 | まつ井 (松井元八) 本町四丁目 |
| 廣島屋 (井澤吉五郎) 本町五丁目 | 俵屋 (江草なみ) 本町五丁目 |
| 糸屋 (高野仙太郎) 住吉町六丁目 | 大阪屋 (竹脇兵助) 本町六丁目 |
| 山崎屋 (河野啓二) 同上 | 鹿島屋 (安田定助) 辨天通三丁目 |
| 西むら (西村新七) 太田町五丁目 | 松坂屋 (奥山喜平) 元濱町三丁目 |
| 津久井屋 (小林長五郎) 本町五丁目 | 小田原屋 (杉崎菊次郎) 尾上町五丁目 |

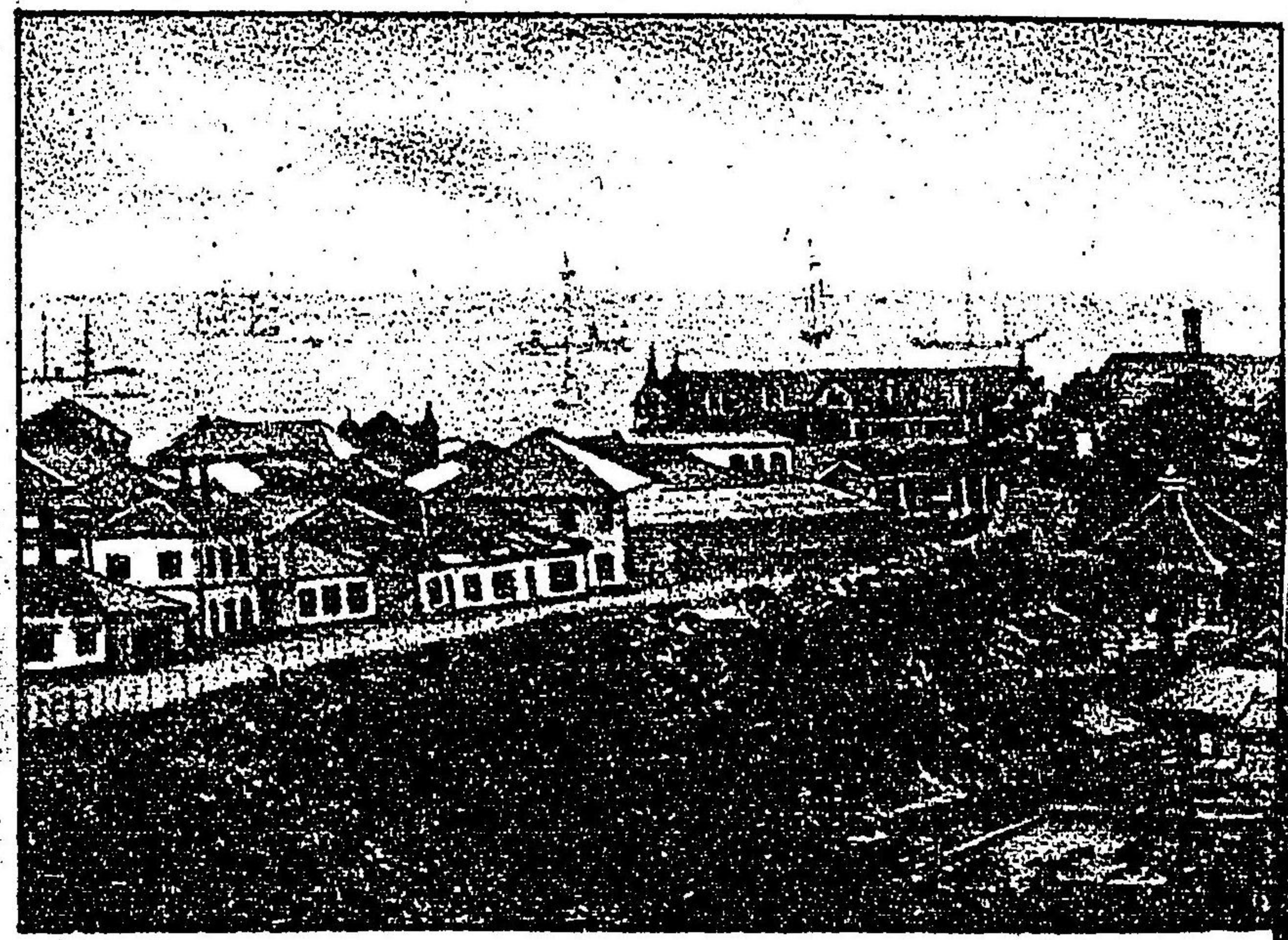
〔汽船賃金〕 汽車と汽船とは陸海相連絡して交通の便を謀るべきものなれば茲には特に濱横より内外各港に至る汽船乘客賃金を掲げて讀者の

東海鐵道 橫濱(市濱)

便覽に供す(表中洋とあるは洋食賄ひ、和とあるは和食賄ひなり)

地名	上等	中等	下等	地名	上等	中等	下等
至神戶	和 一〇、〇〇	洋 七、五〇	五、〇〇	至八ノ戸	九、〇〇	...	三、〇〇
至馬關	二〇、〇〇	一六、〇〇	四、五〇	至函館	和 一〇、〇〇	洋 九、〇〇	六、〇〇
至長崎	二六、〇〇	一六、〇〇	六、五〇	至三宅島	六、〇〇	...	三、〇〇
至四日市	四、五〇	三、〇〇	一、五〇	至八丈島	一〇、〇〇	...	二、五〇
至半田	四、五〇	三、〇〇	一、五〇	至小笠原父島	一五、〇〇	...	四、〇〇
至高知	一二、五〇	...	三、五〇	至上海	四五、〇〇	...	五、五〇
至鹿兒島	二〇、〇〇	...	五、八〇	至福州	四七、〇〇	...	一、〇〇
至琉球	二九、〇〇	...	九、五〇	至廈門	六〇、〇〇	...	一、三〇
至萩ノ濱	和 六、〇〇	至馬尼刺	九〇、〇〇	...	一、七〇
至釜石	和 四、五〇	三、〇〇	一、五〇		五七、〇〇	...	二、五〇
	九、〇〇	...	三、〇〇				

〔人力車賃〕 横濱市は物價不廉の地にして人力車賃の如きは殊に高直なり今市内定めの人車賃を記せば各旅店より鐵道停車場まで遠近に



横濱港之圖



金澤瀬戸之景

拘はらず十錢、同停車場より居留地まで十錢、同く山手居留地まで十五錢、市内は十町以内凡そ五六錢、十町以外二十町まで十錢内外、時間待ち一時間に付十錢内外にして雨天并に夜間には二三割を増すを例とす

杉田梅林 横濱停車場より南の方凡そ三里、道は根岸、磯子、森等の村落を過ぎ人力車ならば一時半にして達すべし、此地は横濱より金澤に至る街道に方り南に觀音崎と富津との岬角左右より斗出して海を包みたるが如きを望み東は上總の木更津と相對し鹿野山は其後に聳々東京灣は一碧湖水の觀を爲し眺望快潤なるが上に春は全村悉く梅ならざるはなく遠く望めば雪の如く又雲の如く眞に香世界の名に愧ぢず近頃其の梅樹を外國人に賣りし者ありて幾分かの花を減じたれども花候に至れば遠近より筈を曳く者猶ほ多しと云ふ

○金澤八景 金澤は武州久良岐郡の東端に位する有名の勝地にして西南北は山を負ひ東一面は海に瀕し近く野島夏島の小島嶼を望み遙かに總

房の巒峯と相對し山青く水綠にして漂渺究りなし横濱より金澤瀬戸の斷橋まで里程四里十五町(人力車賃凡金八十錢)先づ瀬戸に達すれば同所に割烹店兼旅店あり屋あり文化年間詩佛居士此家に遊び名くるに四時總宜樓の號を以てし今猶は居士の類及び石碑あり樓は入江に臨みて岸に扁舟を繋ぎ又生洲を設けて常に鮮魚を養へり同家より西一町にして瀬戸明神あり又西南七八町金龍院地内に九覽亭の跡あり此地に登れば金澤八景は一瞬の中に集まり奇景云はん方なし所謂八景とは洲崎の晴嵐、瀬戸の秋月、小泉の夜雨、乙艦の歸帆、稱名寺の晚鐘、平瀨の落鴈、野島の夕照、内川の暮雪にして之に能見堂の眺めを加へて九覽亭とは名けしものとぞ一時に入景を眺むるの地は此の九覽亭と能見堂の二ヶ所にして能見堂は字町屋村より東北に方れる丘上に在りて山上に地藏院あり昔し巨勢の金岡其の眞景を寫さんとして力の及ばざるを歎じ終に筆を投じたりと言傳ふるは此地の事にして里俗擲筆山と呼ぶ其の山下町屋村に稱名寺あり入

景の一にして寺内に金澤顯時以後代々の墓あり、又金澤より朝比奈切通しを経て鎌倉まで里程二里十町(人力車賃二十五錢)故に汽車の便は據りて此地に遊ばんとする者は多く鎌倉停車場にて下車し小嶺を越れば金澤に來るを常とす

●程ヶ谷停車場 (神奈川県武蔵國橋本郡程ヶ谷町字岩間に在り)

○程ヶ谷町 是東海國道第四次の驛にして神奈川を距る一里十三町昔しは程ヶ谷、新町、帷子の三宿に分れしを慶長年間合せて一驛とし近年町村制實施の後ち程ヶ谷、神戸、岩間を併せて程ヶ谷町と稱し帷子町は今宮川村に屬す、程ヶ谷町は戸數九百餘戸、人口四千六百餘人、此驛より岐れて金澤、鎌倉に至るの道ありて金澤能見堂まで四里と云ふ又驛の南三十町の處を境木と云ひ武相兩國の界とす、驛内の旅店は金子屋傳左衛門、新金子とく、惠比壽屋六右衛門、沼津屋九之助等なり

●戸塚停車場 (神奈川県相模國鎌倉郡戸塚町字吉田町に在り)

○戸塚町 是程ヶ谷を距る西二里十五町、驛を分ちて戸塚驛、矢部町、吉田町とし戸數六百餘戸、人口三千二百人鎗倉郡役所の所在地にして東海道より鎗倉に至るの通路は此驛より分岐す驛の北端吉田橋より鶴ヶ岡八幡まで距離二里八町、長谷觀音へ二里廿町と云ふ、驛中重立たる旅店は伊勢屋長兵衛、伊勢屋彌三郎、鎗倉屋豊助、松屋保太郎等なり

●大船停車場 (神奈川縣相模國鎌倉郡小阪村字大船に在り)

○大船 是は小阪村に屬し昔しは人家五十戸に過ぎる一小寒村なりし故停車場を此地に設けしより以來追々戸數を増して近來稍々繁昌に赴くの模様あり大船停車場は横須賀支線の岐る處にして此地より横須賀まで距離十哩、三十五分間にして達す

田谷の窟 は大船停車場より西北二十町田谷山定泉寺の後園田谷山の崖にあり里人佐藤某氏靈夢に感じて開鑿せしものにして洞窟の延長三町許り上下左右に屈曲し蜿蜒々として長蛇の蟠まれるか如し先づ燈を點じて

窟に入れば冷氣肌を襲ひ無數の蝙蝠人に驚きて飛ちがふさま物凄く漸く奥に入れば其窟の左右并に天井には悉く佛體、龍虎其他の鳥獸等を岩石に彫刻しあるを認め精巧なる錚細工を見るの思ひあり亦一奇觀と謂ふべし、窟の縦覽料は定まりたる價なきも十錢以上投する者は其姓名を木札に記し縦覽料は窟修繕の費に充つると云ふ、大船停車場より定泉寺まで往復の人力車賃は二十錢を定めとす

●鎌倉停車場 (神奈川縣相模國鎌倉郡東鎌倉村字雪ノ下に在り)

○鎌倉 是は横須賀支線に於る大船より第二次停車場の所在地にして村を二に分ち東を東鎌倉といひ西を西鎌倉と云ふ、此地は建久の昔し右大將頼朝の覇府たりしより以來北條氏足利氏に至るまで二百年間打續きたる大都會にして歴史上最も有名の地なり而して其の東鎌倉村に屬するものを大町、小町、雪ノ下、西御門、峠、淨明寺、三階堂、十二所、扇ヶ谷の九ヶ村とし西鎌倉村に屬するものを長谷、阪ノ下、極樂寺、籠橋材木坐の四ヶ

村とし戸數合せて千二百八十戸、人口六千七百餘人、神社佛閣其他の名所舊跡等は各所に散在して殆ど枚舉するに遑わらず其委しきは鎌倉名所記と題する冊子に譲り茲には最も著名なるものを擧ぐるに左の如し

鶴ヶ岡八幡宮 是停車場より僅々三町許り字雪ノ下に鎮座し國幣中社に列す康正六年伊豫守源ノ頼義之を草創し元は由井ヶ濱に在りしを建久二年今の地に移す、祭神は應神天皇、神功皇后、大仲媛の三神にして堂宇美を盡し境内頗る廣く三の鳥居の如きは本社より數町を隔てたる海濱由比ヶ濱に在り先づ一ノ鳥居を潜り赤橋を過ぎて二天門を入れば正面に神樂、左に經藏あり、石階の右にゐるを若宮と云ひ昔し文治の頃白拍子靜が舞衣の袖を翻へして法樂の舞を奏せしは此處なり、石階を登れば樓門ありて瑞籬の中に本社鎮坐し瑞籬に添ひて左に曲りたる處に頼朝の社あり、社の後にあるを大臣山と云ひ其左に遙拜所あり其他白旗神社、柳營神社、稻荷社、泉池、園林等皆境内にあり

鎌倉宮 是明治二年の創設にして大塔宮護良親王の尊靈を祭り官幣中社に列せらる、社は二階堂にありて停車場を距る東北八町、社後の山腹に土窟あり是れ即ち護良親王が足利直義の爲めに幽閉せられ終に逆臣淵部伊賀守の爲めに弑せられ給ひたる舊地にして窟の廣さ十疊ばかり見る者をして今猶ほ腥氣凄然たるの思ひあらしむ、嗚呼直義が滔天の罪や其肉を啖ふも猶ほ足らず古人今人誰か慨歎せざる者あらんや

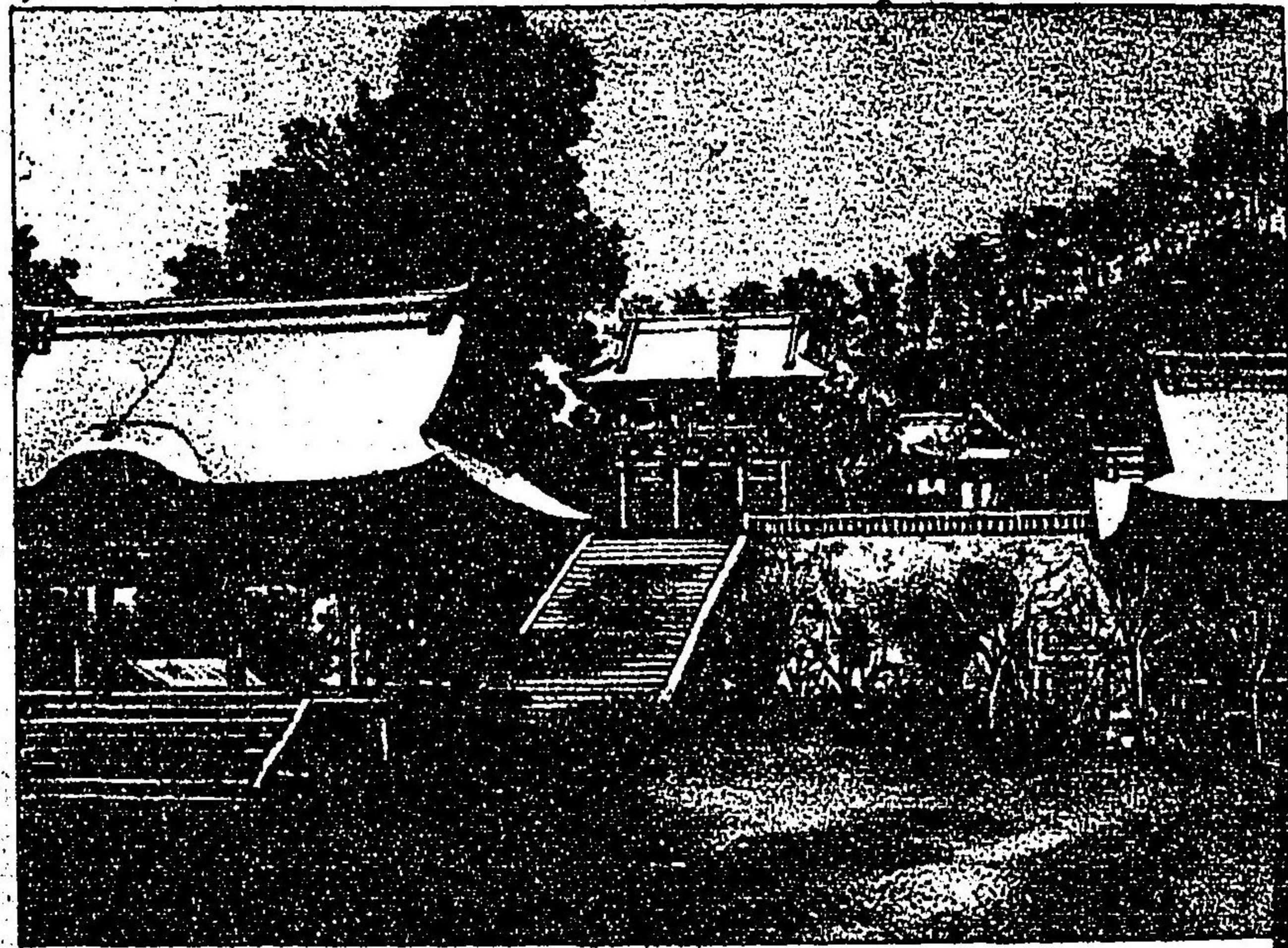
葛原岡神社 是化粧阪の西葛原岡にありて右少辨日野俊基を祭る俊基曾て後醍醐天皇の爲めに盡忠の志ざし厚く先づ高時を亡して聖意を安んじ奉らんとして成らず事顯はれて斬首せらる墓碑は柵内の一段高き所にありて今は其傍に社殿を新築し明治十八年特に從二位を贈らる

建長寺 是停車場の東北字山之内にありて巨福山と號す、鎌倉五山の第一にして建長三年北條時頼之を建立し宋の道隆禪師の開基とす山門は宋の寺門に倣ひて建築せしものなれば其の構造彫刻ともに見るべきもの

あり佛殿には丈一寸五分の地藏菩薩の木像を安んず傳へて云ふ昔濟田某なる者斬罪に處せらるゝに當り髻の中に地藏の小像を匿す太刀取二度までも斬れども斬れず怪みて其故を問へば濟田答へて地藏菩薩の我身を護り給へるが故なりと云ふ今安置する木像即ち是なり、寺内廣潤にして方丈、書院、開山塔、勸音殿等あり又什寶多きの中に開山禪師の所持せしと言傳ふる圓鑑の如きは殊に奇品なり

圓覺寺 瑞鹿山と號し五山の第二にして建長寺の西にあり弘安五年北條時宗の建立にして開山は宋の祖元禪師なり、總門は建長寺山門の如く其構造を宋の寺門に摸擬せしものなれば金彩の美なしと雖も亦頗る壯觀なり佛殿には後光嚴帝宸筆の額を掲げ祖師堂には達磨、百丈、臨濟の像を安し土地堂には伽藍神并に代々將軍の位牌を藏す

壽福寺 停車場の西、扇ヶ谷にあり五山の第三にして龜谷山と號し尼將軍平ノ政子之を草創し榮西禪師を開山とす、寺内開山塔の後に窟あり



鶴ヶ岡八幡宮之景



鎌倉大佛之前之景

り俗にまかきやぐら窟窟と云ふ岩窟を二丈四方に鑿り裡に牡丹の彩色を施し窟中に
 頼朝將軍の塔并に政子尼の塔を建つ、又寺門の左より登りたる觀音山の
 上に望夫石あり此山に登れば鎌倉全村の景勝は眼下に集まり眺望頗る快
 潤、近來二三の茶店を山上に設けて客の休憩に便せり

淨智寺は五山の第四にして金峯山と號し宇山之内にあり北條師時の
 建立にして師時の法名を淨智寺道覺と云ふ故に之を採りて直ちに寺號に
 用ふ、寺に師時の位牌あり宋の大休禪師を開基とす

淨明寺は淨明寺村に在り五山の第五にして足利尊氏の父讚岐守貞氏
 の草創に係り退耕和尚を開山とす開山塔を光明院と號し足利直義の像を
 安置す、其東隣なる芝野を公方屋敷と呼び尊氏邸宅の舊趾なりと言傳ふ
 其東の山際に二個の岩窟ありて御馬冷場と稱し頼朝の名馬池月、磨墨の
 洗馬所に充てたる處なりと云ふ

光明寺は停車場の南、由井ヶ濱の東、宇材木座にありて天照山と號す

寛元年間北條經時佐介谷に佛刹を建立し良忠禪師を其の導師とす後ち
 光明寺と改めて今の地に移すと云ふ、山門天照山三字の額は後花園帝の
 宸筆にして其他開山堂、二尊堂あり寺内にある榎柏の二樹は開山の手づ
 から栽たるものなりとぞ又主記佛堂には開山良忠の木像を安す
 妙本寺 比企ヶ谷に在りて長興山と號す、此地は元と比企ノ判官能
 員の邸地なりしが建仁三年北條時政の爲めに亡ざる其子大學三郎剃髮し
 て日蓮上人の俗弟子となり故宅を變じて一寺を創立し日蓮上人を請じて
 讀經供養を營む、上人の説法を弘通する是處を以て始めとなすと云ふ又
 御影堂には祖師の像を安す徒弟日法常に師の傍らに在りて詳らかに其容
 貌を寫したるものなりとぞ
 長谷觀音 是字長谷に在り阪東巡禮第四の札所にして和州長谷の觀音
 と同材を以て造りたりと云ふ三丈六尺の觀音の大像を安置す停車場より
 此處まで凡そ十八町、其西南に御靈ノ宮あり

大佛 是長谷觀音の北に在り此地は總國寺の舊跡にして像の高さ三丈
 五尺青銅の盧舍那佛にして胎内に數十人を容る、建武の昔し此の地に高
 さ八丈餘の釋迦如來の像を建てたる事ありしが何れの時にか滅亡し今の
 大佛は仁治二年の鑄造に係るものなりと云ふ、其傍らに寫眞屋あり客來
 れば大佛の掌上に登らしめて撮影す亦一の新趣向なり
 (宿屋) 鎌倉旅店の名あるものは雪ノ下にて對鶴樓(角屋正左衛門)丸
 屋(岩澤作太郎)三橋支店(伊東右朔)長谷觀音前にて三橋樓(三橋與八等
 なるべし元來此地は前記の外に尙ほ荏柄天神、長壽寺、瑞泉寺、覺圓寺、英
 勝寺、賴朝屋敷、管領屋敷、北條屋敷、源氏山、滑川、景清土牢、由井ヶ濱、稻
 村ヶ崎等の名所舊跡頗る多ければ此地を巡覽せんとする旅客は先づ旅店
 に投じ案内者を雇ひて見物するを可しとす、由井ヶ濱松林の傍らに海濱
 院あり外國ホテルに倣ひたる仕組にして家屋宏壯、眺望絶佳、海濱には水
 浴場を設け館内にも亦温浴場あり一切西洋風の賄ひにして宿泊料は一日

三圓の定めなり、扇ヶ谷英勝寺の北に温泉あり近頃此鑛泉を分拆せしに多量の炭酸を含み湯治に効驗あることを知り米新亭なる温泉宿を新築して客の入浴に便す夏日は浴客絶ゆると無しと云ふ又鎌倉雪ノ下より金澤まで二里十町、江之島まで二里十二町、藤澤まで二里三町なり

●逗子停車場

(神奈川県相模國三浦郡田越村字逗子に在り)

○逗子 是は相模半島の西に位し相模灣に枕める一村落にして海濱漁家多し近頃此地に海水浴場の設けありしより以來貴顯紳士の別荘年一年に其數を増し尤夏三伏の候暑を避くるには適當の地となれり手を翳して濱邊より遠望すれば南に三崎の岬を隔て、大島の海中に浮ぶを觀、西には豆相の連山を凌ぎて富嶽の雲表に聳ゆるを望み鎌倉江之島の海濱は右より走りて遠く小田原に連接し山海の眺共に備はり其の風色畫圖の如し、此地の海水浴旅店は養神亭(九富次郎)日影ノ茶屋(角田正右衛門)の二軒にして停車場より丸々七八町、人力車賃は四錢の定めにして養神亭定め

の宿料は一泊上等五十錢、中等四十錢、下等三十錢、一週間滞在宿料は上等四圓二十錢、中等三圓五十錢、下等二圓八十錢なりと云ふ又同停車場より南の方凡そ一里の海濱字長者ヶ崎に長者園(小澤仙太郎)といふ海水浴旅館あり其の風景をさくく逗子に劣らずして亦一個の好避暑地なり

●橫須賀停車場

(神奈川県相模國三浦郡橫須賀町ノ内字逸見村に在り)

○橫須賀町 是は橫濱港を距ると南十里、東京灣の西岸に瀕する港市にして市坊三十餘、戶數二千五百八十餘、人口壹萬五千六百八十八人、橫須賀鎮守府の在る所にして人家稠密、港内には常に數隻の軍艦碇泊し旅店妓樓等も亦隨つて繁昌す此地は元漁家數十戸に過ぎる一村落なりしが慶應元年舊幕府に於て佛人某を傭ひ此地に造船所を設けて船舶を修繕し維新後更に之を政府に買取して大に其規模を擴張し船渠を設け諸器械を増し今は巨艦大船と雖も容易に新築し得らるゝに至りしを以て市中も亦之に伴ひ年一年に繁盛に赴き竟に今日の殷賑を見るに至れり其の造船所の如きは

機關の宏大なる運轉の巧妙なる實に日本全國諸鐵工所に冠たるものにして此の造船所を一覽せんが爲め四方より來る者亦多し、市街の西逸見山にアマムスの墳墓ありアマムスは英國人にして西曆一千六百年の頃本邦に渡航して徳川家康の爲めに用ひられ江戸に邸宅を賜ひ又此地逸見村近傍に所領の地を賜ひたり今東京に安針町の名あるは即ちアマムスに因みて名けられたるものと知るべし、此地名ある旅店は三富屋利右衛門、三浦屋安榮、松阪屋藤造其他數軒とす又同地の海岸には海水浴旅館三富館あり前記の三富利右衛門と同家にして地を松岸寺の前、若松海岸に下して二層の高樓を新築し館内冷浴、温浴の設けあり停車場より三富館まで人力車賃八錢、同家の宿泊料は上等六十錢、中等四十五錢晝食は二十錢内外にして眺望頗る佳なり

○浦賀町は横須賀を距る二里三町、市街の廣さ十五町許り港口は六町餘にして船舶常に輻輳す此地は安政年間米國使節ペルディ軍艦を率ゐ

來り始めて彼我貿易開港の談判を開きし處にして今は近村なる大津、走水、鴨居等の諸村を合せて町制に編入し戸數千八百八十戸、人口一萬二千九百人を有す、横須賀より浦賀に至る途中宇津村の海濱に海水浴旅舎大津館あり同館は建坪四百餘坪の總二階屋にして右に旗山の岬を隔て、觀音崎の砲臺を望み北は猿島及び安房の連山と相對し左に富岡、本牧の諸灣を認め風清く波穏かにして避暑納涼には屈竟の地なり同館宿泊料は特等一週間五圓、上等三圓五十錢、中等二圓、下等二圓にして横須賀より陸路の里程一里十八町、人力車賃二十錢、同く海上此地に到る仕立船賃は三十錢より五十錢までにして一艘十人の客を容る(以下東海道順路に戻る)

●藤澤停車場

(神奈川県相模國高坐郡藤澤大阪町に在り)

○藤澤町は東海國道に於る繁盛なる驛市にして高坐郡役所、警察署、郵便電信局等皆な驛内に在り、戸數九百八十戸、人口五千四百人、東西より江之島、鴨宮沼等に至る旅客は此驛より汽車を下るを以て夏日は殊に

雜沓を構む驛内には有名なる遊行寺あり藤澤山清淨光寺と號し本願は俣野五郎景平にして吞海上人の開基とす本尊阿彌陀佛は丈四尺餘の座像にて慈覺大師の作なりと云ふ開基十二代の住職は龜山帝第四の皇子にして一たび南朝の位に即き後ち終に薙髮して遊行上人の後を襲ぎ普く全國を遊行し給ひぬ其の堂宇は宏麗なりしも曩に焼亡して今は假堂を存し又寺内方丈の後小高き處に富士見亭あり山海の遠望絶佳にして天皇陛下西巡の折茲に鳳蓋を停めて御休憩あらせられたる處とす、其の道場の東一丁許りの處に小栗堂あり小栗滿重の像を安し什寶として鬼鹿毛の轡、照手姫所持の古錢等を藏す、鷗ヶ沼海水浴場は藤澤停車場を距る二十餘町の海濱に在り濱は一面の砂地にして稚松處々に生じ岸は遠淺にして水清く波穏かなれば婦女手の水浴を取るには最も適當にして少しも危険の恐なし此地紳士紳商の別荘の外に待潮館、鷗沼館二軒の旅亭ありて東に江之島を撈の内に望み

前は渺茫たる太平洋に面し風景稍や賞するに足る二館定め、の宿料は一泊三十錢以上五十錢以下、晝食は十五錢より二十五錢迄にして停車場より鷗ヶ沼までの人力車賃は片道八錢を定めとす

○江之島は東海々濱中古へより名ある勝地にして藤澤停車場より一里十町、鎌倉郡片瀬の海中に點在し一條の沙路を通じて島に達す、島中邊津、中津、奥津の三社あり縣社にして多紀津姫命、市杵島姫命、多紀理姫命を祭る、奥津宮より西に下り崖に沿ひて左折すれば龍窟に至る窟は南に面し廣さと高さ一丈餘入口に棧道を架して人の渡るに便す燈を點じて窟に入ると四十餘間にして道左右に岐れ各々島神を祭る所謂窟の辨天是なり、邊津宮の後には僧良真宋より傳へ來りしと云ふ一基の古碑あり碑面磨滅して其の文字分明ならざれども一見して五百年以前の物なるを知るに足る、又島の南端に兒ヶ淵あり傳へて云ふ往昔建長寺に自休藏主と云ふ僧あり辨天へ一百日の參詣を爲せし時一日鶴ヶ岡相承院の兒童白菊

と邂逅し一見戀慕の情に堪へずして再三之を挑みしに白菊は一夜逃れて
 此處に來り扇面に二首の和歌を認め之を遺して此の深淵に投身す自休追
 跡し來りて其扇を見れば「白菊と忍ぶの里の人間は、想ひ入江の島と答
 へよ」「愛さ事を思ひ入江の島かけに捨る命は浪の下草」の二首あり一讀
 悲歎に堪へず自休も亦詩一律、和歌一首を詠捨て續いて此淵に投じて死
 せり故に兒ヶ淵とは呼ぶとぞ白菊の塚は鎌倉にあり自休の像は同く西御
 門法華堂にありと云ふ、島中老樹蒼鬱として繁茂し東北隅には人家最も
 多く酒樓旅館は其地の高さに隨ひて漸次に樓屋を構へ碧瓦粉壁畫くが如
 く山海の風色亦明媚にして眞に一個の小仙境なり旅店は多く料理屋を兼
 ね石の華表の左にあるものを惠比壽屋茂八、金龜樓昌延、北村屋忠右衛門
 とし其右にあるものを岩本樓亮泰、讚岐樓八右衛門、江戸屋忠五郎、堺屋
 平重郎とし宿料は各旅店を通じて平均一泊五十錢内外晝食は二十錢内
 外、魚類は鮮けきを誇るが中に鮑は特に此地の名産とす、藤澤停車場より

江之島入口なる片瀬洲鼻まで人力車賃八錢又同所より七里ヶ濱を経て鎌
 倉雪ノ下まで里程二里十二町其の途中長者塚、片瀬川、唐ヶ原、小動、稻村
 ヶ崎等の名所あり婦女病者の外は徒歩するを善しとす

龍口寺 是片瀬の東、腰越村との間に在りて寂光山と號す文永八年
 日蓮上人が危難に遭ひし舊地にして世に龍ノ口御難と謂ふは是なり上人
 遷化の後ち弟子六僧協力して此寺を建立し祖師堂には日法の作に係る日
 蓮の像を安す本堂の西に方れる山麓に日蓮上人土の牢あり又内陣厨子の
 中に敷革石あり上人難に遭ふの時此石の上に坐せしを以て一名首ノ坐石
 とも云ふとぞ毎歲八月十二日僧侶打寄りて大法會を催し法華經題目を誦
 し是日遠近より來り詣づる信徒頗る多し

●平塚停車場 (神奈川縣相模國大住郡平塚町字新宿に在り)

○平塚町 是戸數五百餘戸、人口三千六百餘人の宿驛にして地は稍や
 海濱に接し西に花水川を隔て、三十町にして大磯町に接す馬入川以西の

海岸は海水浴に適し夏日水浴を取る者多く右には箱根の群峯及び眞鶴ヶ崎、左には三浦三崎及び伊豆の大島を望むべく其間白帆の點々海上に浮ぶを見る等亦た絶景なり又驛の北八幡村に入幡宮あり近郷の鎮守にして毎歲五月五日を以て祭事を行ふと云ふ驛中重立たる旅亭を笹屋伊兵衛、朝田屋作次郎、角屋甚太郎、松本清吉、内河さくらの五軒とす

馬入川 は平塚の東凡そ三十町の處に於て東海國道を横ぎり南流して相模灣に溜ぐ其水源は甲斐都留郡山中湖より發し猿橋驛を経て相州津久井郡に入り東南に流れて高坐、愛甲二郡を界し茲に相模川の名あり夫より高坐、大住の郡界を過ぎ馬入村を経て海に入るものにして延長十八里餘川幅最も廣き處百八十間餘なりと云ふ此川多く鮎を産す

大山雨降神社 は縣社にして大山 祇命を祭る古へより大山石尊大權現と呼び來りしは是なり平塚より北三里人力車賃三十錢にして上柏屋村子易明神前に到り夫より上り二十町(人力車を通せず駕籠賃二十錢)にし

て大山町に達す、大山町は人家三百餘戸、人口一千九百餘人、阪路の兩側に民家櫛比し舊御師の家并に名物の挽物細工を賣る家多し町の盡處より阪路を登ると八町にして不動堂に至り茲より石階二條に岐れ十八町にして本社に達す本社神體は一個の巖石より成り日本武尊東征の砌此石上に坐して憩ひたまひしものと言傳ふ此社は昔し大山寺に屬し寺は良辨僧正の開基にして坊舎十八を領せしが維新後神佛混淆の弊を矯め今は雨降神社と稱す、近傍二重瀧、良辨の瀧、新瀧、大瀧等の瀑布あり、又大山町の右に登ゆる櫻山に登れば眼界忽ち開けて眺望飽くことを知らず眞に一個の好避暑地なり、此地旅館の名高きものを翠浪閣と云ひ家屋宏壯にして數十の客室を有し紳士令嬢の投宿に適す同家宿料は一泊廿五錢以上五十錢にして其他伊豆屋(小川忠兵衛)駒屋(原菊次郎)玉本(武喜代馬)等數軒の旅店あり又大山町より山道三里にして松田停車場へ出るの道あれども峻嶮にして歩行困難なりと云ふ

●大磯停車場 (神奈川縣相模國海濱郡大磯字阪田に在り)

○大磯町 人口六千八百餘人、大住海濱郡役所、海濱警察署、郵便電信局、裁判所出張所等皆な驛内にあり明治九年前の軍醫總監松本蘭崎翁此地の潮水清潔にして海水浴場に適することを主唱し有志者と謀りて藤龍館なるものを新築し其の海濱を以て水浴場に充たるより以來年々夏季浴客群集し其の繁盛は他の温泉場等を懸倒するに至れり、停車場より海濱海水浴場まで凡そ六町古へ所謂小餘綾の磯の一部にして岩石突兀として起伏せる間を以て水泳場に充て濱邊には各旅館の休息所を設け浴客に浴衣、麥藁帽、下帶等を貸與し婦女子には手引の保護者を付する等取扱ひ孰れも懇切なり今此地の景色を云へば後には高麗山、淺間山、立野山など稱する高丘連互して北風の寒さを防ぎ前面は涯なき太平洋を見晴し濱邊の兩端には松樹林を爲して白帆は樹間に隱見し右は伊豆の大半島に面し左は三



大磯海濱之景



江之島遠景

浦三崎の岬を隔て、遠く安房の巒峯を望み南に大島其他の諸島を水天鬚の間に認むる等眺望千里風浴眞に盡くが如し、海水浴旅館は禱龍館、松林館、太田樓、愛松園(百足屋貸席)等にして孰れも館内海水温浴の設けあり其他驛内には百足屋謙吉、角屋半右衛門、宮代屋伊三郎、石井源太左衛門、等數軒の旅店ありて盛夏の頃此地に來往する浴客一日一千人に降らず亦盛んなりと云ふべし前記旅館のうち松林館は字長者林の中にありて數株の青松は館を圍繞し泉池あり運動場あり家屋も亦手廣にして頗る眺望に富めり、禱龍館は海水浴場旅館の元祖にして樓上樓下數十の客室を備へ建築堅牢規模宏大、其の温浴槽の如きは殊に廣濶にして亦紳士淑女の宿泊に適す其他山手海濱到る處貴顯の別荘多し、禱龍館一日の宿料五十五錢(晝食共)毎歲十月一日より六月三十日までの間は席料特別割引を爲し且自賄ひを諾す

鴨立澤 西行法師の「心なき身にも哀れは知られけり鴨たつ澤の秋の

夕暮」と詠みしより名高き鴨立澤は停車場より西の方四五町國道の左傍に當れる海濱の名なり此地に西行堂、虎子堂あり其傍らに鴨立庵と呼ぶ草庵あり小田原の俳人崇雪之を營みて幽栖を樂しみ後ち伊勢の隱士三千風茲に移住して鴨立澤の碑を建つ碑面には自作の長歌一首を刻し長さ九尺三寸、幅二尺三寸、其傍らに三千風の碑あり

●國府津停車場 (神奈川縣相模國足柄下郡國府津村に在り)

○國府津村 は東海國道に當れる一村落到して西、小田原へ一里半、同じく湯本へ三里、國府津停車場前より湯本の間を往復する鐵道馬車の設けありて凡そ一時間毎に發車す其の賃金は小田原まで上等廿五錢、中等十五錢、下等七錢、同じく湯本まで上等五十錢、中等廿五錢、下等十三錢なり國府津は元と海濱の一漁村なりしも停車場の建設以來大に舊觀を改め夏季は旅客の來往殊に繁く海岸に出れば南に渺茫たる太平洋を望み風色敢て大磯、鵜ヶ沼に劣らず其の海濱小高き處を唐澤と呼び曾て親鸞上人

一切經を唐土に求め其船の着岸したる古跡なりと言傳ふ又停車場背後の山には一面檳柑樹を栽る冬季實の熟したる頃は樹間に幾百萬の金鈴を掲げたるが如く亦一奇觀なり此地旅店の名あるものは國府津館并に蔦屋藤八の二軒にして待合茶屋には松屋、相摸屋あり又蔦屋は別に海岸唐澤なる松林の間を擇びて貸別莊を新設し夏時避暑出養生の人に貸す

酒匂 は國府津より小田原に至る途中の一村落にして街道の左傍濱手へ入込たる處に旅館松濤園あり凡そ七千坪の濱地を圍込み稚松の間に數棟の貸別莊を設け需めに應じて之を貸與す又其の濱邊には海水冷浴場を設け本店には温浴室を備へ且好みに任して料理をも調進す

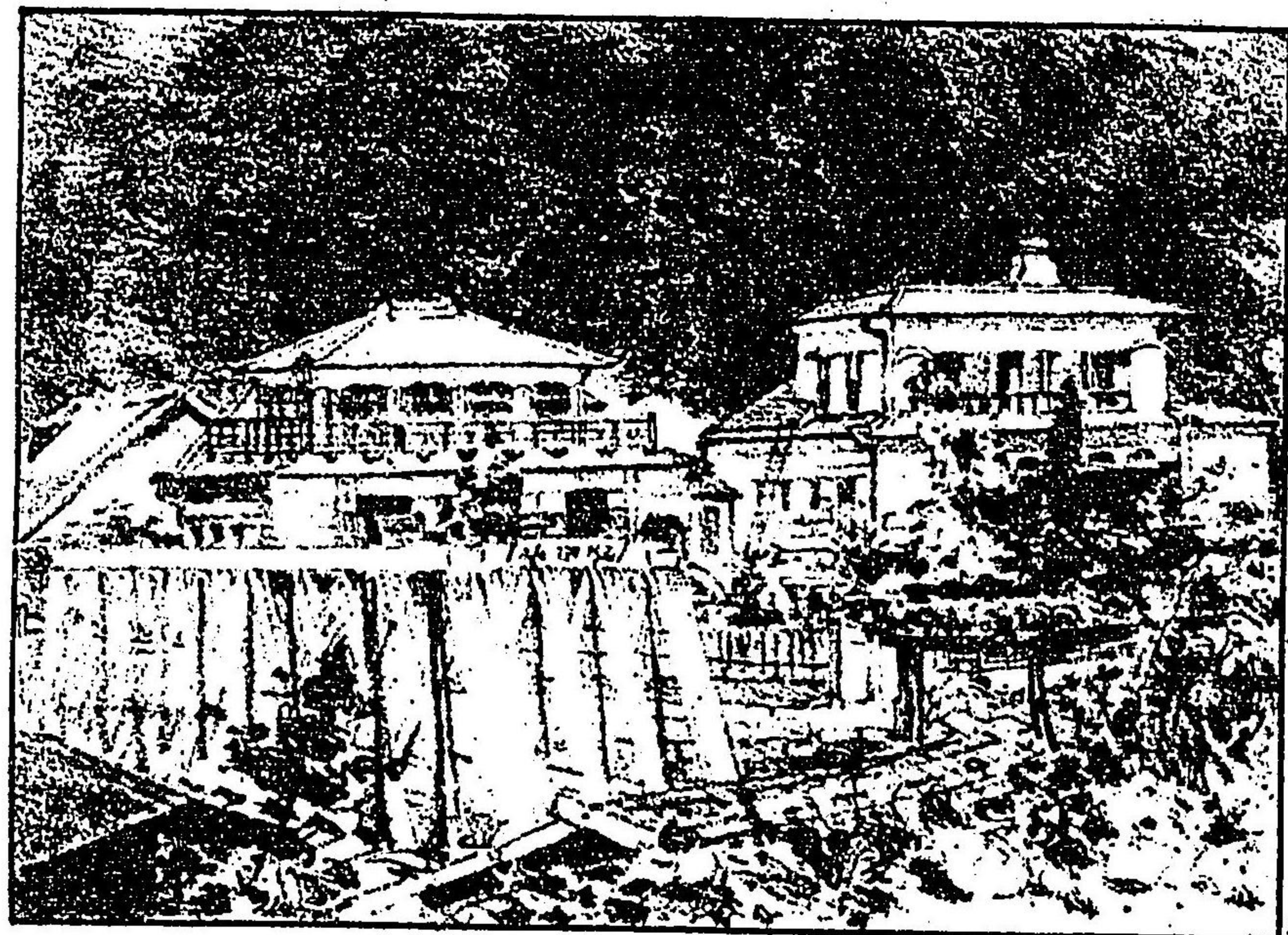
○小田原町 は東海道中屈指の驛市、元と華族大久保氏の治所にして市坊三十、戸數二千百戸、人口一萬四千三百人を有し地、箱根、熱海の街道に當るが故に車馬絡繹常に繁昌を極むるが中に夏季を以て最とす、驛の海濱には伊藤伯の別莊滄浪閣、野村子の別莊黃鳥庵あり其傍らに在る海

水浴旅館を囑盟館と云ひ二層樓の建築にして海邊の眺望も亦頗る佳なり
 驛内著名の旅店は中松屋專助、小伊勢屋佐兵衛、片岡永左衛門等にして孰
 れも幸町通りの往還に在り其右側に名物虎屋の外郎店ありて今猶ほ巍然
 たる八方造りの棟をなす其他小田原名物として名高きは梅干、鹽辛、砂糖
 漬の類にして漬物類は美濃屋吉兵衛、砂糖漬は枕流亭にて齋ぐものを善
 しとす又此地より熱海温泉まで里程七里、人力車賃二人曳一圓二十錢(一
 人曳は其の半額六十五錢の定めなれども十一月より翌年三月までの間は
 二人曳を雇ふを以て通例とす)同じく箱根湯本まで一里半、人力車賃十二
 錢(鐵道馬車賃は前記國府津湯本間の半額なり)
 道了權現社 是古へ大雄山最乗寺に屬し足柄下郡宇關本に在り小田原
 より北に向ひ井細田、府川、塚原等を経て關本まで里程三里、一人曳人力
 車賃廿五錢、此處より本社まで山道登り廿八町、最乗寺は曹洞宗にして應
 永元年に創立し本尊十一面觀音を安置す茲より左に進めば道了山にして

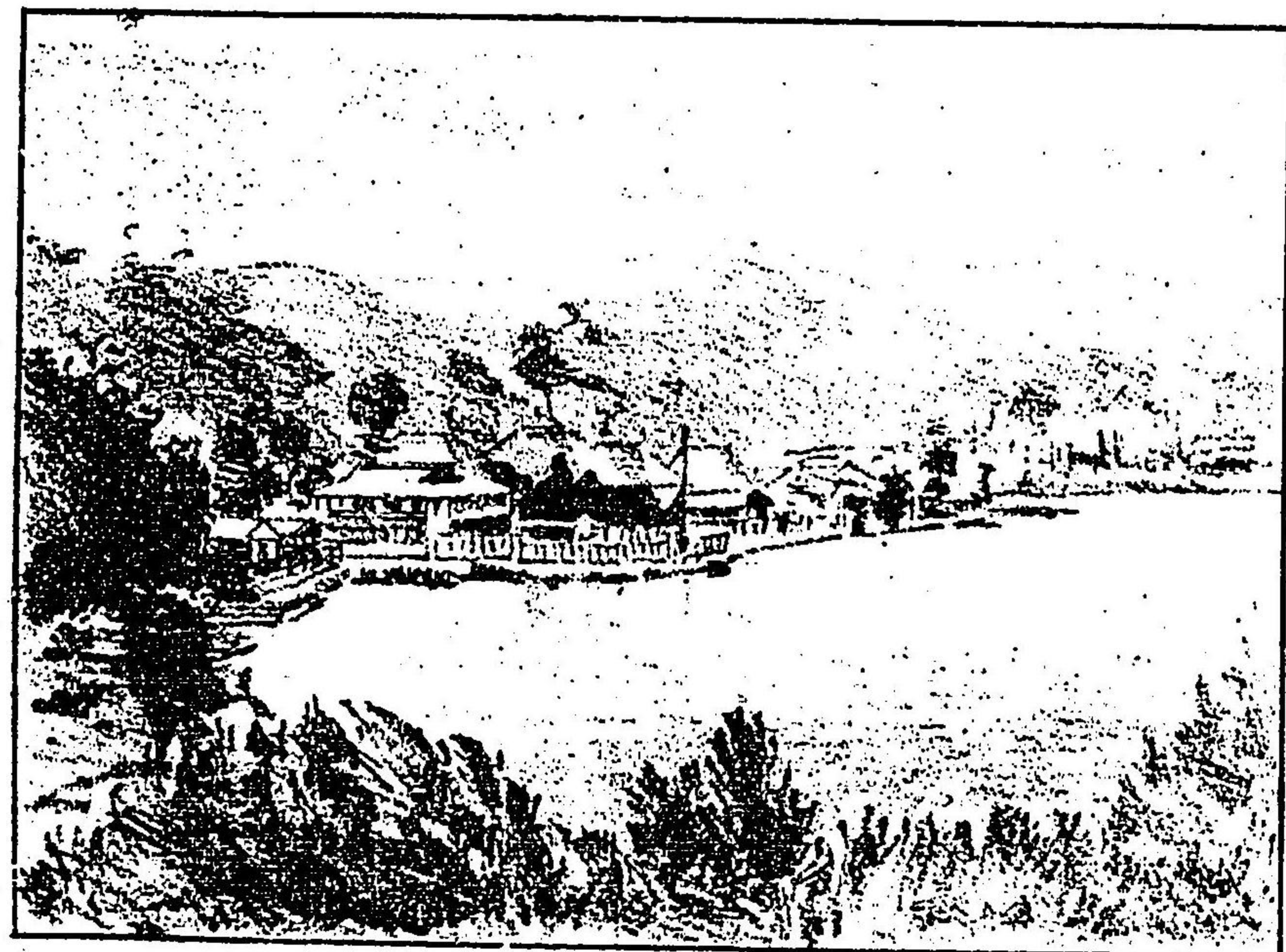
神體には木の立像を安し別に大天狗小天狗を祭る境内松杉の老樹蒼鬱と
 して日光を遮り幽邃愛すべき所なり道了社の大祭は毎年一、五、九の三月
 廿七、廿八の兩日執行し是日詣人四方より群集して頗る賑へり、社の麓關
 本より明星ヶ嶽を越え宮城野を経て宮ノ下温泉に出るの道あれども嶮峻
 にして行路易からず又東京より汽車にて來る者は松田停車場より下車す
 る方便にして同停車場より吉田島、酒田等を経て關本まで里程二里八
 町、人力車賃は一人曳片道二十錢内外なり
 ○箱根七湯 箱根温泉湧出の地は古は七ヶ所故に七湯の名あれども今は
 其數を増して凡そ十湯となれり概して箱根と稱する地は其の區域方三四
 里に跨がり山あり川あり湖水あり瀑布あり其間昔より名ある勝地少なか
 らず近來は外國人すら山水の明媚なると鑛泉の清潔なるとを愛し遠く香
 港上海等より來りて暑を避くる者さへありて旅亭は孰れも巍々たる西洋
 館を新築して山中一個の都を現出し夏日は到る處浴客充滿して最も繁盛

を極むるの地たり今順を逐ふて旅客の案内を爲せば先づ國府津より鐵道馬車に駕し一鞭軽く同所を發すれば一時二十分間にして湯本停車場に達し同所を出で、歩むと僅々數十歩旭日橋を渡れば直ちに

湯本温泉 　　に達す湯本は箱根七湯の入口にして箱根群山の東麓早川の西岸に在り旭日橋畔三層樓の聳ゆるものは福住九藏(萬翠樓)の旅館にして近頃早川の水力を利用して此地に發電局を設け福住門前には二千燭のアーラ燈を點じ室内亦悉く電氣燈を點火し眞に小不夜城の觀あり鑛泉は湯阪山の麓岩石の間より湧出し福住及び小川萬右衛門二軒の旅館には内湯の設けあり泉質は單純泉にして其の透明なると水晶の如く唯だ少量の鹽分を含むのみ、福住宿泊料は一日三食并に夜具雜費を合せて一等一圓、二等八十錢、三等六十五錢、四等五十錢、五等三十五錢、小川は一泊(晝食を除く)二十五錢以上五十錢迄を限りとす、東海國道は湯本より左に向ひ七湯道は右に岐れ早川の西岸に沿ひて登り行くものなり又此地近傍早雲



景之木湯根箱



圖々望ヲ町根函リヨ湖之芦

寺、宗祇の墓、玉垂の瀧等あり今湯本より各温泉地への里程をぐれば凡そ左の如し

塔之澤へ	五丁	人力車賃(一人曳)	金五錢	駕籠賃
堂ヶ島へ	一里十五町	同	金二十五錢	同	金五十錢
宮ノ下へ	一里十八町	同	金二十五錢	同	金五十錢
底倉へ	一里二十丁	同	金二十八錢	同	金五十六錢
木賀へ	一里廿八丁	同	金三十二錢	同	金六十錢
小涌谷へ	二里	同	同	金六十錢
芦ノ湯へ(新道)	三里十丁	同	同	金八十錢
箱根驛へ(國道)	二里廿八丁	同	同	金七十五錢
姥子へ	四里二十町	同	同
大涌谷へ	三里卅二丁	同	同
乙女峠へ	四里十八丁	同	同

塔之澤温泉 は湯本より僅かに五丁緩歩するに宜し此地は四面翠巒を
 繞らし早川の清流は其の中央を横ぎり川上一橋を架して玉ノ緒橋と呼び
 其傍の小丘を勝驪山と云ふ鑛泉は湯阪山の麓并に勝驪山の傍ら等數ヶ所

より涌出し無色透明にして少量の鹽分を含むと猶ほ湯本温泉のごとし温泉宿は玉泉樓(堀貞藏)玉ノ湯(福原遠藏)環翠樓(鈴木善左衛門)一ノ湯(小川鎌太郎)藤屋(安藤徳治)福住樓(長谷川まつ)の六軒にして各旅館孰れも内湯の設けあり就中玉泉樓、玉ノ湯、環翠樓等は家屋宏壯にして傍ら西洋料理をも調進し宿泊料は日本賄ひにて一日三十錢以上七十五錢迄の間あり而して各旅店互ひに競争し勉めて取扱ひの懇切と費用の低廉とを圖るが如きは浴客に取りての幸福にして亦此地繁昌の一原因なるべし塔之澤も亦湯本より電線を引きて夜間電燈を點じ其他講釋場、大弓店、鱧屋、鮮屋等ありて皆浴客の爲めに賑へり

宮ノ下温泉 是塔之澤の西北凡そ一里十二町先づ早川の右岸に沿ひ登ると二十五六町にして稍や平坦なる處に出づ即ち太平臺なり又行くと二十餘町にして宮ノ下に達す此地は海面を抽くと千百尺北に明神、明星の二嶽を仰ぎ西に早雲、冠の連峰を擁し東の方巒岳の盡る處より遙かに相

摸の海面を望むべく其の眺望殆ど七湯中に冠たり温泉宿は富士屋(山口仙之助)奈良屋(安藤兵治)の二軒にして孰れも西洋造りの巨館を構へ客室悉く善美を盡すが中にも富士屋は重に外國人を客とし其の仕組は毫も外國ホテルに異ならず奈良屋は半は日本室を設けて内外浴客の投宿に便ならしめ兩家ともに内湯、湯瀧、水瀧等の設けあり、富士屋の宿料は一日三圓、奈良屋は西洋館一日二圓五十錢、日本館の方は席の大小等に依りて差異あるも凡そ一日四十錢より壹圓までの間にあり又此地には郵便電信局、村役場、巡查派出所あり其他箱根名物と稱ふる竹細工、挽物細工等を鬪ぐ家多く東京の各新聞紙は其日の午前十時半までに着し毫も浴客をして不便を訴へしむる事なしと云ふ、温泉の涌く處は都て五ヶ所にして三日月の湯、熊野の湯、吉田の湯、明治の湯、瀧の湯と云ひ孰れも鹽類泉にして無色透明なり又此地より近傍への里程を記せば堂ヶ島へ四町、底倉へ三町、木賀へ八町、小涌谷へ十五町、芦の湯へ一里二十町なり

堂ヶ島温泉 宮ノ下の手前二三町の處を右折し峻阪を下れば堂ヶ島に至る此地は四面に連山圍繞し三方には早川の流れを擁して小半島形を爲す堂ヶ島の名蓋し是より起りしなるべし早川を隔て、北に白絲の瀧あり北に向へば平松某氏別荘の邸内に調の瀧あり又同所より宮ノ下奈良屋庭前に出る小徑の途中に木葉影の瀧あり、相傳ふ昔し京都天龍の開山夢窓國師老年此處に遁世して一の温泉を發見す夢窓湯即ち是なり現今猶ほ國師の碑并に坐禪石なるものあり、温泉宿は大和屋爲太郎、近江屋半之丞、江戸屋茂與次郎の三軒にして滞在費は一週間一圓五十錢より四圓迄の間にあり之を湯本、宮ノ下の等の宿泊料に比すれば極めて低廉なれども宮ノ下の客と堂ヶ島の客とは其の種類自ら異なる所ありて堂ヶ島の繁昌するは盛夏の頃よりも寧ろ春秋二季にありと云ふ以て浴場の種類を推知するに足るべし、此地より宮ノ下を過ぎ七八町にして底倉に抵る

底倉温泉 是宮ノ下の町續きにして蛇骨川の南畔に在り此處より木賀

への舊道を進めば白鷺ノ瀧の傍らに太閤の石風呂あり昔し豊臣秀吉此の温泉に浴して戰勞を慰めたる所なりと言傳ふ又此地は新田義隆討死の地なりとて義隆の紀念碑あり、温泉宿は梅屋牧太郎、仙石屋丈助、鷲屋さくの三軒にして宿泊料は一日廿五錢より五六十錢迄の間に在り鑛泉は硫酸の二氣を含み泉質は略ぼ底倉、宮ノ下と同じ

木賀温泉 是宮ノ下の西北八町、近年新道を早川の左岸に開鑿し坦々車を驅るに宜し此地は四方に高峯聳に前に早川の急流を控へ山頭に瀑布あり其水迸しりて早川に入り一体の景色は底倉と伯仲す、温泉宿は龜屋新太郎、伊勢屋増右衛門の外に猶ほ一二の支店あり、此地は曩に祝融の災ひに罹り民家二三百を殘して他は悉く灰燼と化したりしが今は龜屋、伊勢屋共に新築略ぼ成りて稍や舊觀に復するを得たりと聞く、龜屋の宿料は一日三十錢以上七十五錢以下、伊勢屋にては別に西洋食をも調理すと云ふ又此地より蘆ノ湯まで里程一里半、駕籠賃は四十錢なり

蘆ノ湯温泉 是七湯中の最高處に位し海面より高きと凡そ二千七百尺、西に駒ヶ嶽、神山の巒峯集まり南に二子の峻嶺聳え東北の方少しく開けて眼界漸く廣し、先づ駕籠にて木賀を發し山路を躋りて行くと數町右に不動の瀧を望み又行くと七八町にして二ノ平村に出で夫より登るに隨ひて道愈々峻しく小涌谷の西俗に七曲と稱する處の如きは嶮中の嶮なるものなり此阪を登り盡せば稍や平らなる高原に出で西に折れて猶ほ行くと四五町にして芦ノ湯に達す此地の鑛泉は他の六湯とは全く性分を異にするものにして多量の硫黃を含み其色茶褐色、特に儂麻質斯、皮膚病、黴毒、子宮病等に効能ありとて浴客常に絶えず、温泉宿は紀伊國屋儀三郎、松阪屋萬右衛門、吉田屋國三等にして宿泊料は一日三十錢より五十錢迄の間にあり

小涌谷温泉 是芦ノ湯道の途中小地獄山の麓にありて宮ノ下を距る十五町温泉は小地獄山の半腹より湧騰するものを取り樋にて浴槽に導き泉

質は多量の硫氣と鐵分とを含むものなり、温泉宿は開化亭(星野芳春)三河屋(榎本恭三)の二軒にて開化亭は専ら外國人を客とし三河屋は内外の客を宿泊せしめ家屋も亦清潔、其の宿料は木賀、芦ノ湯の温泉宿と大差なし、茲より二ノ平に立戻り左折一里にして大涌谷に至る大涌谷は俗に大地獄と稱し冠ヶ嶽の北に方れる一大淵谷の名にして諸處に硫烟燃わ熱泉迸しり地皮は脆弱にして其色赤土の如し人若し此處に陥れば生ながら焦熱地獄の苦を見るが故に偕は大地獄と名けしもの乎、旅客にして之を遠見するは可なり近づきて地皮を踏査せんとするは頗る危ふし

仙石湯温泉 是硫黃山の北麓早川の左岸にありて木賀より十八町、浴場は二ヶ所にして之を上ノ湯、下ノ湯と云ふ其の對岸にある高原を仙石原と云ひ乙女峠を経て富士に登るの道あり、仙石湯は泉質未だ詳らかならず温泉宿も亦狹隘不潔にして都人士の宿泊するに適せず唯だ近郷の農民が耕しの暇來りて浴を取るのみ

姥子温泉 是冠ヶ嶽の西北大地獄山西麓に在りて道順は木賀より宮城野、仙石原を経て一里二十町、同く二ノ平より大地獄山の嶮道を経て一里十五町、姥子は海面を抽くと凡そ二千八百尺温泉は元箱根村の共有にして二三の浴舎あり、茲より十二町にして湖尻の新湯に出づ湖尻は箱根湖岸の小村落にして此地より箱根驛に往復する小蒸汽船ありて其賃金は一人前三十七錢五厘、別に和船を雇ふも亦自由なり

蘆湖 是は箱根湖水の名にして一に鑿字の池とも云ふ其廣さ東西二十町南北一里廿三町其水溢れて早川の溪流となり仙石原、木賀、堂ヶ島、塔ノ澤、湯元の各所を過ぎ東流早川村の東に於て海に入る、湖は形ち瓢の如く底は南に向ひ濶の方は北に向ふ東南の岸に箱根驛及び元箱根村あり其間小高き丘陵を塔ヶ島と呼び茲に箱根離宮あり箱根驛より湖尻に至る二里の間湖岸には老樹枝を垂れ奇巖水に枕みて風色絶佳、遙かに西の方を望めば芙蓉峯の雲間に聳ゆるを見るべく其影湖面に映じて逆まとなること

あり是を箱根の逆富士と云ふ

箱根神社 是蘆湖の東岸駒ヶ嶽の南麓に在り元箱根より湖岸に沿ひて行くと六町許り更に左折して石階を上れば箱根神社に達す、社は天平寶字年間の創立に係り祭神瓊々杵尊、彥火々出見尊、木花開耶姫命三體は即ち萬卷上人の勸請する所なり古へは金剛王院東福寺と稱し中古田村將軍、源頼義、右大將頼朝以下の武將も大に此の神社を敬し曾我の兄弟が敵祐經を討ちたる微塵丸、薄緑の太刀も後に頼朝より本社に奉納して什寶と爲せしと言傳へ社殿頗る壯麗を極めしも今は大に頽廢せり、茲より湖尻に至る凡一里半弱道狭けれども嶮しからず又湖上舟を泛べて湖尻に至る同じく一里半、舟は客七八人を載せ賃金は四十錢内外なり

箱根驛 是東海道中、古繁華なる驛路にして人馬絡繹たりしも今は大に衰頽して夏日内外人が來りて暑を避くるの外は通常旅客の來往甚だ稀なり、地は箱根嶺の中腹、蘆湖東南の岸に方り湯本國道畑宿を経て二里廿

八町、蘆の湯より一里六町、先づ蘆ノ湯より南して二子山の麓に至れば曾我兄弟の墓あり是を過ぐれば右に多田満中の墳墓及び生死の池、賽の河原等あり又元箱根をよぎり塔ヶ島離宮の前を経て行くと數町左に舊關所の跡ありて礎石今猶ほ存す關を過ぐれば即ち箱根驛なり、驛内旅店は土生屋四郎右衛門、石内彌平太、辻屋捨五郎等其他三四軒あり就中はふ屋は其家湖水に面し家屋宏壯にして眺望も亦絶奇、稱して三景樓といふ其實を得たるものなり同家の宿泊料は一日廿五錢より五六十錢迄にして別に西洋料理をも鹽梅す、箱根驛より三島まで下り阪三里廿四町又十國嶺を経て熱海まで山道五里にして兩道とも車を通せず、以上記したるもの、外猶ほ箱根山中一顧の價ある勝地多しと雖も斯る小冊子の書き盡すべき所に非ざれば委しくは箱根七湯志、箱根鑛泉誌等に譲りて筆を閑く

○熱海温泉 伊豆國に温泉多きが中にも特に繁昌を極め冬季避寒の浴客群集するの地を熱海となす、東京より此地に抵らんとするには國府津

にて瀛車を下り小田原までは鐵道馬車の便に由り同所よりは更に人力車に乗換へ相摸、伊豆の東岸なる早川、石橋、米神、根府川、江ノ浦、吉濱、伊豆山等を経て熱海に達す此の里小田原より凡そ七里、人力車賃は一人曳六十五錢、二人曳は壹圓二十錢を定めとす、熱海は伊豆國賀茂郡の東岸に三方は山を環らし東は海に瀕し其灣は半月形を爲し左を横磯と云ひ右を魚見崎と云ふ町村制實施の後ち此地と伊豆山、初島を合せて熱田町と爲し戸數五百八十戸、人口四千六百餘人にして地勢は海岸の方より漸次に傾斜して一段は一段より高く街衢には石を敷きて驟雨一たび至れば巷上寸塵を留めず町内別に本町、中町、濱町、新宿、荒宿等數十の小名あり温泉湧口は都て二十五ヶ所就中大湯を最とし泉質は無鹽の湯、目の湯を除くの外は大洞小異にして皆無色透明の鹽類泉なり而して其中最も奇觀なるは大湯にして毎日時刻を定めて蒸氣と熱湯とを噴出す其噴出の時は響雷の如く地底も亦鳴動して蒸氣は全市街を蔽ふ所謂ガイザリなるもの即

ち是なり、大湯の傍らに噓氣館あり館内に氣壓吸入器、体重秤量器等を備へ大湯の蒸氣を室内に導き、吸氣の用に供し且常に醫員を置き需に應じて患者を診せしむ、旅舎は建坪の多少に由りて一等より六等までに區別し總數三十七軒の内二十四軒までは内湯を設け浴槽を熱湯、温湯、冷泉の三つに分ち客をして適宜に入浴せしむ今更旅舎の重立たるものを舉ぐれば左の如し(五等温泉宿以下を略す)

富士屋 (石渡 喜一) 熱海町字本町
 相摸屋 (石渡 要作) 同 字上町
 眞誠舎 (世古 六之助) 同 上
 氣象萬千樓 (樋口 忠助) 同 字中町
 大光館 (須田 藤次郎) 同 字上町
 鈴木屋 (鈴木 良三) 同 上
 阪口屋 (杉崎 富八) 同 字本町
 小林屋 (平野 新兵衛) 同 字横町
 つゆき (露木 準三) 同 上
 尾張屋 (野村庄左衛門) 同 字中町

古 屋 (内田市左衛門) 熱海町字東町
 高砂屋 (大木 圓藏) 同 字阪町
 山田屋 (山田 半兵衛) 同 字本町
 鱗 屋 (對木 啓助) 同 上
 隱居玉屋 (野田 總八) 同 字濱町
 藤井屋 (藤井 文次郎) 同 字小澤町
 新鈴木屋 (山田 發郎) 同 字本町
 新玉屋 (浦井 龜吉)
 野むら (野村 峯太郎)
 中玉屋 (野田 宗助) 同 字濱町



熱海海濱之景



熱海噓氣館之景

右の内富士屋、相模屋、眞誠舎、樋口、大光館の五軒を以て一等温泉宿とし孰れも二層三層の高樓を構へて客室大小數十を備へ樋口は半洋半和の建築にして館内別に蒸風呂の設けあり其の宿料は席の大小陋美、食物臥具等の高下に依りて差異あれども一等温泉宿にては西洋賄ひを除き一日の宿泊料一等一圓、二等七十五錢、三等五十錢、四等四十錢、五等三十錢の定めにして別に自賄ひ、伺ひ等の方法あり、此地には離宮并に第一、第二、第三御料地を始めとして郵便電信局、警察分署、銀行支店、大弓揚弓店、貸本屋、新聞雜誌店、寫眞屋、料理店、鮮屋等に至るまで一として備はらざるは無く其他熱海名産寄木細工、紙布織、雁皮紙、熱海焼陶器などを鬻ぐ家多く又景色の上より云へば山海の眺め二つながら備はり所謂熱海八景なるものありて浴後の運動に適し長く逗留する者と雖も亦土地に飽くことなし八景とは梅園の春曉、來宮の杜鵑、温泉寺の古松、横磯の晚涼、初島の漁火、錦浦の秋月、魚見崎の歸帆、和田山の暮雪等にして其中にも最も奇景

にして浴客の必ず一覽すべきは錦浦なるべし、錦浦は熱海の南念佛山の麓なる海岸の名にして魚見崎以南は海濱都て奇巖怪石相連續し舟を轉じて西折すれば巖腹に一個の空洞を爲せるものあり是を狗竇と云ひ又行くを數町にして胎内竇あり其次なるは錦巖にして魚見崎より茲に至る海上凡そ二十町、巖に一大洞窟ありて日光の洞内に映する時は波に反射して五彩燦然宛も錦鋪の如し故に錦巖の名ありと、其他神社佛閣にては湯前神社、和田八幡、興禪寺、海藏寺、大乘寺等あれども一々詳記するに違わらず今ま例に依り熱海より近傍各地への里程を掲ぐれば網代港へ海上三里、伊東温泉へ和田、新蒲、中野、小山、和田木等を経て山道五里、修善寺温泉へ熱海峠を経て八里三十町、三島へ同く熱海峠、輕井澤、平井等を経て四里九町、箱根驛へ十國峠を経て五里、初島へ海上三里、伊豆山温泉へ十町なり

伊豆山温泉 是小田原より熱海に至る街道の左傍海邊にありて前は相

模灘に面し後には伊豆雄山の高嶺を負ひ亦一種の風景に富めり温泉は伊豆山の麓より湧出するものを各温泉宿の館内に導き樋口より落して瀧となし其餘れるは崖より一瀉して海に注ぐ之を走湯と云ふ温泉宿は相摸屋文作、江島屋勝次外二三軒にして孰れも客室清潔、眺望も亦快濶なり又背後伊豆山の石階を登れば茲に伊豆神社あり古へは走湯の權現と稱し關東の總鎮守たりしも近年漸く衰頽して今は上宮のみを存す其西北老樹鬱蒼たる處を古々井の森と云ふ右大臣顯光卿が「こゝにだにつれ〜と啼く郭公まして古々井の森はいかにそ」と詠みしは即ち此處なり

●松田停車場 (神奈川県相模國足柄上郡松田村に在り)

○松田村 是松田總領、松田庶子、神山村を合して戸敷二百六十餘戸、人口二千二百餘人、酒匂川の主流に近接せる山間の一村落にして鐵道は茲より登り四十分一の傾斜線なるを以て御殿場に達するまでは汽車の駛ると稍緩なり、酒匂川は水源を富士山の東麓に發し足柄上下の二郡を

經て小田原の東、酒匂村にて海に入る。延長六里の急流にして鐵道線路は此の一河流を涉ると都て十四回なりと云ふ。松田停車場より西折し道了權現社に至る二里八町、同く東の方に向へば大山雨降神社まで三里餘雙方どもに道嶮惡にして車を通せず

●山北停車場 (神奈川県相模國足柄上郡川村字山北に在り)

○川村 は川村向原、川村岸、川村山北等の小名ありて戸數五百三十戸、人口四千餘人、地勢は溪間の一平地にして左右峻峯を以て挟まれ宛も榎鉢の底の如し此驛より小山に至るの間隧道、鐵橋頗る多く山嶺嵯峨として奇景云ふ可からず蓋し箱根山中最も嶮しき處なるべし

●小山停車場 (靜岡縣駿河國駿東郡六合村字小山に在り)

○小山村 は六合村の内に屬し山間の一村落にして戸數人口共に多からず地勢は高峻にして海面を抽くと八百五十尺の上にあれども近傍の山嶽は漸く低くして軌道の通する處は稍や平夷なるが如し小山より東一哩

の處を駿相二國の堺とし小山は則ち駿河國に屬せり又此處より富嶽の連脈は南走して伊豆に涉り其東に連互するものを足柄、金時の諸峯となす而して小山の地は實に箱根峠の同山脈に位するものなり

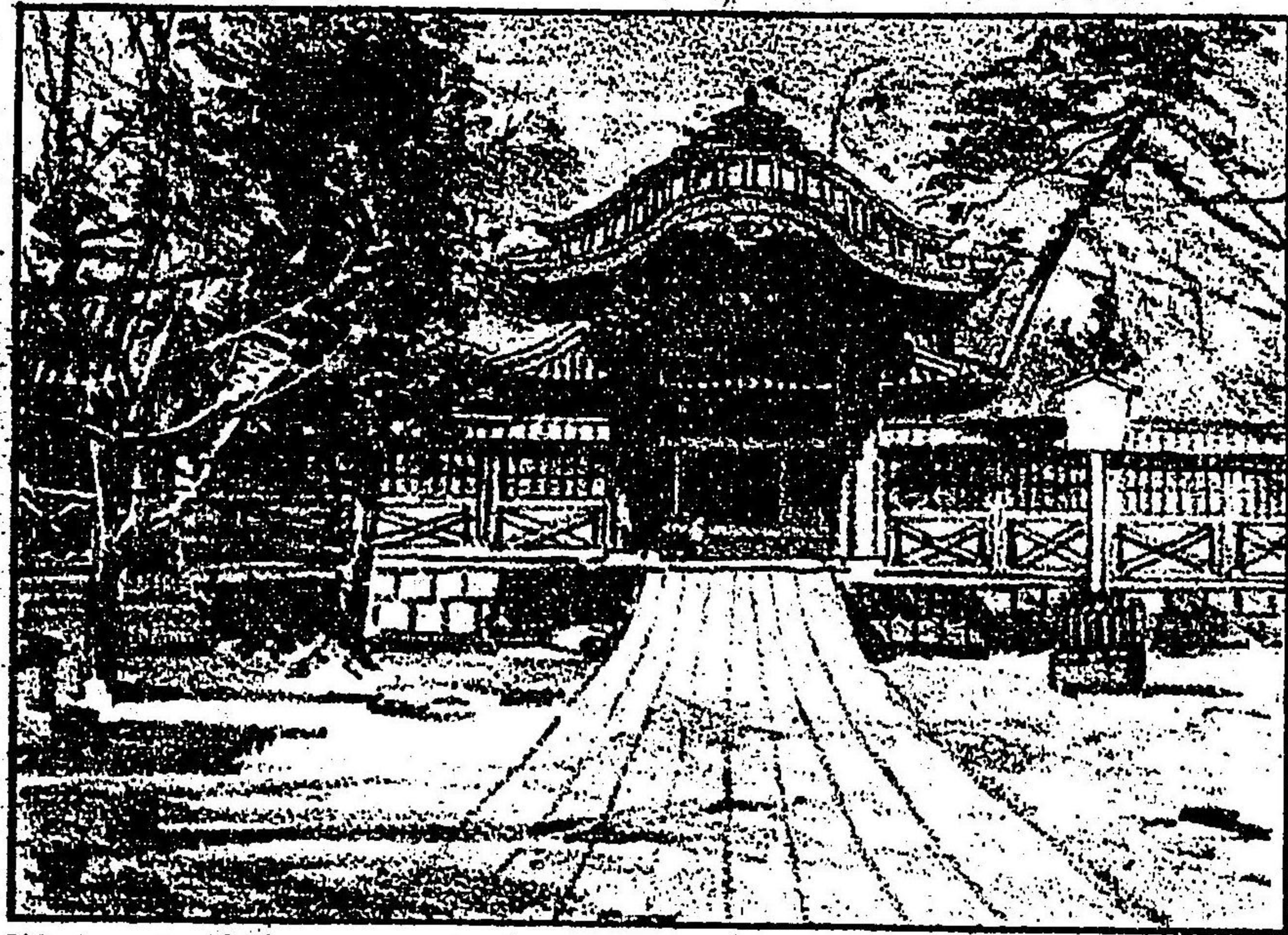
●御殿場停車場 (靜岡縣駿河國駿東郡御厨町字二枚橋に在り)

○御殿場 は御厨町に屬する小名にして御厨町は山中に一市街を爲し町役場あり警察分署あり郵便局あり電信局あり地位最も高くして海面を抽くと一千四百九十八尺實に東海鐵道中の最高處とす、昔し元和三年徳川家康公の遺骸を駿洲久能山より日光山に移す時道を此地に取りしに山間の僻地なれば一軒の旅舎なかりしを以て假殿を茲に設けて一宿せりと故に御殿場と稱す、線路は此驛より勾配に下り汽車は速度を早めて疾行す又此地より富士山に登る新道ありて之を東口新道と稱す、旅舎は富士屋佐吉、近江屋ふさ、蛭子屋彦助、玉川樓延藏等にして料理店には奈壽屋、西川、吉村、鈴木亭、萬盛樓の五軒あり旅舎にては富士屋を最上とし停車場

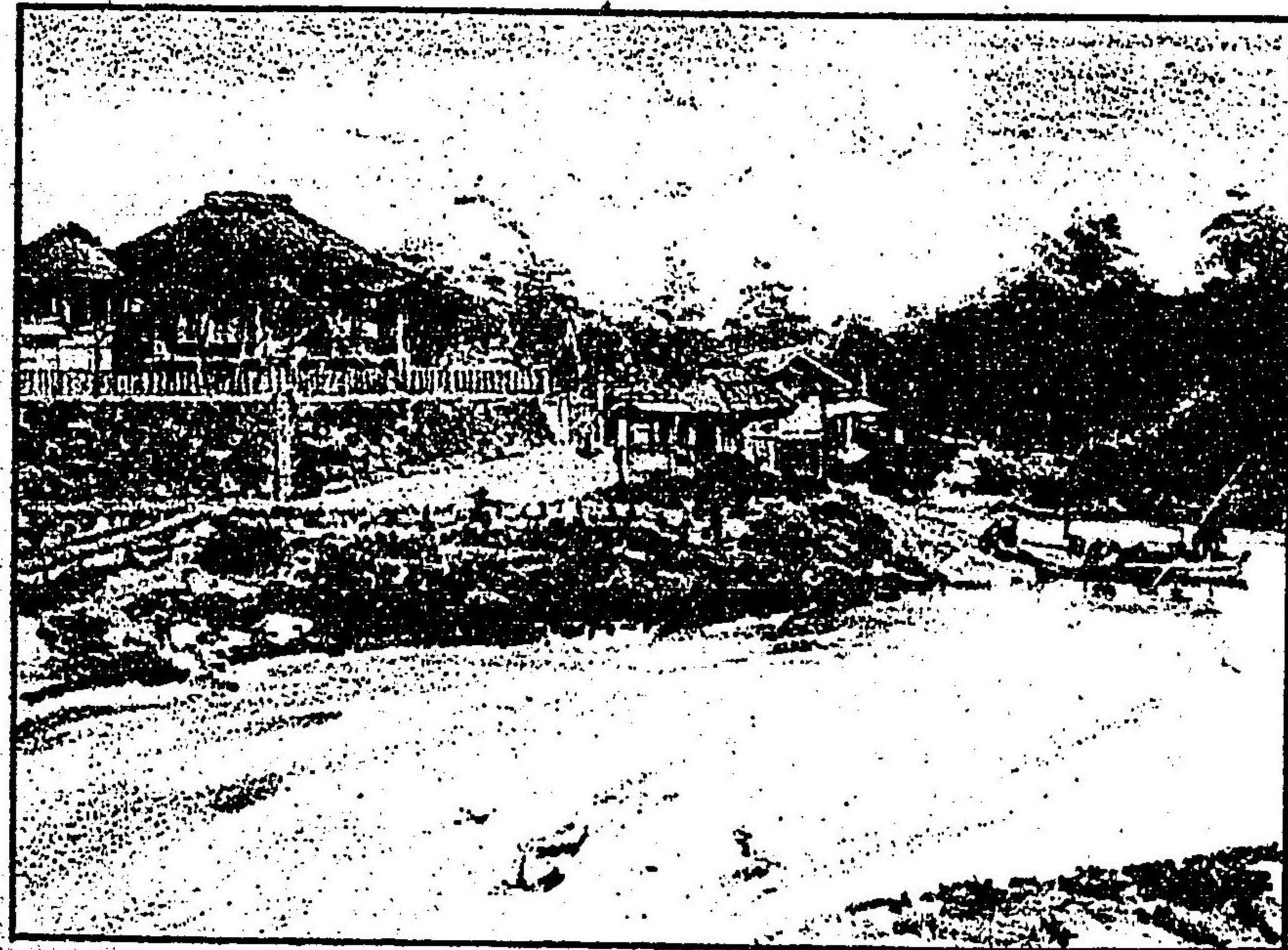
場前に支店を設け富士登山者の周旋を爲すと懇切なり
 ○富士山(登山案内) 神州第一の靈山たる富士山は不二、風士、富地と
 書し又不死の山とも云ひ直立一萬二千三百六十五尺即ち一里に足らざる
 と僅々一町三十九間四時雪を戴き十三州より之を望むべし其の登り口は
 大宮口、須山口、須走口、吉田口、人穴口の五道にして外に御殿場より一直
 線の新道ありて東口新道と云ふ此道は御殿場の有志伴野佐吉(旅舎富士
 屋主人)野木三平治(淺間神社神官)等の人々が去る明治十六年新に開鑿
 せしものにして時の縣令大迫貞清氏現場に臨みて開通式を擧げ氏は駕籠
 にて絶頂に登りしが是れ駕籠にて富士山に登りし者の嚆矢なりと云ふ以
 て新道の險惡ならざるを推知するに足るべし御殿場より新道を経て一合
 目まで三里八町自由に馬車人力車を通じ一合目より頂上まで五里弱其間
 十五町二十町若くは廿五町毎に休泊所を設け之を麓の方より二合目三合
 目と算へ十合目に至りて絶頂に達す而して四合目以上の休泊所は皆石を

以て疊み登山者をして不時の風雨を避けしむ故に之を石室と稱へ營業者
 は皆鑑札を受け且一定の價を守りて草鞋、焼酎、辨當等を嚮ぎ夜は蒲團を
 貸し火を焚きて登山者を宿泊せしむ其宿料は一合目廿一錢夫より一合毎
 に一錢を増し頂上に至れば三十錢を拂ふを常とす借馬車又は人力車にて
 御殿場を發し(人力車賃五十錢)半腸の山道を辿れば登るに隨ひて道稍々
 峻しく往いて五合目以上に至れば四面一樹一草だも見ずして唯だ焦石の
 道に横はるあるのみ又時としては白雲脚下より起りて迅雷の聲を麓の方
 に聞く事あり猶ほ六七合目に至れば砂愈々深くして空氣も亦漸く稀薄と
 なり九合目より頂上に至る間は道殊に峻嶮にして胸突の名空しからず頂
 上には富士山本宮あり又中央に舊噴火坑ありて坑中絶えず雪を貯へ其の
 周圍には奇巖天表に聳え起て舞ふが如きものあり臥て眠るが如きものあ
 り其最も高きを劍ヶ峯と云ひ晴天の日此峯に登れば遙かに二見ノ浦、琵琶
 湖等を望み得べしと云ふ、降りば走り草鞋なるものを二重三重に穿ち

杖を突きて八合目より下り下るものにして其道を走り道と稱へ八合目より一合目まで降るに二時間を費やすに及ばず故に御殿場を午前三時に出發すれば頂上にて寛々休足の後ち午後六時までは御殿場に歸着し得べし又御殿場より剛力(案内者)を雇へば其の賃金は日返り三十錢、一泊五十錢にして一人五客までの案内を爲し荷物は三貫五百目を限りて携帶す若し其重量を増せば客より相當の割増を給すべし、今ま登山者の爲め二三の心得を記さんに富士の頂上に至れば氣候俄かに變じて大に寒氣を覺ゆ故にフラチルの襯衣、外套、布毛等は必ず携帶すべし、頂上に登るに隨ひ空氣の稀薄なるが爲め呼吸せはしくして且眩暈を生ずる事あり此時には少量のブレンダーを服用し且成るべく俯視して歩行するを善しとす、富士山頂上には不時に疾風起り急雨至り其の風力強き時は砂を捲き石を飛ばして殆ど危險に迫るとあり故に登山者は剛力に就てよく天候を聞合せ風雨の起らんとする兆ある時は途中石室に一泊すべし強て險を冒



三島神社之景



佐野野瀑園

して登らんとするは匹夫の勇のみ是を登山者の秘訣とす

●佐野停車場 (静岡縣駿河國駿東郡小泉村字佐野村に在り)

○佐野 是黄瀬川の上流に沿ひたる村落にして今は小泉村に屬す、小泉全村の戸數三百四十戸、人口二千〇四十人にして停車場より三島驛まで一里廿八町、富士山南口まで三里二十町なり

佐野瀨園 是佐野停車場より西北十五町(人力車賃八錢)にして園内廣潤、中央に清流を挿み門を入り一板橋を渡れば旅館五龍館あり雅致ある藁葺の巨屋にして數個の客室を備へ又別に温浴冷浴場の設けあり其前面なる嘯月橋を渡れば茲に數棟の茶亭并に運動場を設け五六の奇巖水に枕みて岸は釣を垂るゝに宜しく其の河水は清さと鏡の如く舟を浮べ網を投するに宜し然れども此園の名高きは川あるが爲めにあらず山あるが爲めにあらずして實に五條の瀑布あるが爲めなり其一を雪解の瀧と云ひ高さ四十四尺幅十五尺、其二を富士見瀧と云ひ高さ同上幅十二尺、其三を月見

の瀧と云ひ高さ同上幅八尺、其四を銚子の瀧と云ひ高さ三十三尺幅七尺、其五を挾衣の瀧と云ひ高さ同上幅十五尺、水は巖に激して白玉四散遠く望めば五頭の蛟龍將に昇天せんとするもの、如し故に館を五龍館とは名けしもの乎、又此園に接續せる山林二千町歩を以て遊獵地となし小鳥兎の類多きが故に雷に避暑納涼に宜しきのみならず銃を肩にして古松老杉の間を跋渉するに適し園主が東海偉觀の字を冠せしも亦故なきに非ず、五龍館一日の宿料は一日四十錢より七十五錢の間にあり

佐野八景　は景ヶ島の秋月、屏風岩の鴛鴦、千福の青田、榮橋の流螢、桃園の櫻花、定輪寺の晚鐘、平松の夜雨、古城の暮雪等にして皆佐野瀑園の近傍にあり而して其の近きは三四町遠きも十二町に過ぎず、右の内景ヶ島は瀑園より北十町にある丘陵の名にして一危橋を渡れば小堂ありて佐文山の筆になれる景島山三字の額を掲げたれども祭る所未だ詳らかならず其の近傍風景佳絶にして特に月夜を善しとす

●沼津停車場（静岡縣駿河國駿東郡沼津町字橋内に在り）

○沼津町　は東海國道中屈指の市驛にして維新前までは水野氏の治所たり、戸數一千九百餘戸、人口一萬〇八百餘人、幅員十九町四方を有し東北は狩野川を境とし西南は駿河灣に瀕す驛内また郵便電信局、學校、病院、裁判所、郡役所、警察署、測候所等ありて一小都會を爲し汽車の發着一日數回東、東京へは五時間にて達し西、静岡へは一時二十分、名古屋へは七時三十分間にして到るを得べく又狩野川口よりは伊豆の戸田、松崎、下田等に通ふ汽船ありて水陸共に往復至便の地なり、其の海濱を千本濱と云ひ白砂青松遠く數里に連なり水清く波穏かにして海浴納涼に適す傳へて言ふ往古乘運寺の開祖増譽上人海風の害を憂ひ毎樹經を誦して之を裁ゆと然れども其の松樹の若さを見れば今の樹は恐らく後人の植ゑたるものなるべし、驛内宿屋の名あるものは左の如し

杉本屋（杉本 和平） 沼津町字上本町　一虎屋（中村九十郎） 沼津町字上本町

元問屋 (萩生居十郎) 沼津町字上本町
桔梗屋 (岩崎佐二平) 同 上

山本屋 (山本 はん) 沼津町字條内

又沼津驛より近傍各地への里程を擧ぐれば三島驛へ一里廿町、原驛へ一里廿七町、箱根驛へ五里八町、修善寺温泉へ七里五町、熱海温泉へ七里卅四町、松崎へ海上十里、戸田へ同く四里、下田へ同く二十里、清水港へ同く八里、吉原驛へ四里廿六町、大宮町へ七里卅二町、静岡へ十五里十町なり」
沼津城址 是條内にあり古へ三枚橋城又は觀潮城と云ひ天正七年に之を築き後ち徳川氏の臣松平康親の居城たりしが慶長六年大久保忠佐茲に移り忠佐卒して後ち廢城となれりと今の裁判所、測候所の所在地及び停車場通りは即ち其の舊城址なり

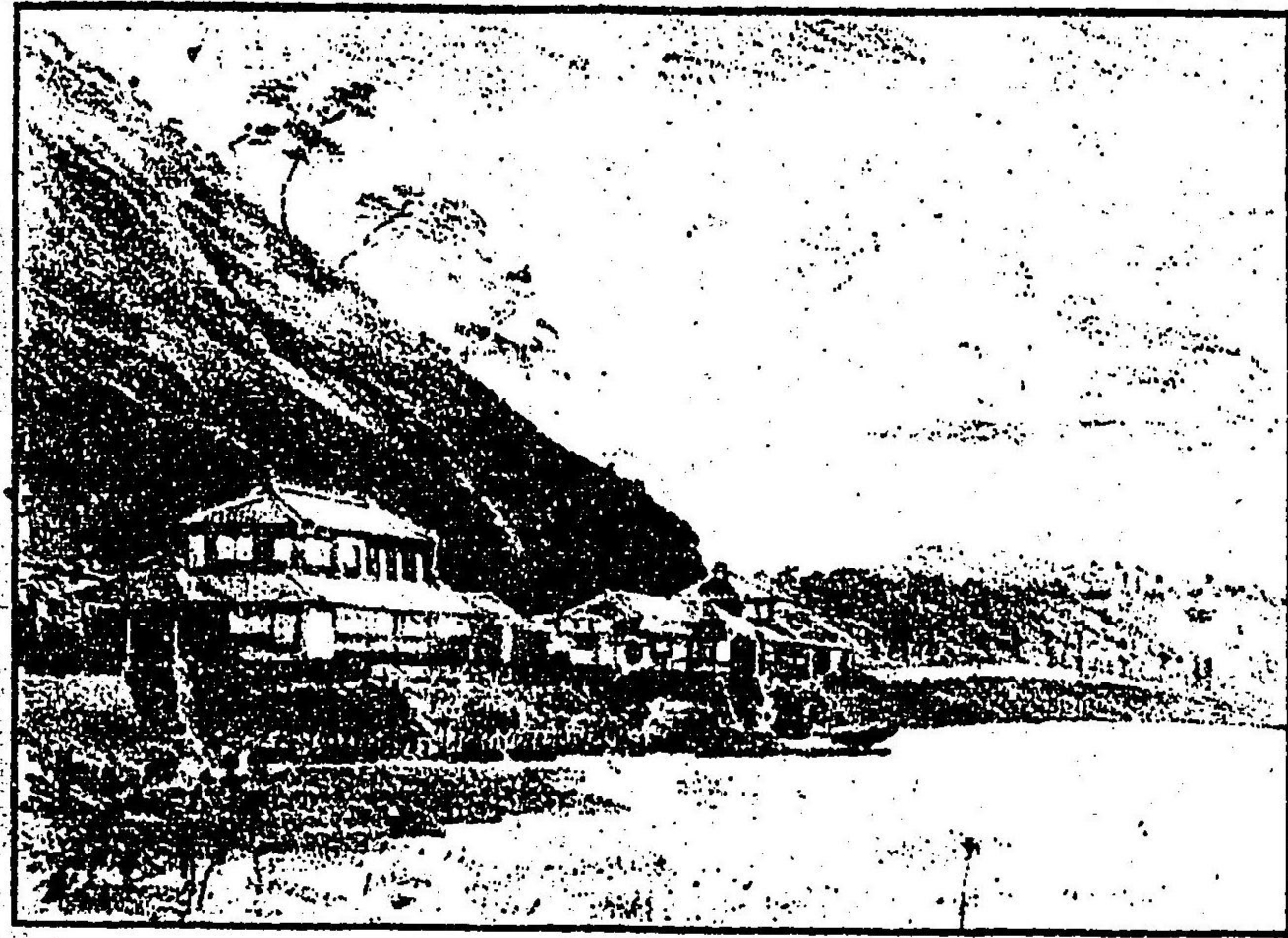
我入道海水浴 是停車場なり西南廿五町狩野川の對岸に在りて海水浴舎を松風館と云ふ、館は二層樓にして前は狩野川に枕み後には山を負ひ西北には千本松原を隔て、田子ノ浦、芙蓉峯を望むべく風色また賞する

に足る同館定めの宿料は並一日二十五錢、中等四十錢、上等五十錢以上にして停車場よりの人力車賃は十錢を以て通例とす

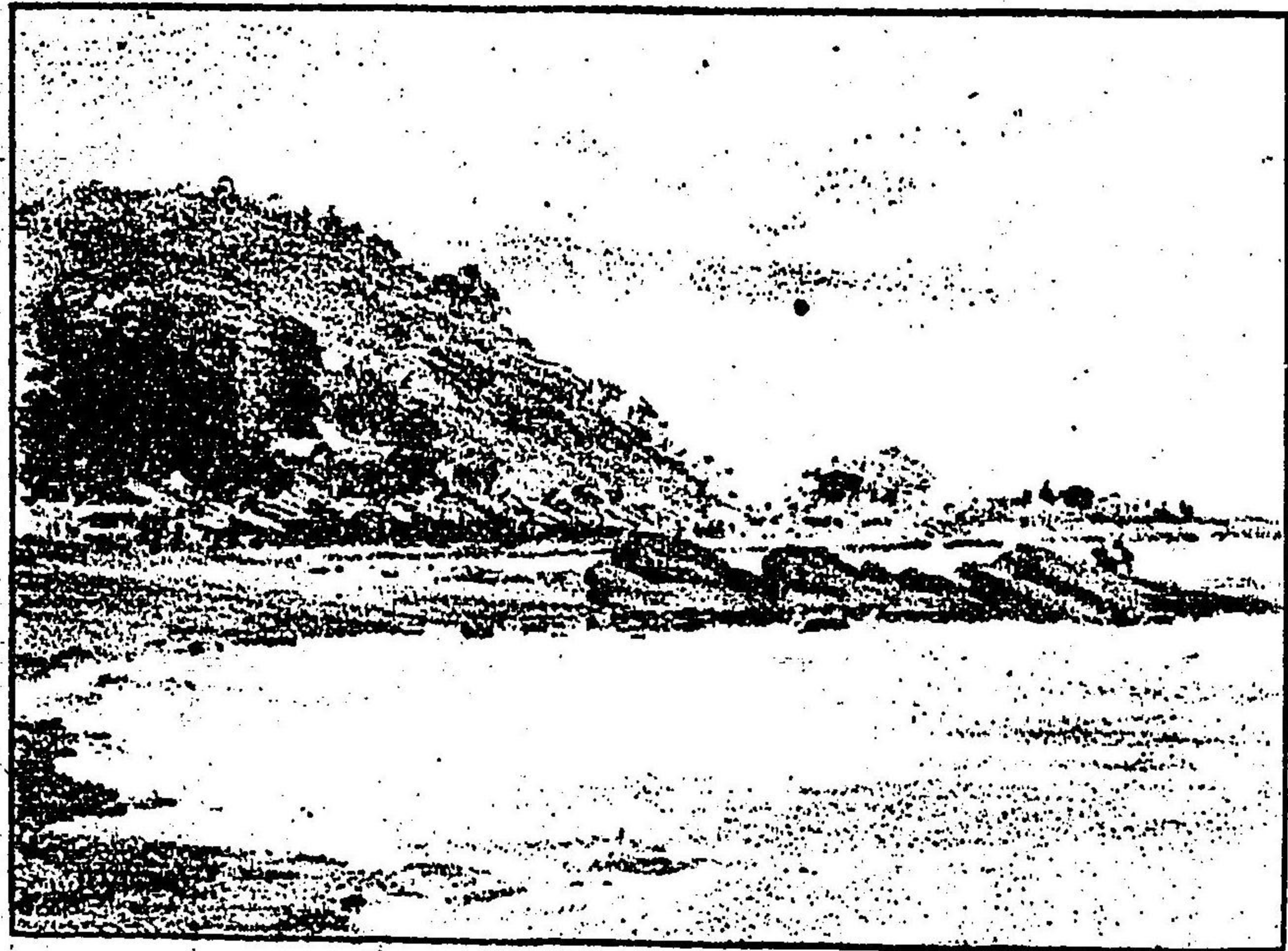
牛臥海水浴 是我入道と背中合せの處にありて距離僅かに三町、地は牛臥山の南麓を切開きて直ちに海濱に接し岬角に奇巖屹立す之を高島岩と云ふ西北には千本濱、田子ノ浦を望むべく前は内浦に面して白帆の點々海上に浮ぶを觀、東には御料材の松青々たる間より二三貴顯の別莊を認め伊豆の眞城山は内浦を隔て、正南に聳ゆるなど其の好景畫圖も猶ほ及ばず、海水浴旅館を三島館と云ひ三島驛世古六太夫氏の所有にして母屋の外に數棟の別莊を設け一屋毎に温浴室の備へあり背後の牛臥山は其名の如く牛臥の形を爲し之に登れば狩野川を隔て、沼津全市を一眸の中に收め西北愛鷹山を凌ぎて富嶽の雲間に聳立するを望むべし、三島館一日の宿料は晝食を併せて四十錢内外、料理は客の好みに應じて調進す
戸田海水浴 是豆州君澤郡の西岸、戸田港の人口字御濱に在り沼津よ

り松崎下田の間を往復する汽船に乗れば海上四里、汽船賃十二錢にして戸田に達す、御濱は戸田港の咽喉に方り長く灣口に斗出する半島にして老松千百枝を交へて繁茂し其中に海水浴旅館保養館あり、館は港の内外を望み外は駿河灣を隔て、三保の松原と相對し北には富士、愛鷹山を望み西南には御前崎を漂渺の間に認むる等亦一個の好風景なり保養館の宿料は一日二十二錢、晝食八錢の定めにして魚類は殊に鮮けさを以て誇る灣の内外また漁りに宜しさを以て保養館は客の需に應じて漁舟を貸し浴客をして随意に釣魚の慰みを爲さしむと云ふ

○修善寺温泉 伊豆國君澤郡に在り熱海に次ぐの繁昌地にして東京よりの旅客は國府津、熱海を過ぎ熱海峠を越えて此地に来るが道順なれども汽車の便に據らんとすれば沼津にて下車するを善しとす、沼津より湊橋通りを原木に出で下田往還を経て修善寺まで里程六里十町、同く三島驛を経て七里五町、三島までは乗合馬車あり同驛より修善寺迄の人力



沼津東洋海水浴場



興津海濱之景

車賃は三十五錢を以て定めとす、此地は三面山を繞らし土地は海面より高きと五十餘尺、桂川其の中央を流れ温泉は多く川の兩岸より湧出せり、湧口の重なるものを獨鈷の湯、河原湯、眞湯、石湯、杉の湯、箱湯、珍の湯と云ひ別に五六の温泉宿庭内より涌出るものあり就中獨鈷の湯は桂川の中央巖石の間より噴出し河水と混じて適宜の温度となり茲に浴槽と雨覆とを設けて浴客を入る河中に於て温浴を爲し得るは修善寺の外未だ之を聞かずして亦一奇觀なり而して其の泉質は多量の鹽分を含み胃加答兒、腸加答兒、肺炎、子宮病、痛風、疝氣等に宜しく病症に依りては傍ら之を飲用するも可なりと、重立たる温泉宿は

- 一等温泉宿 野田 脩治(菊屋) 新井 平八(養氣館) 淺羽保右衛門(對碧樓)
- 二等温泉宿 大川彦八郎(衛生館) 湯川 廣吉(柳屋) 後藤 龜之助(江戸屋)
- 三等温泉宿 野田八郎平(野田屋) 三須 重吉(柏屋) 野田 重嗣(水月樓)
- 柳田 せい(四方樓)

等の十軒にして外に中田屋、橋本屋等の通常旅店あり又菊屋、養氣館一日

の宿料は上等二日五十錢、中等三十五錢、下等二十錢なり

修善寺 是修善寺村の西にあり大同年間僧空海の開基にして後禪宗に改め延徳元年僧玄紹再び之を興すと建久三年源ノ範頼梶原景時の爲め襲はれて此寺に自殺し頼家また北條時政の爲めに此地に暗殺せらる此寺什物多きが中に尼將軍跋高麗版の法華經一卷、北條早雲并に豊太閣の御教書等はわざ／＼一覽するの價あり

○三島町 是東海道なる箱根、沼津中間の驛市にして伊豆國君澤郡に屬し戸數千五百戸、人口八千九百餘人、沼津より東の方一里二十町を隔て日々數回乗合馬車の往復(賃金五錢)するあり町は東西に長くして其東數町の處より直ちに箱根嶺の上り阪に差掛り南は一條の縣道下田港に通じ別に平井、輕井澤等を経て熱海に至るの道あり、町の西二十町許り街道の傍ら宇清水に入幡の祠あり治承四年頼朝こゝに出陣の砌奥州より義經を召して對面したる地なりと言傳へ社の東一町の田畝に今猶は頼朝の御座

石なるものありと云ふ又町の北端二町許りの處に小松宮殿下の御別邸あり庭前大池ありて常に水を湛へ駿豆十八ヶ村の用水たり町内の宿屋は世古六太夫、相摸屋利兵衛、竈屋善藏等數軒あり就中世古氏の家最宏壯にして樓上嶽陽俱樂部なるものを設く

三島神社 是三島町の東端にあり官幣大社にして東海道中熱田神社に亞ぐの大社なり大山祇命を祭り創建の年月は未だ詳かならず鳥居より本社まで凡そ二町、境内に神池あり樓門あり社殿は殊に壯麗を極む大祭は八月十六日にして是日に勅使參向あり又一月六日には御田打祭なるものを執行す古へは之を三島祭と稱へ農民等思ひ／＼の服裝を爲し假面を被り鋤鍬を肩にして町内を踊りあるくの例なりしが今は此事廢れり

○原町 是駿東郡に屬し沼津の西一里廿七町を隔つ、戸數七百三十戸、人口四千三百人、古へは浮島ヶ原と稱せしを後ち略して原と呼ぶ、地は海岸に接し西は田子ノ浦に續き北は半里にして愛鷹山の麓に連なる、東海

道中富嶽の眺めに富みたるは實に此の原驛と富士川との間に在り、町内に鶴林山松蔭寺あり白隱禪師の住せし所にして禪師は明和年間に寂す後櫻町帝曾て神機獨妙禪師の諡を下し明治十七年正宗國師の號を贈ふ又帶笑園あり豪家植松氏の庭園にして珍奇異木を集め別に古書畫數百幅を秘藏するを以て文人墨客の此園に來遊する者頗る多し

愛鷹山 は又足高の字を用ひ高さ三千九百尺其峯は北に走りて伴次郎嶽、鷹巢山と連なり駿東一郡中の高山なり山頂に愛鷹明神の社あり幕政の頃は牧馬場を以て名高かりしが明治維新に廢絶し今は愛鷹牧畜會社ありて牧畜の業に従事せり、麓より山頂まで里程二里半

浮島沼 は一名富士沼と云ふ原町の西凡そ一里、富士郡柏村の北にありて沼の廣さ東西三十五町、南北三十三町、富士八湖の一なり

●鈴川停車場 (靜岡縣駿河國富士郡元吉原村宇鈴川村に在り)

○鈴川 は元吉原の西部にありて此處より街道左右に分岐し右を舊道

とし左を新道とす舊道よりすれば西北廿八町にして吉原町に至り猶ほ三里餘にして大宮町に達し此間鐵道馬車の設けあり、停車場の南丘を砂山と云ひ之に登れば北は富嶽に對し南は田子ノ浦に接し西南遙かに三保ノ松原を望む等風色佳絶なり、砂山の東に妙法寺ありて毘沙門天を安置す其像は聖徳太子の御作にして高さ八尺、肩上に太子の立像を附着す又毘沙門堂の前に鎧石あり長さ一間幅三尺其形頗る鎧に似たり

田子の浦 は鈴川海岸より西は富士川まで東は柏原までの間凡そ三里餘の海濱の名にして此地より富士を望めば其裾は直ちに海岸より突起するもの、如く靈峯は屹然として雲表に聳え山容の偉大なる風色の奇絶なる共に畫圖の及ぶ所にあらず實に東海道中第一の偉觀なり

○大宮町 は鈴川より吉原を経て西北四里弱の所にあり、戸數千四百戸、人口八千六百餘人、富士山表口に當れる一小市街にして鈴川よりは鐵道馬車日々數回往復す(賃金十錢)町の北端に淺間神社ありて大山祇命

を祭る茲より神社の後を過ぎ二股、栗倉、村山に達し猶ほ登ると數町にして富士山一合目に到り夫より山頂まで五里十六町之を富士山表口と云ひ汽車にて關西地方より來る登山者は此道に據るを善しとす其の道路の模様途中の景色等は略ぼ前記の東口新道と同じければ茲に贅せず

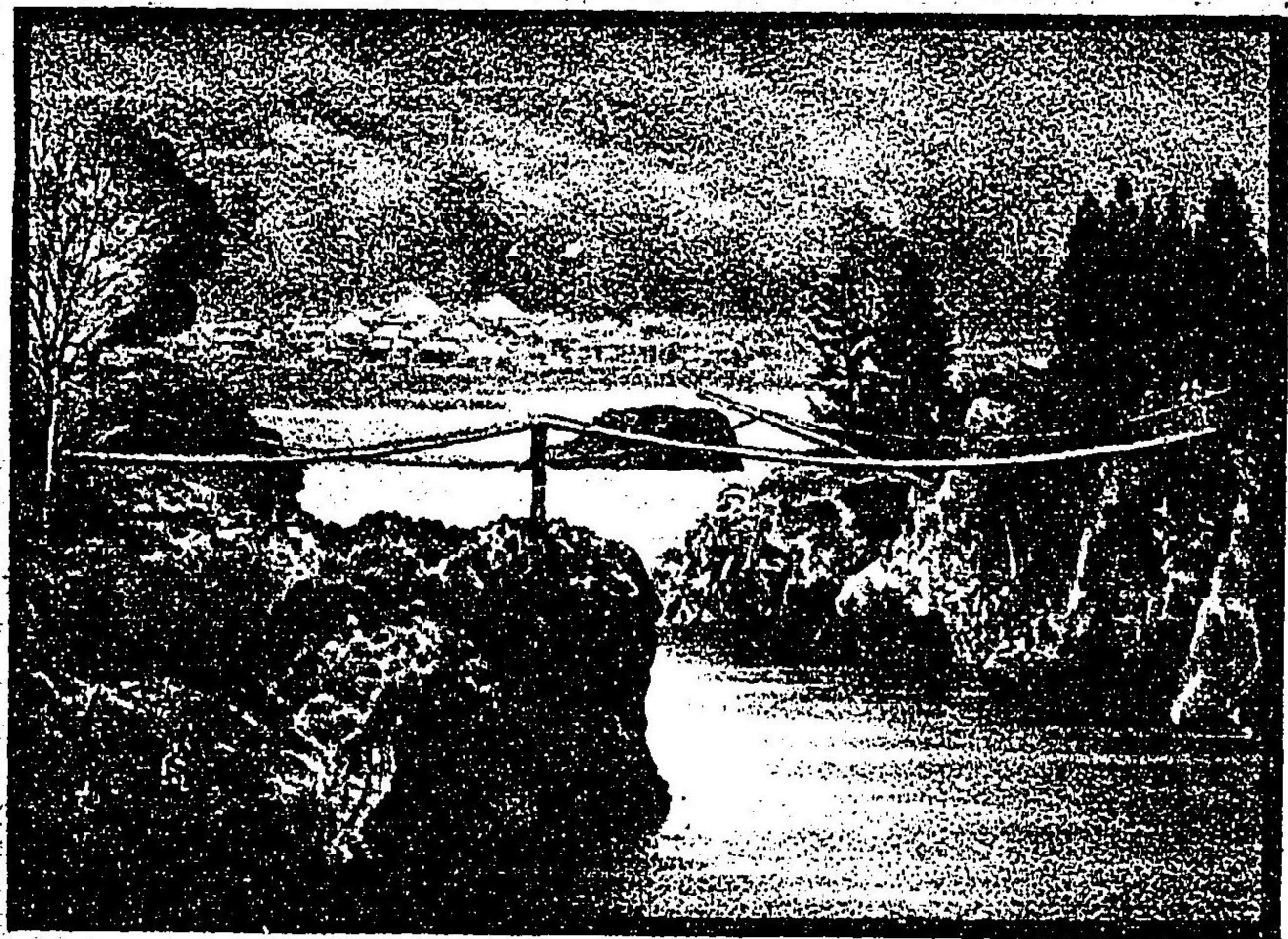
●岩淵停車場 (靜岡縣駿河國富士郡富士村字中ノ郷に在り)

○岩淵 は東海道中富士川の西岸に方れる一驛にして停車場を距る僅々十町、富士川筋通船の定繫場なり、停車場には堀割ありて甲州鰍澤より下る川船は日々停車場構内に入り船を下れば直ちに停車場に達し得る等船客の上下、荷物の運搬共に至便なり、停車場前に二軒の旅店ありて一を谷伊兵衛(谷屋)と云ひ一を深澤長三郎(萬屋)と云ふ

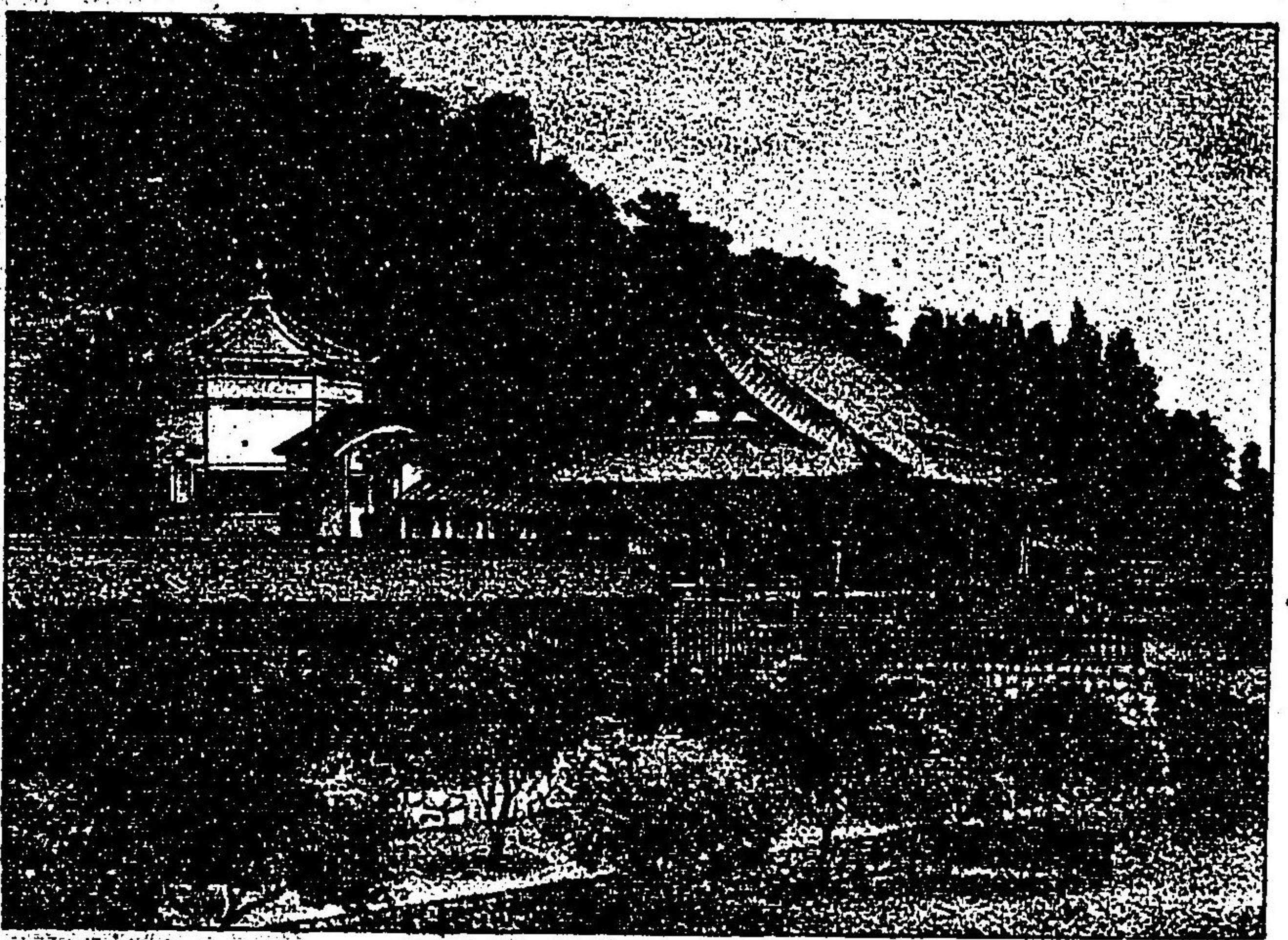
富士川 は水源三つにして之を甲州の笛吹川、釜無川、芦川とし此の三川同國西八代郡市川大門村近傍に於て相合し南流して駿州に入り庵原郡内房に至り東南流芝川を併せ岩淵の東を過ぎて海に入る其里程甲斐の大

門村より凡そ十八里河水最も險急にして日本第三急流の一に算へらる鰍澤より岩淵に下るの間兩岸奇景多く就中屏風岩、俵石、釣橋等は最も異觀なり、治承四年平家の大軍富士川に陣し水禽の羽音に驚きて敗走せしとあるは其地今の富士沼の事なるべしと云ふの説あり又慶長年間徳川氏河底を疏鑿して甲斐に溯ぼるの水路を開けりと

身延山 は甲州南巨摩郡身延村に在りて岩淵停車場を距る北凡そ十里日蓮宗總本山として有名なる久遠寺は即ち此の身延山中にあり、岩淵より舟楫の便あれども富士川の流れ險急にして舟の上ると遅きが故に參詣人は寧ろ陸路を徒歩するを善しとす、道は富士川の西岸に沿ひ松野、萬澤、南部等の諸村を通過し阪路凸凹車を通せず漸く山駕籠を通ずるのみ(駕籠賃五圓)往て波木井川に到り左折すれば本山の總門に達し夫より身延の町家を過れば久遠寺に抵る、文永十一年南部實長僧日蓮を此地に招き一の堂宇を造りて之に居らしめ後文明六年僧日朝今の地に移して久



景之橋釣川士富



寺遠久山延身

遠寺と號すと、寺は先年火災に罹りて堂宇大半焼亡せしむ近頃新築全く成りて祖師堂、眞骨堂共に金彩を施し結構壯麗殆ど人目を眩す、茲より登り四里廿六町にして七面山あり山は海面より高きと四千六百尺頂上に奥ノ院ありて日蓮の像を安置す又身延の旅店中重立たるものは升屋重利、田中屋勘藏、玉屋久之助、梅屋半作等にして旅籠は一泊二十五錢を以て定めとす、歸路は字大井の岸に出で鵜澤下りの川船に乗れば六時間にして岩淵停車場内の堀割に着し其の乗合舟賃も一人前二十錢の上に出でず

●浦原停車場 (靜岡縣駿河國駿東郡浦原町に在り)

○浦原町 は岩淵の西一里廿五町に在りて五十三驛の一、驛の傍らに淨瑠璃姫の墓あり古昔淨瑠璃姫義經を慕ひて三河の矢矧より陸奥に到らんとし此地に來りて死せりと又驛の北端に城趾あり曾て北條綱重の占據せし所なりしも永祿年間綱重亡びて後ち廢城となり今は僅かに其跡を存す、浦原より由比驛まで里程一里弱、浦原には旅店柏屋義兵衛并に岩淵谷

屋の支店あり

●興津停車場

(靜岡縣駿河國庵原郡興津町字中宿に在り)

○興津町 は東海道の一市驛にして庵原郡の海岸に接し興津宿、清見寺町、八木間村、承元寺村、横山村、谷津村、薩陲村、中宿等を併せて戸數千戸、人口五千四百人、驛内郡役所あり爲換取扱所あり電信局あり、警察分署あり其海濱を清見潟と云ひ西北三町にして興津川あり

清見寺 は町の西部鐵道線路の傍らにありて禪宗なれども開基未だ詳らかならず今ま巨鼈山清見興國寺券舊記なる書に據るに寺は浮見長者の開基にして足利尊氏之を再興し嘉吉二年今川氏親僧明元を招きて中興開山とす云々、境内眺望佳絶にして三保ノ松原を眼下に望み清水港は宛も庭中の一池泉に異ならず此寺また什寶多し

清見潟海水浴 は興津の海濱に在りて停車場より僅かに七町(人力車賃五錢)地は清見關の古跡即ち今の御料地に隣り海岸には巨巖起伏して

波浪の荒さを防ぎ沙白く水清くして最も水浴に適す而して其景色を云へば南には三保ノ松原海中に斗出して一碧天色と連なるを觀、東には伊豆の連峯、東北には富嶽、愛鷹山等を望み山海の眺望兩眼の中に聚り來りて胸間豁然また身の塵間に在るを忘れしむ海水浴旅館は海水樓（岩田龜次郎）一碧樓（望月半十郎）身延樓（大野儀一郎）佐野屋（佐野左右造）等にして皆興津宿に在り就中海水樓は御料地の東隣御坐岩の彼岸に高樓を新築し四方の風光を檐に集めて室内また清潔尤も貴紳の投宿に適す同樓の宿料は一週間一等七圓、二等五圓、三等三圓五十錢、四等二圓五十錢一泊は二十五錢の定にして魚貝新鮮、名物の興津鯛殊に名高し

●江尻停車場（靜岡縣駿河國庵原郡江尻町字辻村に在り）

○江尻町　は東海道五十三驛の一にして戸數九百七十戸、人口五千三百餘人、南は清水港に接し靜岡を距る二里卅一町稍や繁盛の地なり宿屋は京屋源兵衛、新井屋五三郎等を善しとす○清水港は江尻の南十五町海

濱に人家櫛比し港内に船舶輻輳し駿河國中唯一の良港にして横濱神戸等への定期航海船あり清水町は有渡郡に屬し戸數九百八十戸、人口五千七百餘戸、其港灣は東西二十町南北二十三町深さ十五俣なり

三保ノ松原　は清水港の南より沙洲東北に向ひて斗出する凡そ一里青松洲中に生茂り風景秀麗また東海の一勝區なり松林の中央に御保神社ありて三保津姫、大巳貴尊を祭り羽衣、松は社より東南五町の海濱にあり天の羽衣の事は謠曲にもありて人の識る所なれども個は神代に大巳貴尊天の羽車に乗りて妻を求めたまふ其羽車を羽衣と言ひ誤りて天人の事をも附會せしにやと貝原吾孀記に見たり猶ほ考ふべし

久能山　は江尻の西南二里半、東海道の上原より左折して直ちに山道に掛り一里餘にして山頂に達す或は清水、駒越を経て有渡郡の南岸に出で根古屋村より北折すれば十餘町にして頂上に到るを得べし、山頂に東照宮ありて徳川家康の靈を祭る元和三年の創建にして社殿は壯麗を極め

山上また故山岡鐵太郎氏の創建に係る鐵舟寺あり此山に登臨すれば東北には富嶽、田子ノ浦を望み清見瀉、三保ノ松原は其眼下にありて自ら遠近の景を補ひ風光明媚真に歸るを忘るゝの地なり

● 靜岡停車場 (靜岡縣靜岡市字榮町に在り)

○ 靜岡市 駿河國中第一の都會、靜岡縣廳の所在地にして昔時府中と稱す足利氏の時今川範國此地を治し傳へて八子義元に至り義元死するの後ち武田晴信之を奪ひ武田氏亡びて後ち徳川氏此地を統治す天正十八年徳川氏の關東に遷るや中村氏一族を本州に封じ嗣子忠一に傳ふ其後内藤信成、徳川頼宣、徳川忠長相次て此地に封せられ寛永九年忠長罪ありて國除せられ城代を府中に置く維新の始め徳川家達を駿州に封じて府中に治し改めて靜岡と稱す、其廣袤は東西二十九町、南北十五町、戸數七千七百餘戸、人口三萬八千四百餘人、裁判所、警察署、師範學校、市役所、有渡阿倍郡役所、郵便電信局、病院、銀行、諸會社等また悉く市中にありて四方の

貨物輻輳し傳馬町には旅店櫛比し安倍川町(俗に二長町と云ふ)には妓樓軒を並べて晝夜絃歌の聲を絶たず、新聞社には大務、民友、曉鐘あり諸會社には製絲會社、製紙會社、運送會社、肥料會社、借榮社、資産貸附會社、通運會社支店等あり、市内有名なる旅館は左の如し

- 大東館 (平尾兼三郎) 紺屋町 袋屋 (太井啓次郎) 吳服町三丁目
- 清鶴樓 (小林東一郎) 榮町 安田屋 (安田故太郎) 靜岡宿
- 機陽館 (山本七十郎) 同上 品川屋 (田中富次郎) 紺屋町

又物産は賤機織、漆器、竹細工、寄木細工、茶、紙、椎茸等を著名とす今や市内遊覽すべき神社佛閣等を擧ぐれば

淺間神社 市の西北隅に在りて停車場を距る凡そ十五町(人力車賃六錢)縣社にして本社は木花開耶姫を祭り延喜元年の創建、別社は大己貴尊を祭り崇神天皇御宇の創建なり社前の華表を潜て石階を登れば境内廣くして眺望快潤、西阿倍川を望む所景色殊に佳なり其社殿の美麗なる内國中日光を第一とし當社を第二とすと云ふ、境内を公園と爲して櫻

桃數百本を栽ゑ又背後の高丘賤機山に登れば遠望更に爽快にして風光秀麗、山に櫻樹多く又茶亭あり以て小憩するに宜し

寶臺院 是停車場の西三町字江尻町に在り浄土宗にして永正三年僧裕崇同郡柚木村に創建して龍泉寺と稱す天正十七年徳川家康の側室西郷氏を此地に葬り後改稱して寛永五年今の地に移す

臨濟寺 是賤機山の北數町阿倍郡大岩村にあり天文年間今川義元之を創建し僧宗休を以て開基とす其隣地は義元の古城趾にして臨濟寺には今猶義元の畫像を藏し毎歲五月十九日は義元の忌日なるを以て諸人の參詣を許し又其寺寶を縦覽せしむ

安倍川 是三源あり其最も長さものは安倍郡梅ヶ島村より發し南流向敷地村にて藁科川と合し靜岡市の西部を経て海に入る其藁科川と合する三股の處に舟山あり夫より藁科川を溯ると五六町にして左に風の森あり又安倍川の水源には黒水晶、馬蹄石等を産す

宇都谷嶺 是靜岡より西ノ方凡三里九子岡部兩驛の間にある一峻嶺にして伊勢物語に所謂宇津の山是なり、今は國道に隧道を設け自由に車馬を通ず、古歌に薦の細道又は薦の下道と詠みしは此嶺の舊道にして頗る峻嶮なる小徑なり、鐵道線路は九子の南を過ぎて宇都谷山脈の南麓を迂回し石部に隧道を穿ち西行して藤枝に達す其海濱石部、小濱間は斷崖直ちに波打ち際より屹立し地形極めて峻、所謂大崩の名ある處にして東海鐵道線路中また一個の好風景を備ふ

● 燒津停車場 (靜岡縣駿河國益津郡燒津村字中村に在り)

○ 燒津 是靜岡を距る二里益津郡の東北岸に位する村落にして海濱に漁家多く全村戸數千五百餘戸、人口八千九百餘人其の小名を燒津、城ノ腰、鰯ヶ島、北新田、新屋、中村、大村、鹽津、八楠村等と云ふ、燒津村の北端に縣社燒津神社ありて日本武尊を祭り吉備武彦命、大伴武日連、七束脛を配祀す、景行天皇の四十年十月日本武尊東征の際賊徒草原を燒きて之を

園かこむ尊むら叢雲の劔を振ふるひて草を薙たぎ以て賊徒を芟除し給たまひたるは乃ち此地なりと云ふ其海濱は海水浴に適あじ近頃旅館秋月樓の新築あり樓は停車場を距る僅々六町庭園廣く眺望佳にして館内温浴、冷浴の設まけあり同館定めの宿料は一夜上等三十五錢、中等二十五錢、下等十六錢、晝食は十錢より二十錢迄にして別に料理屋を兼業とす

●藤枝停車場 (靜岡縣駿河國志太郡青島村字前島に在り)

○藤枝町 是東海道五十三次の一、志太益津郡役所の在る所にして停車場より驛の中央まで凡そ二十町、戸數一千四百餘戸、人口八千人、西は瀬戸川を隔て、島田驛へ二里十三町、東は岡部驛へ一里廿六町、南は燒津の海濱へ一里餘、北は朝比奈、葉梨の諸村に接し驛の南端に舊本多氏の城趾ありて田中、城と云ふ又蓮生寺あり親鸞上人東國巡錫のをり暫く逗留したる舊跡なりと言傳ふ其他區裁判所、警察署、町役場、藤枝銀行、共盛銀行、郵便電信局、私立病院、高等學校等あり旅人宿は

越前屋(大塚治郎兵衛)藤枝町字上傳馬町 魚 安(桑原定吉)同 字下傳馬町

柿屋(伊藤傳藏)同 字鍛冶吹町 魚 屋(桑原孫右衛門)同 上

等にして宿料は上等五十錢、中等廿五錢、下等十五錢なり

志太鑽泉 是藤枝停車場より二十三町青島村字鹽湯ヶ谷に在り(人力車賃九錢)旅館を潮生館と云ひ四面綠樹翠草を還らし庭園に茶店、楊弓店等の設まけあり又天然の瓦斯を引き夜は客室悉く瓦斯燈を點火す、鑽泉は多少の硫黃質を含み脚氣、子宮病等に効能ありと云ふ同館の宿料は一日廿五錢以上五十錢迄にして別に席料を要せず

●島田停車場 (靜岡縣駿河國志太郡島田町に在り)

○島田町 是駿河國の南端、大井川の北畔に位し(大井川を以て駿遠の國境とす)戸數二千餘戸、人口九千七百人、五十三驛中の一賑地なり驛内に明神の社あり又島田銀行、綿糸紡績所、爲換取扱所、郵便局あり旅店は中島屋次郎兵衛、白木屋茂吉等を善しとす

大井川 は水源を甲斐信濃の界白峰より發し東俣川西俣川と云ひ合流諸澗水を併せ遠州榛原、駿州志太二郡の界を貫き南流川尻村の東に於て海に入る延長凡そ四十六里、海口の澗さ十八町東海道中天龍川に亞ぐの大河にして平時は水少く徒歩にて渡り得べきも雨後河水の漲るときは川幅半里の間水溢れて岸を浸す是れ古へ川留ありし所以なり

●金谷停車場 (静岡縣遠江國榛原郡金谷町に在り)

○金谷町 は大井川を挾んで島田町と相距る一里五町、戸數一千百餘戸、人口六千三百人、大井川鐵橋を其東に望み牧野原隧道を其東に眺むる等此驛の前後に偉大の土木を観るを得べし、驛の南牧野ヶ原に諏訪ノ原古城趾あり此城は天正元年武田信豊、馬場尙房の兩人繩張して築く所なりしが今は纔かに天守臺の跡を認め得るのみなりと云ふ

五和村潮鑛泉 は金谷停車場より北へ二十五町(人力車賃十五錢)大井川の西畔に在り此地は後に丘陵を負ひ前に田野を見晴し高丘に登れば大

井川を眼下に望み得る等眺望稍や快濶、泉質は冷泉にして多量の鹽分を含み脚氣、痲痺室斯、腸痛、胃弱等に効驗ありと云ふ旅館は潮月館一軒にて宿料は一泊二十錢、浴料は一日分三錢なり

小夜の中山 は金谷より日阪に越ゆる小嶺の名にして古今集以下の撰集に其名高く八雲抄に「さやの中山と云ひ宗祇の方角抄には小夜の山と見ゆたり、夜泣石は日阪より東二十町許りの街道の傍らにあり其東一町に夜泣松また其後に妊婦の塚あり傳へて云ふ昔時日阪に一人の妊婦あり一夜金谷宿なる夫の許に行かんとて此山中を通行せし時山賊の爲めに斬殺されぬ然るに体中の赤兒幸ひにして生命を全らし其子成長して母の讐を討取りたりと妊婦の塚は乃ち其母を葬りたる處なり云々

●堀之内停車場 (静岡縣遠江國城東郡西方村堀之内に在り)

○堀之内 は城東郡西方村に屬し東南榛原郡川崎町へ三里半、同く相良町へ四里半、掛川驛より右の兩所に至る街道の村落にして戸數僅か

は二百坪ありしも停車場設置以來追々大家増殖せり茲より掛川に至る線路にまた一隧道ありて溝水隧道と稱す

●掛川停車場 (靜岡縣遠江國佐野南郷村字南西郷に在り)

○掛川町 是佐野、城東郡役所の在る處にして遠江の東南部に位し東海道に衝る戸數二千三百戸、人口六千四百餘人、停車場より町の中央まで凡そ十町を隔つ、此驛より右折して秋葉山、鳳來寺、豊川稻荷等を経て御油驛に出る岐路あり、驛の北端に城趾あり今川氏眞の籠りし所にして永祿十二年敵の爲めに破られて氏眞小田原に退くや石川日向守此城を奪ひ後ち豊臣氏山内一豊を此地に封すと、驛内にまた警察署、區裁判所、掛川銀行、郵便電信局、爲換取扱所等あり其の旅店の重なるものを藤屋藤吉、常磐屋保吉、松本屋長之、松田久三郎等とす

秋葉山 是周智郡大居村に在りて山上に縣社秋葉神社鎮坐し軻遇突智神を祭る、掛川驛より東海道を西行すると數町にして直ち北折すれば

乃ち秋葉道なり其里程は掛川より森町まで三里、森町より三倉まで二里半、三倉より秋葉山阪下まで四里半、阪下より秋葉神社境内まで立登り五十町、合計十里五十町なれども森町北以は阪路多くして稍や峻峻、人力車は二人曳を雇ふを善しとす其賃金は掛川より阪下まで凡そ二圓、一人曳なれば其半額なれども阪路に至る毎に下車して徒步するの累ひあり社は元迄秋葉寺に屬し養老二年行基大師の創建に係り寺内に三尺坊ありしが明治六年寺を廢して三尺坊を可睡齋に移す(次項を參看せよ)秋葉神社は境内宏濶にして老杉其三面を圍み社殿壯麗にして詣路には數百基の燈籠あり毎歲十一月の大祭には參詣人遠近より來集して頗る雜沓を極め其の阪下茶屋町には數軒の旅亭あり、歸路は阪下より西して天龍川の岸に出で川舟に乗りて流れを下れば三時間餘にして東海道の池田村に達し三十町にして中泉停車場に至るを得べく又雲名、石打、熊、巢山、大野等を経過し八里半にして鳳來寺に至るの道あれども山路峻くして人力車を通せず

其の途中樂山より阪を下り左折すれば阿寺七瀧あり瀑布の落る處第一より第七まで都て七ヶ所其高きは十丈、低きも一丈五尺に下らず亦一顧の價あり(風來寺の事は豊橋の部に掲ぐ)

●袋井停車場 (静岡縣遠江國山名郡笠西村字高尾に在り)

○袋井宿 山名町に屬し東海道五十三次の一にして停車場より宿の中央まで凡そ十町、此地古へは四方に丘陵を繞らし中に田園ありて袋の如く其中心に井ありて四方の田畑に灌漑せり故に袋井の名ありと可睡齋 周智郡上久能村に在り掛川停車場より西の方三里十町(人力車賃二十錢)袋井停車場より南三十餘町、禪宗にして應永十四年の創建、僧恕忠の開基なり明治六年秋葉寺三尺坊殿を寺内に移して其の堂宇を新築し賽人常に絶ゆるとなし

●中泉停車場 (静岡縣遠江國豊田郡中泉町字中泉村に在り)

○中泉 は見附驛を距る南十餘町の小市街にして戸數六百五十戸、人

口三千五百戸、古への街道に方り遠州の國府ありし處なり、見附は五十三驛の一にして郡役所、警察署あり旅店は石橋六郎、村田又藏、井澤屋善太、鈴木孫中等數軒あり又中泉には郷社八幡神社ありて應仁天皇、仲哀天皇を祭る

天龍川 は水源を信州諏訪湖より發し南流して遠州の西北隅より中央を貫き氣田川、阿多古川を併せ豊田郡にて分流瀨ヶ崎等の數村を抱き松木村にて復合し掛塚村に至り海に灌ぐ其延長六十里、水流急險なれども舟楫の通ずる處凡そ二十五里と云ふ

●濱松停車場 (静岡縣遠江國敷智郡濱松町字八幡地に在り)

○濱松町 は舊と井上氏の城市にして一たび濱松縣廳を置かれし所東西十五町、南北十七町、戸數二千七百戸、人口一萬四千餘人、東海道、三河、駿河、信濃、新所、渡船等の諸街道に衝り長上、敷知、濱名郡役所、静岡地方裁判所支廳、警察署、郵便電信局、爲換取扱所等皆町内に在り、町の北端に

濱松城趾あり永祿の末徳川氏の治下に屬し徳川氏の關東に移るや豊臣氏堀尾吉晴を此城に封じ關ヶ原役の後ち徳川氏之を松平忠頼に賜ひ慶長十四年に至りて徳川頼宣を封じ元和五年此城をまた高力忠房に賜ひ次で井上正春に賜ふ城内東照宮ありて社殿美を盡し詣人常に絶えず、其他五社神社、半僧坊の出張所、秋葉神社出張所等あり又此地より秋葉山の賽路ありて町盡處に一ノ鳥居あるを見るべし濱松停車場より秋葉山頂まで十里廿一町其内三方ヶ原より二股村までは人力車を通ずれども二股以北は阪路にして徒歩せざるを得ず(二股まで里程六里、人力車賃一人曳五十錢)近年出版の或る名所圖繪に二股村より二里十町を経て光明山に大垂瀧あり由を記したれども大なる誤りなり、大垂瀧は大井川の西、白光山の北麓に在りて金谷驛より北四里を隔て光明山とは全く五六里の方角違ひなり個は茲には要なき事なれども旅人を惑はす事もあらんかどて筆の序に記し置くのみ、濱松旅人宿は數軒あり就中大米屋信平(傳馬町)花屋總造(同

上)の二軒最も手廣にして兩家とも曩は火災に罹りて焼失せしも今や新築全く成りて客を待つ室内清潔寢具も亦善美にして其宿料は兩家ども一泊二十五錢以上五十錢迄を限りとす
 三方ヶ原 は濱松の北一里餘、敷智、引佐の二郡に跨がり東西三里南北二里の原野にして原中一軒の茶圃あり百里園と云ふ古へは和地、祝田、都田三郷の牧場なりしが故に三方ヶ原と云ふとぞ、元龜三年武田信玄此處に出陣し大に敵兵の爲めに敗られたる舊地なるを以て今猶は古戰場として其名を存す又昔し引馬野と呼び萬葉集に長忌寸與麿が「引馬野に匂ふ榛原入亂れ衣にははせ旅のしるし」と詠みしは此原の舊名なるべしと賀茂真淵翁の萬葉考別記に見えたり
 井伊谷神社 は濱松驛より西北凡そ四里引佐郡井伊谷村に在り官幣中社にして宗良親王を祭る、社殿は明治四年に造營せしものにして金彩の美なりと雖も亦自ら尊とけなり宗良親王は後醍醐帝の皇子なり

奥山半僧坊 是井伊谷村より西凡そ一里半(濱松驛より五里半)同郡奥山村に在りて寺を方廣寺と云ふ、聖鑑國師の開基にして天中元年郷主奥山朝藤之を建立す半僧坊の堂宇は開山堂に隣り其結構壯麗を極む又境地に十勝あり之を白崖峯、虎豹石、羊腸石、游龍窟、抱腹岩、貝葉谿、龍偃杉、玄聖關、靈仙洞、龜背橋と稱す

鴨江寺 是停車場より西數町、淺場村字東鴨江に在り高野山寶性院の末寺にして本尊觀音の像を安す開基、創建ともに詳かならず

●舞阪停車場 (靜岡縣遠江國敷智郡篠原村字馬郡に在り)

○舞阪 是東海道の中濱名湖今切の東岸に方れる宿驛にして戸數二百八十戸、人口二千一百人、國道には板橋を架し西、新居驛まで一里七町、西南五六町にして今切の湖口に到る

濱名湖 是敷智郡に屬し東西凡そ二里餘、南北二里廿五町湖中風景明媚にして近江の琵琶湖と併び稱せらる此湖舊と猪牙湖と呼び往時は南に

流れて一河を爲せしも明應八年海嘯の爲めに湖溇崩決して裏海となれり故に其湖口を今切と云ふ又此湖に鱒を産し其味殊に佳なり

●鷺津停車場 (靜岡縣遠江國敷智郡吉津村字鷺津村に在り)

○鷺津 是新居驛の西北二十町許り濱名湖の西岸に在り舊一漁村にして人家百戸に過ぎりしが停車場を此地に設けしより以來新居、白須賀等より移轉する者多くして稍や繁盛に赴けり又此地湖岸より遠望すれば濱名湖を隔て、北に御鷺山を仰ぎ東は遙かに駿遠の連峯を望み風景殊に秀麗、夏日は舟を湖上に泛べて涼を納るゝに宜し

●豊橋停車場 (愛知縣三河國渥美郡花田村に在り)

○豊橋町 是慶長以來松平氏の治所にして元と吉田と稱し維新の後ち豊橋と改めて額田縣の管轄に屬し後ち之を愛知縣に併す、其區域は東西十八町、南北八町、戸數二千九百戸、人口一萬三千餘人、市坊九十一を有す、町の東北に舊城あり今は第三師團歩兵第十八聯隊の營所たり又豊橋

區裁判所、渥美郡役所、警察署、郵便電信局、銀行支店、魚鳥會社、運輸會社等あり、今例に依り著名の旅店を擧ぐれば左の如し

小島屋 (富田源四郎) 豐橋町字札木町 相摸屋 (加藤平左衛門) 同 字舟町
つば屋 (加藤庄六) 同 字舟町 米 善 (石川保十郎) 同 字本町

小島屋、壺屋等は停車場前に支店を設け客の送迎、手荷物の運搬を掌とる又此地は煙火の製造を以て名高く其製品は毎年横濱其他の各地方に輸送し別に名倉砥、刻煙草等を以て此地の名物とす

豐川 是源を設樂郡神山の麓に發し西南流設樂、八名二郡を界し有海村に至り寒狭川を併せ南流豐橋の北を経て海に入る長さ凡そ十七里、豐橋町に板橋を架す長さ百二十間乃ち豐橋なり

豐川稻荷 是豐橋停車場の東北凡そ二里、東海道の小阪井より右折し半久保を経て豐川村に至る乃ち稻荷の所在地なり(豐橋よりの人力車賃十五錢) 稻荷は妙巖寺地中に在り今は叱枳尼天と稱して神佛の區別を明

かにしたれども猶は舊名豐川稻荷と稱する者多し、妙巖寺は禪宗、僧義易の開基、嘉吉元年の創立にして寺域廣寬、庭園あり泉池あり叱枳尼天の本堂は乃ち此地内にありて依然神社の趣きを存し堂宇頗る壯嚴なり

砥鹿神社 是豐川村の東北一里一、宮村に在り(豐橋よりの人力車賃二十錢) 國幣小社にして大己貴尊を祭る社記に曰く大寶年中文武天皇御惱あり草鹿砥公宣卿勅使として煙巖山鳳來寺に參向の際神諭に依りて社を此地に創建し公宣卿の後裔世々社の神官たり云々、一の宮村より北五十町の山路を登れば大宮山に峰の社あり祭日參詣の者多し

鳳來寺 是豐橋の東北凡そ十里、豐川、一の宮二村を過ぎ豐川の左岸に沿ひ長山、新城、瀧川等を経て門谷に達す即ち鳳來寺山の麓なり(豐橋より二人曳人力車賃一圓廿錢) 鳳來寺は鳳來寺山の南腹設樂郡門谷村に在り宗は天台、眞言の二派に分れ煙巖寺と號し利修仙人の開基にして大寶年中之を建つと本尊藥師佛は開基利修の作にして長さ二寸八分一丁三禮し

て之を刻みたりと言傳ふ其他開基堂、鏡堂、毘沙門堂、三層塔、護摩堂ありて寺域頗る廣濶、其右に東照宮の社あり寺記に曰く昔し推古天皇の御宇三河の國司奏して曰く桐生山に桐樹あり高さ四十九丈幹虛洞にして龍其中に栖み枝に異鳥棲めり全身五彩啼く聲嚙々たり一日三尾を落す故に之を獻す又洞中に佛像あり手指に寶壺を持して金光ありと上宮太子聞召して是れ鳳凰なり此鳥文徳を好む今此鳥の出るは陛下神皇の紀を闢き儒佛の道を弘むるの前表なり彼の佛像は瑠璃光佛なるべしとて利修仙人を召して精舎を此山に造らしむ利修乃ち當山の七本杉を採りて樂師を刻む今の本尊即ち是なり云々概ね寺社の縁紀には斯る無稽の事多くして信するに足らずと雖も姑く筆の序に記し置くのみ、其麓門谷には四五軒の旅人宿あり又大野より大森山の北部を越えて秋葉山に至るの山路あり委しくは掛川停車場の部を參看すべし

大岩觀音　は豊橋より東の方一里十五町東海道二川驛に至る途中大岩

村にあり龜見山窟堂と號し僧行基作の千手觀音を安す堂の後に大巖あり高さ八十尺形ち龜甲に似たり又岩頭に銅像の觀音を建つ高さ六尺許り明和二年江戸谷中の某氏寄進する所なりと云ふ此の岩頭の佛像は瀛車進行の際線路の北傍に望み得べし

●御油停車場 (愛知縣三河國寶飯郡御津村字西方に在り)

○御油　は五十三驛の一にして停車場と相距る凡そ三十町、戸數三百餘戸、人口一千五百餘人、寶飯郡役所、警察署等あり、此驛より豊川稻荷へ二里、鳳來寺へ十里餘、其距離は凡そ豊橋より赴くものと異ならず又驛の北一里餘牛窪村に山本勘介居宅の跡ありて今は田園となれり

●蒲郡停車場 (愛知縣三河國寶飯郡蒲郡村字小江に在り)

○蒲郡　は豊橋より横須賀、西尾等に至る街道に衝り寶飯郡の南端渥美灣の海濱に在り戸數六百五十戸、人口三千二百人、舊は蒲方、西ノ郡の二村なりしを近年之に府相、小江、新井形の三村を併せて町制を施す

蒲郡海水浴 蒲郡海濱停車場より僅々四五町の處に在り、前に竹島、大島、小島の小島嶼を望み西に端田の岬斗出し前面には渥美郡の小半島西に走りて灣を抱き宛がら小湖水の靄あり、海岸浪靜かに水清く之に加ふるに山明水媚の眺めあり、海水浴旅館は健碧館、海月樓を最とし其他猶は數軒の宿屋あり健碧館一日の宿料は上等五十錢、中等三十五錢、並二十五錢位にして館内に温浴、水龍等の設けあり

●岡崎停車場 (愛知縣三河國額田郡桂村字土取に在り)

○岡崎町 是停車場を距る東北一里、東海道中有名なる市驛にして古は徳川氏の治所たり天文年中徳川氏の興るや首として此地を本領とし漸次西境近郡を略取す已にして今川義元の爲めに攘奪せられ義元死するに及びて徳川氏舊疆を復し次で盡く全州を統治し關ヶ原の役終りて徳川氏本多康重を此地に封じ王政革新に際し藩を廢して額田縣廳を此地に置き後ち又愛知縣に併す、市街東西一里三町、南北十二町、戸數四千戸、人口一

萬六千人、岡崎區裁判所、額田郡役所、愛知病院支院、岡崎療養院、郵便電信局、岡崎銀行、三河新聞社等皆な町内にあり、岡崎城趾は今ま公園地となり園内東照宮を祭る其傍ら生湯の井あり家康公當城にて誕生の折生湯の水を汲みし井なりと云ふ、旅店は

- かぎ屋 (小幡管四郎) 岡崎町字傳馬町 山田屋 (山田さく) 同 上
- 桔梗屋 (杉山半七) 同 上 丸 藤 (大村しげ) 同 字籠田町

等にして鍵屋、桔梗屋は停車場前に支店あり、停車場より市街の中央まで人力車賃六錢を定めとすれども雨中、夜間等は二三割を増すべし停車場道は新開の道路なるを以て雨後は道殊に悪し

矢矧川 は一に矢作川と書す、源を美濃惠那郡阿賀瀧山に發し西南に流れて州界を爲し三州東西賀茂郡に入り渡合村にて足助川を容れ岡崎の西を過ぎ西南流碧海郡河野、川島の東を經、前濱新田に至りて海に入る延長凡そ二十八里、濶さ凡そ三町半、岡崎城外に長橋を架す所謂矢矧橋なり

橋の西畔矢作村の田の中に竹林ありて古く矢矧の長者が住ひし宅跡なり
 と言傳ふ又淨瑠璃姫は此長の女なり義經を慕ひて陸奥に赴かんとし蒲原
 驛に至りて死せりと其墓の事は既に蒲原の部に記せり
 大樹寺 岡崎町の北凡そ三十町鴨田村に在り淨土宗、勢譽上人の開
 基にして文明七年松平親忠之を創立すと、本尊は長七尺の阿彌陀佛にし
 て左右に圓光、善導二大師の像を安す什寶に吉瑞大貫木なるものあり昔
 し徳川氏敵軍と交戦の時寺僧素堂といふ者此貫木を以て敵兵數十騎を毆
 殺し家康を守護して凱歌を奏したり故に今猶ほ吉瑞の兵器として之を藏
 し參詣者をして隨意に一覽せしむ

瀧山寺 岡崎町の西北一里十町瀧村に在り山を瀧山と云ひ中に一條
 の溪流を挿み此流れに沿ひて村落あり乃ち瀧村なり、入口に仁王門あり
 飛驒の内匠の造る所と云ふ行くと五六町にして一小丘あり其石階を登れ
 ば頂上に達す本堂には藥師如來を安置し寺は役の行者か創建せしものな

り又其傍らに東照宮の社あり此地古大瀑布ありし故に山を瀧山と云ひ
 寺を瀧山寺と呼びしが近年其瀑水を水車に利用し今は瀑の眺め古への半
 ばにも及ばずと云ふ措むべし

猿投山 三州の西北隅に聳え尾濃二州に跨がるの高山にして老杉古
 檜全山を蔽ひ溪流潺々として清涼掬すべし山腹に猿投神社あり縣社にし
 て大雄命を祭り仲哀天皇元年の創建なりと云ふ、岡崎より里程五里二
 十町、人力車賃は猿投神社の阪下まで凡そ三十錢内外なるべし

●安城停車場 (愛知縣三河國碧海郡安城村に在り)
 ○安城 は東海道を距る南一里の一村落にして戸數五千四百戸、人口
 二千八百人一村農を以て業とす

●新谷停車場 (愛知縣三河國碧海郡新谷町字花捨に在り)
 ○新谷 は舊土岐氏の城市にして境川の海口に位し戸數四百七十戸、
 人口二千六百餘人、白魚を以て名産とす此地より知立まで一里餘

○知立 是五十三驛の一にして元と池鯉鮒と書す戸數六百餘戸、人口三千三百餘人、岡崎を距る三里廿八町なり驛内に
 知立神社 あり驛の西口街道より北折すれば一町にして境内に到る延喜式内の神社にして昔不合尊を祭り今は縣社なり、老樹翁壽社を圍み境内に多寶塔、神籬門等あり毎年四月大祭を行ひ神輿は知立、荻谷を渡る是日近郷より參詣する者頗る多しと

八ッ橋古跡 知立驛より東十町許り街道の北側に八ッ橋道と記せし榜示杭あり茲より北に曲り行くと七八町にして八橋村に抵る小川あり南より北に流れ傍らに小丘あり此近傍乃ち八ッ橋の古跡なりと去れど今は一本の燕子花をも見ず近傍は皆な田園にして古への餘をも止めず八ッ橋の事は伊勢物語、古今集にも見え殊に業平朝臣が「かさつはた」の五文字を折句として詠出たる「から衣さつ」馴はしつましめればはるく來ぬる旅をしぞ思ふ」と云ふ一首より名高し、今ま小丘の上に業平塚なるものあり

り後人が其名を假りて建設せしまでにて據るるあるにはあらず

●大府停車場 (愛知縣尾張國知多郡大府村に在り)

○大府 是武豊線路の分岐する所にして荻谷の西一里、大高より半田、龜崎に至る街道に方り戸數二百七十戸、人口一千四百餘人、此地より南十五町に緒川ノ里あり海老を以て名産とす又村内地藏堂の前に澤瀉ノ井あり地藏の加護にて安産すと言傳へ土俗此水を生湯に用ふ (以下龜崎、半田、武豊三停車場は武豊支線なり大高に至りて東海道幹線に復す)

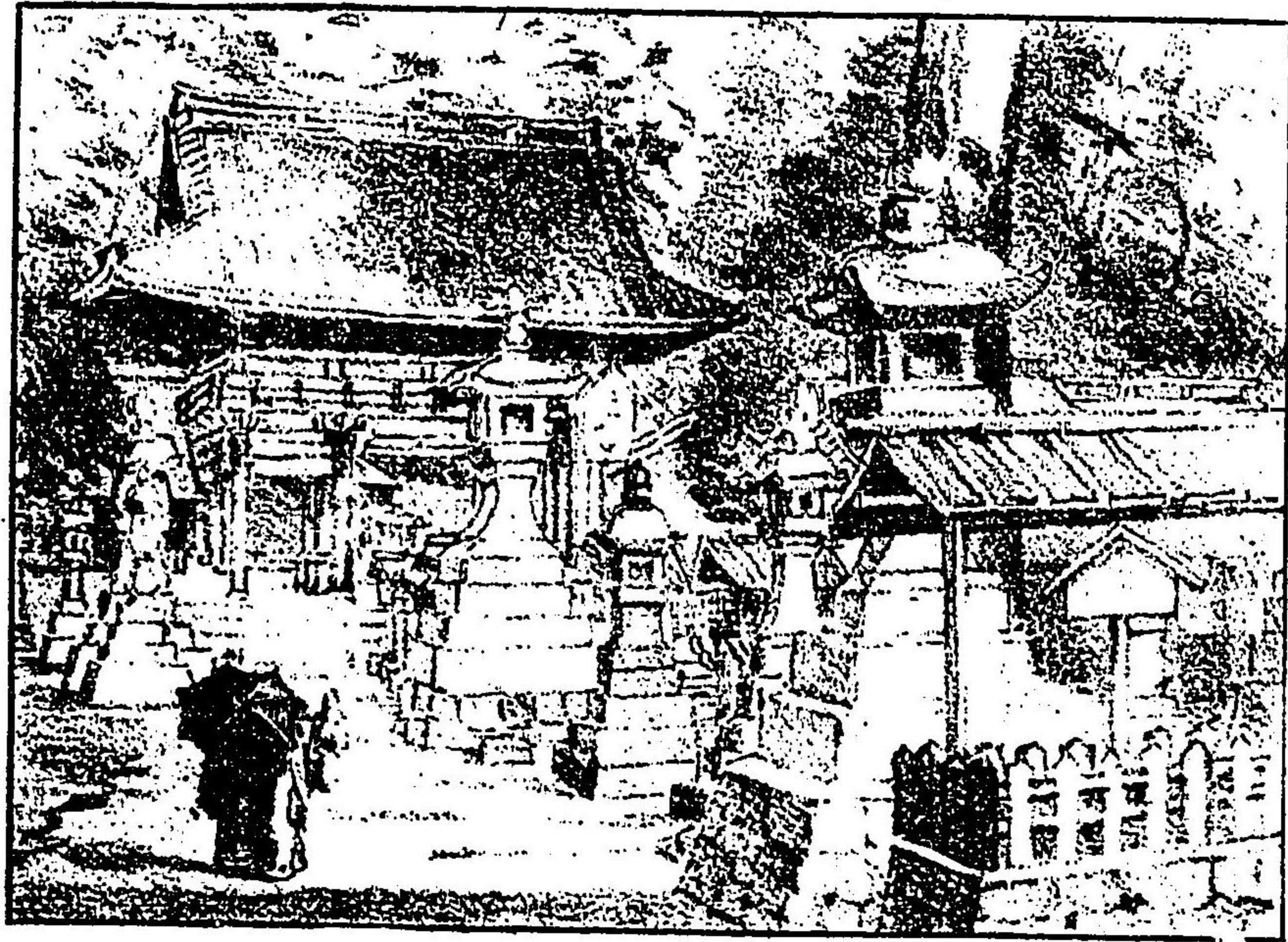
●龜崎停車場 (愛知縣尾張國知多郡龜崎町に在り)

○龜崎 是尾張國知多郡の東岸に位し衣ヶ浦に瀕する小港灣にして灣深からずと雖も亦絶えず和船の出入するあり市街は三角形を爲し戸數一千六百戸、人口六千七十餘人、對岸高濱村(碧海郡)と相距る海路僅かに十八町、南半田港へ一里を隔つ、此地は釀酒を以て名高く町内數十軒の釀造元あり旅店は中口屋新左衛門外數軒あり

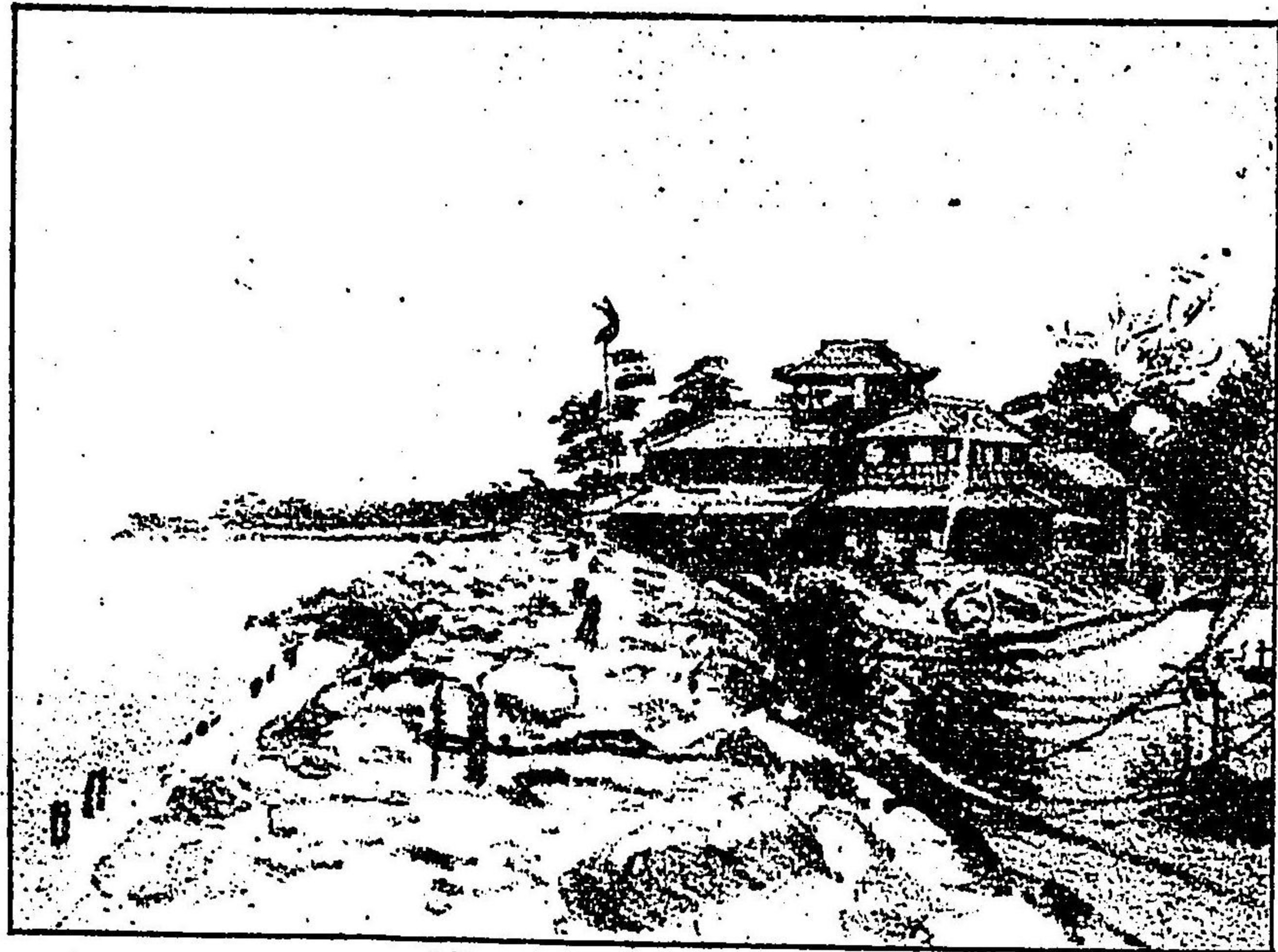
●半田停車場 (愛知縣尾張國知多郡半田町に在り)

○半田 是成岩町に接し東衣ヶ浦に面して港灣あり郵船會社の定期航海船は隔日横濱との間を往復し其他小汽船和船等の發着忙はしく商業の繁盛なるは知多灣中の諸港に於て此地を以て最とす、戸數一千一百餘戸、人口五千二百餘人、其隣町成岩は戸數人口とも幾ど半田町に一倍す、半田も亦清酒の産地を以て名高けれども其特殊の産物は酢にして酒は之に亞ぐが如し旅人宿は新文亭(小栗及兵衛)瀧利(瀧本利右衛門)其他數軒ありて孰れも汽車汽船荷客の取扱ひ業を兼ね

大野海水浴 是知多郡中夏季殊に繁昌を極むるの地にして同郡の西部海岸即ち半田港とは全く反對の海濱に在り半田より里程三里六町、人力車賃片道廿五錢、一時半にして達す、大野町は戸數四百三十餘戸、人口二千二百人西は伊勢灣に枕みて遙かに四日市町と相對し西南には朝熊山、西北には多度山を遠望し白帆點々海面に及び涼風颯々樓上に滿つるなど



津島神社之景



大野海水浴場

皆以て心神を養ふべし此地は古來より海水浴として名ありしが去る明治十五年長與專齋氏實地を檢査し次で後藤新平氏其海水を分拆して水浴に効驗あることを證明せし以來繁昌轉た繁昌に赴き夏日浴客の多きは相州大磯と東西相伯仲するに至れり、海水浴旅館は海濱館、恩波樓の二軒最も宏壯にして和泉屋、信濃屋、兩角等之に亞ぐ割烹店には金谷園、茶松、桶文等あり海濱館の宿料は一泊上等五十錢、中等廿五錢、並十錢、魚貝は新鮮にして且廉價なり、大野を距る七町宮山齋年寺に雪舟筆の達磨大師二祖慧可斷臂圖を秘藏す九鬼臨時寶物取調委員長會て此地を巡回し會々此幅を一覽して非凡の神品なりと賞し乃ち鑑査狀を下附せられし品なり其他大野町には醫師安富、湯淺の二氏あり、裁判所出張所あり、警察署あり、郵便電信局あり、其南一里にして常滑町に到る、常滑は有名なる陶器製造地にして就中土樋の如きは其需用最も多くして毎歲數百萬個を各地に輸送すと云ふ、偕前には半田よりの道順を記せしが若し名古屋地方より大野

に到らんとするには熱田港より汽船に乗るべし熱田より大野まで海上五里汽船は毎日一回づゝ兩所の間を往復し其賃金は上等三十錢、中等二十錢、下等十三錢一時間にして達す其外熱田、名古屋、四日市等へ和船の往復するあり

●武豊停車場 (愛知縣尾張國知多郡武豊町に在り)

○武豊 は半田港の南一里餘、等しく東知多灣に面し灣内水深くして大船巨舶の碇泊に便なり停車場は海濱近き所にありて鐵道假棧橋は海中に斗出する凡そ百間船積み貨物運搬の便に供ふるものなり、武豊町は戸數七百戸、人口三千七百八

鳳翔山 は武豊町背後の小山にして樹木稀疎、崖頭稍々平かなる所に一閣あり去る明治二十年聖上此地に巡幸ましまし陸海軍大演習を天覽あらせられたる處とす此山元と迎戸山と稱せしが同年五月今の名に改む近頃此の山上に養生館なるものを新築し患者を治療し傍ら身體榮養の場に

充つ、空氣清良、風色絶佳、加ふるに其海濱は水浴に適するを以て夏季に至れば避暑を兼ねて此山に遊ぶ者多し

師崎海水浴 は知多郡師崎港に在りて武豊より南の方海陸共に四里半を隔つ先づ人力車にて河和村に至り同所より仕立舟にて師崎に至らば其賃金も舟車を併せて五十錢の上に出でず、海水浴旅館を養春館と云ひ家屋宏壯眺望快潤其海濱浪穩かにして汚物なき處を擇びて游泳場に充つ、師崎は知多郡中良港の一にして船舶常に輻輳し東は豊橋、西は神社港、鳥羽等に至る便船あり又師崎の岬を距る海上一里の東南に篠島あり周回凡そ四十町嶋民皆漁獵を以て業とす延元三年後村上天皇が此沿海を航し給ひし際上陸して蹕を駐めたまひたる舊跡今猶ほ此島に存す

豊濱海水浴 は師崎港の西凡そ一里豊濱村に在りて武豊を距る陸路五里餘、人力車賃四十錢、熱田よりは海上十四里を隔て日々便船あり旅店は大西屋清四郎、梅屋清吉の二軒にして宿料は泊二錢、一月滞在費は

三圓五十錢以上、其海邊の眺望は略ぼ師崎に同じ、海濱には漁家多く魚類を熱田港に送る日々數萬尾なり（以下再び東海道幹線に戻る）

●大高停車場（愛知縣尾張國知多郡大高村に在り）

○大高 は舊名氷上の里と云ひ後ち大鷹と改む鳴海より龜崎半田に至る街道に衝り戸數六百三十戸、人口三千五百三十人にして鳴海驛を距る僅かに十町、村の東北八町にして鷺津城趾あり今川義元合戦の時楯籠りし城なりと云ふ又北四町にして丸根砦の跡あり義元合戦の時佐久間大學の居りし處なりとぞ、此村一種の野菜を産し大高菜と云ふ

○鳴海町 は愛知郡に屬し五十三驛中繁華なる一市街にして戸數一千百九十戸、人口六千四百九十人、昔しは鳴海潟と稱し又宵月の濱と云ひ此邊都て海濱にして満潮の時は旅人上野といふ街道を往復せしと云ふ夫の太田道灌が「遠くなり近く鳴海の濱千鳥」云々と詠たる和歌を見て知るべし、驛内に鳴海神社あり郷社にして日本武尊を祭る又名産鳴海絲繆は

遠近に名あり多くは隣村有松にて之を製す

桶狭間古戰場 は東海道の有松驛より南に折れ凡そ十二三町の處に在り大高停車場より距離一里二十町、人力車賃十錢、有松の旅店にては其案内を爲し又古戰場の繪圖を嚮ぐ、永祿三年五月今川義元大舉して尾張に入る歩騎總て四萬勢、織田信長兵三千を率ゐて間道より襲ひ其中堅を衝く會々強雨大に至り義元終に敗績して毛利高定の爲めに刺さる今は原草荒涼の中に古碑一基を存す即ち義元の墓なり

●熱田停車場（愛知縣尾張國愛知郡古澤村字東熱田に在り）

○熱田町 は名古屋市の町續きにして其東に接し南に熱田港を擁して伊勢灣渡航の津頭に方り熱田神宮あるを以て一に宮と稱す戸數四千二百戸、人口一萬八千七百人、愛知郡役所、熱田區裁判所、警察署、郵便電信局あり熱田港よりは四日市、桑名、津、神社港等の間を往復する汽船日々數回發着し旅人宿は多く汽船乗客の取扱ひを兼ね、海濱木芽浦の東に魚市

場ありて毎朝知多郡各地より送り來る魚類は積んで丘を爲し以て名古屋以西各地の需用に充つ其盛んなると殆ど東京の魚河岸と相似たり又尾頭町に尾張紡績所のり尾濃大地震の際其巨屋壞倒して死者數人を出せしが今は新築全く成りて舊觀に復せりと云ふ、旅店の重なるものは

- 岡田屋 (岡田 淺七) 熱田町字神戸町 紀伊國屋 (柏木易右衛門) 同 上
- 伊勢屋 (木岡久右衛門) 同 上 桔梗屋 (土屋 善七) 同 上
- 大森升屋 (大森仙右衛門) 同 上 神戸屋 (……………) 同 上

等にして中には回漕店を兼業とするものあり、東海鐵道より關西鐵道に移らんとする者は此地にて瀛車を下り瀛船にて四日市に渡るべし熱田四日市間瀛船賃は上等四十錢、中等廿五錢、下等十五錢なり

熱田神宮 は官幣大社にして伊勢太神宮の次に列し昔し日本武尊が御姨倭姫命より授かり給ひし草薙の寶劍を祀り祭神は即ち日本武尊并に土用殿なり本社の構造は宏壯優美にして自から威徳の厚さを表し境内廣寬にして數百基の燈籠あり八劍宮は本宮の南端にあり其他末社と稱する

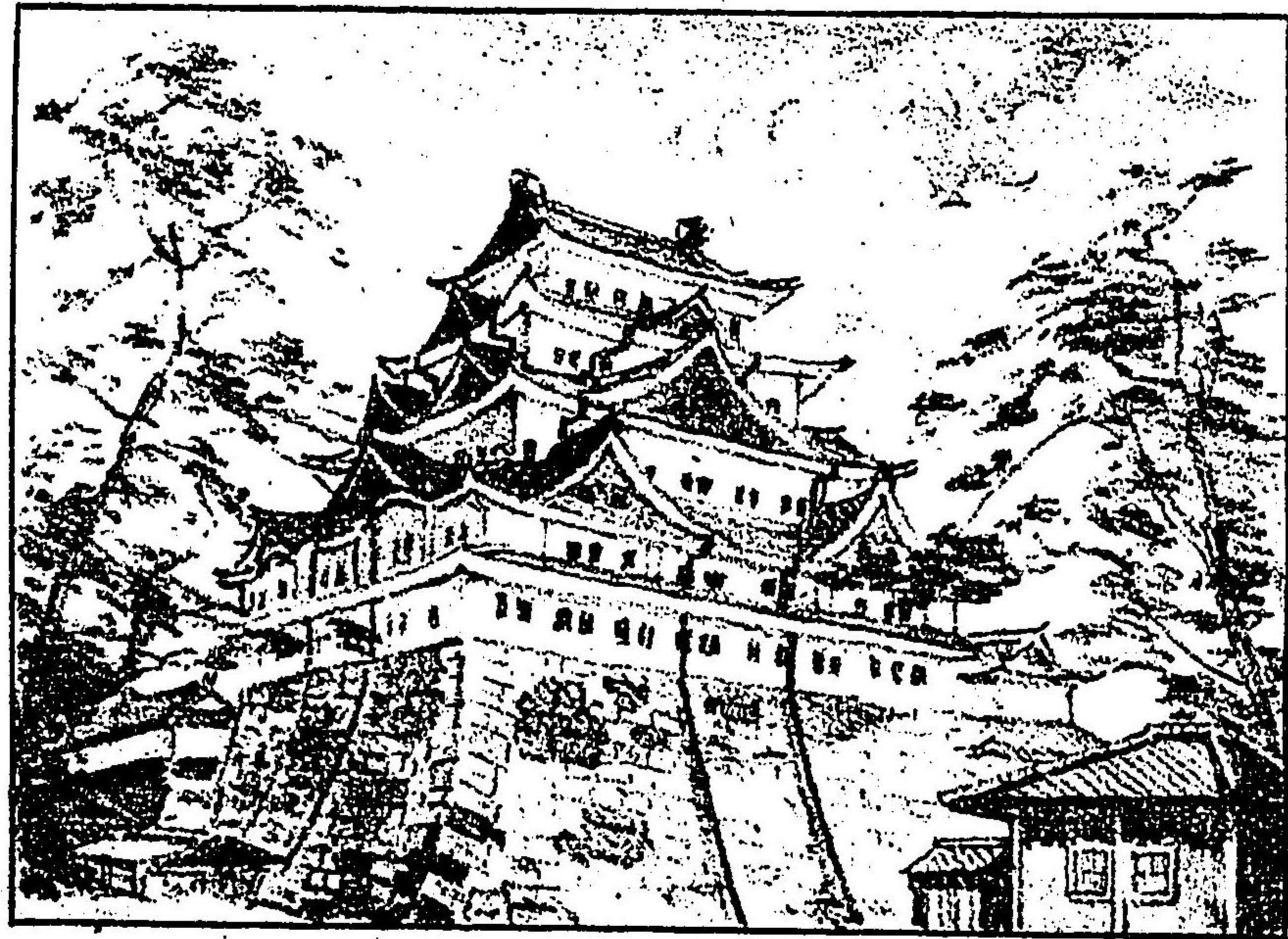
ものには高倉神社、日破神社、氷上神社、孫若神社、寶田神社等あり毎年五月大祭を行ひ是日勅使の參向あり又昔し正月には踏歌の神事、二月十一日には烏喰の神事を行ひ來りしが今は此事廢せられしと云ふ

白鳥の御陵 は熱田町字白鳥町法持寺本堂の裏手に在り丘上老樹蒼鬱として日光を遮り其入口に華表あり昔し日本武尊東征凱旋の後ち伊勢國にて薨じ給ふや朱鳥年間草薙の劍を熱田に遷坐すると同時に尊の所持し給ひし太刀、鉾、鏡等を此地に封じ陵を造りて神靈を祭る白鳥の御陵即ち是なり其白鳥と稱する所以のものは尊の靈魂白鳥と化して琴彈ヶ原、能褒野等を翹揚せし事あるに由ると

●名古屋停車場 (愛知縣名古屋市笹島町に在り)

○名古屋市 は古へ波越又は那古野と書し慶長十五年徳川義直兄忠吉に代りて封を此地に受け同年名古屋城を増築せしより世々徳川氏の治所として名高く維新後藩を廢して縣治となると雖も猶ほ三府に亞ぐの大都

會にして其繁盛は毫も幕政の時代に劣らず、地は尾張國の中央平野の南部に位し東海道の要路に方り南方熱田町に連なりて海運の便を有し鐵路は東西兩京に通じて交通自在、彼の第一期、第二期豫定鐵道線路の開通するに至らば此地の殷賑猶ほ今日に幾倍するや知るべし、戸數四萬八千四百戸、人口十七萬二千六百人、市坊三百十九を有し廣袤は東西一里三町、南北一里五町其商工の盛んなる寧ろ京都に譲らずと稱す、市内に愛知縣廳、市役所、控訴院、地方裁判所、病院、醫學校、師範學校、中學校、商業學校、測候所、第一第二第三警察署、郵便電信局あり銀行會社にては第十一銀行、第四十六銀行、第三百二十四銀行、名古屋銀行、伊藤銀行、第一銀行支店、三井銀行支店、電燈會社、名古屋紡績會社、建築會社、尾州材木會社、明治濠會社、名古屋米商會所、新聞には金城、新愛知、扶桑等あり又神社佛閣にては東照宮、須佐之男神社、若宮神社、東西本願寺掛所、五百羅漢、建中寺、萬松寺、眞福寺、政秀寺、法華寺等あり大須觀音は境内常に雜沓し觀



名古屋城



熱田神宮

物あり露店あり寺内に五層塔ありしが先頃火災に罹りて焼失せり又例に依り當市に於る旅館の重なるものを掲ぐれば左の如し

- 秋琴樓(井東英太郎)市内榮町三丁目
- さんか(伊藤嘉助)同 伏見町二丁目
- 丸文(丸川文左衛門)同 上園町二丁目
- しな忠(信濃屋忠兵衛)同 富澤町三丁目
- 鶴鳴館(米屋伍平)同 門前町三丁目
- 松宗(河合宗七)同 榮町三丁目
- 山田屋(山田もこ)同 榮町四丁目
- 丸屋(丸屋さとし)同 本町八丁目
- たはら(田原せい)同 富町三丁目
- 信忠支店(……)同 停車場前

其他割烹店には秋琴樓(旅店を兼ね)得月樓、河文、魚半以下十數軒あり遊廓は花園町にありて旭廓と稱し妓樓の名あるものを梅本、三朝、金波、壽、清々の各樓とす又名古屋の名産を擧ぐれば名古屋扇、七寶燒、一閑張、漆器、富士見燒陶器、佐々飛白、袴地等なり

名古屋城 は市の正北にあり天文九年織田信秀の築く所にして加藤清正の繩張に係ると云ふ慶長十五年徳川義直の當國に封せらるゝや大に其舊城を増築し五層の天主閣上に一對の金鯨を置く之を以て古來金城の名

あり其銃の高さ八尺七寸、胴の周り七尺三寸、明治維新後大政王室に復歸するに方り明治四年藩主徳川義宣侯金銃を宮中に献納し後ち澳國萬國犬博覽會に出品せし事ありしが今や之を本城に還付せられ金城の名全く空しからざるを得たり、城内は今第三師團の本營となり城外空地を以て練兵場に充つ、停車場より本城まで距離凡そ十五町

小牧山公園 是東春日井郡小牧町にあり名古屋市を距る正北四里（人力車賃廿五錢）山太だ高からずと雖も尖峯突起して數里外より之を望むべく樹木鬱然として翠色瀾らんとす近年此山を開鑿して公園地と爲し山巔に創垂館あり、天正年間徳川家康此山に據りて豊臣秀吉と抗戦し秀吉をして大に畏懼の念を生せしめ爾後家康の名天下に赫々たると三百年國下泰平の基を闢きたるは實に此山より起れり之を小牧の役と云ふ

豊國神社 是知多郡織豊村字上中村にありて名古屋市を距る西方一里此地は豊臣秀吉出生の地にして昔しは同村常行寺地内に大閤堂を設け堂

中に秀吉の肖像を安置せしが近年社殿を創建し豊國神社と稱して其靈を祭り祭日には名古屋市より參詣する者多し又同村に清正公靈殿ありて其西に今猶は加藤清正の舊宅趾なるものを存す

甚目寺 是海東郡甚目寺村に在りて名古屋市を距る西方二里十町眞言宗にして開基の年月詳かならず或は云ふ推古天皇の五年に創建せりと寺記に曰く昔し甚目龍鷹と云ふ漁夫あり一日漁舟を泛べて網を海中に投せしに偶然紫金色の觀音を得たり龍鷹自ら壇那となりて寺を創建し此の正觀音を以て本尊となせり故に龍鷹の姓を以て寺號となせりと、其堂閣は高雅壯觀にして賽人常に絶わぬ又甚目寺村より西二里三十町にして

○津島町 是遠す、津島は海東郡中繁盛なる一市驛にして戸數二千三百五十戸、人口一萬千八百人、海東郡役所、區裁判所、郵便電信局、警察署等あり又市街に有名なる津島神社あり縣社にして素盞鳴尊、奇稻田姫、天忍穗耳尊以下八神を祭り弘仁九年の草創に係る社殿、末社、神門に至